

352  
145



\*0050245000\*

1

0050245-000

特217-189

能率的合理的国文解釈

石井清澄・著

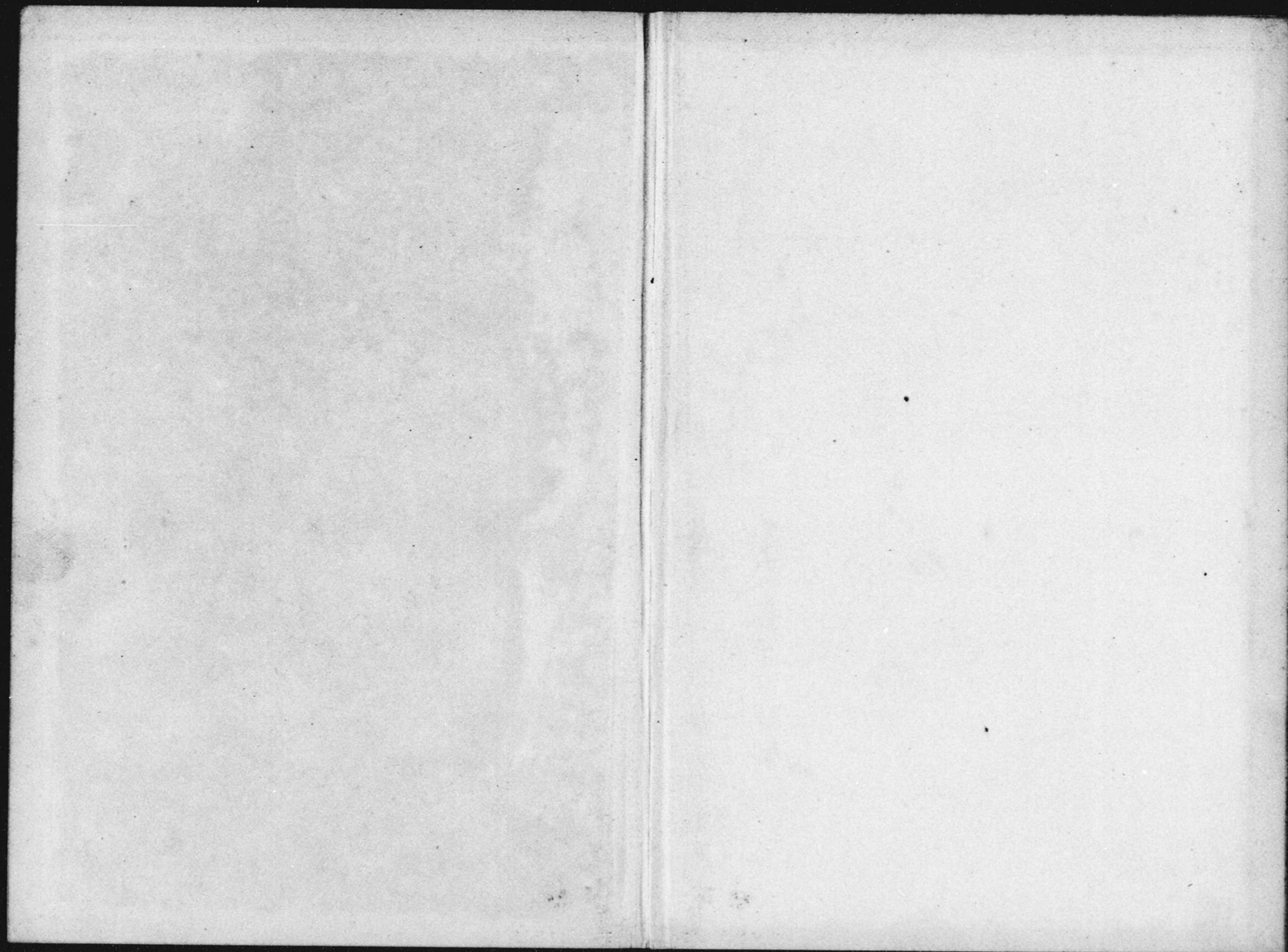
精文書院

昭和8

AHJ

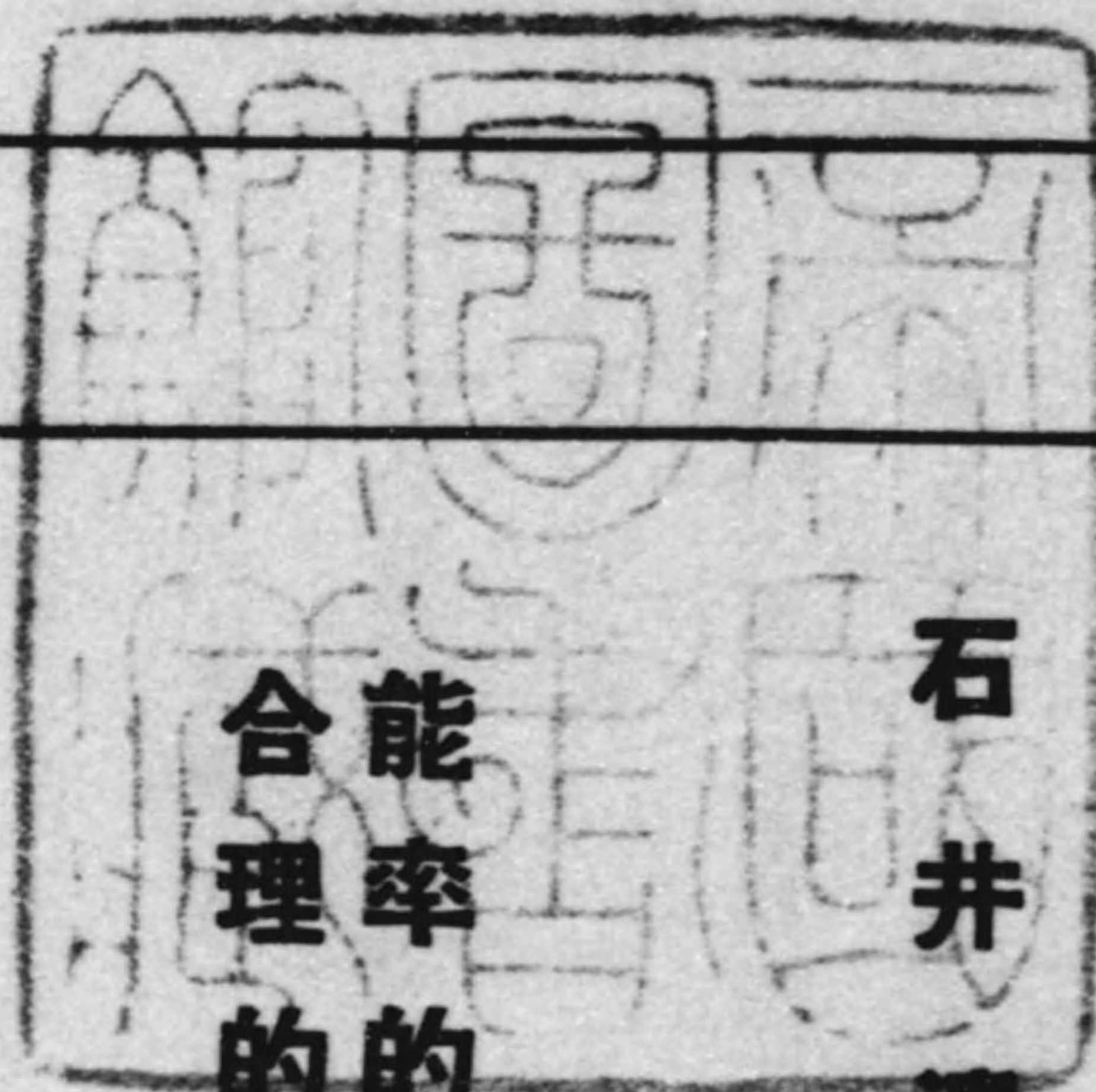
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日  
付で文化庁長官の裁定を受け使用するものです。







特217  
189



石井清澄著

合理的  
能率的

國文解釋





自序にかへて

”自信ある準備の結了”

頼むは 只 是れのみ。

断じて この峻峰を 征伏せねばならぬ。

登龍門第一關は陥落するであらう。

再び言ふ。

”完全なる準備の結了”

それは 戦捷 だ。

受験生諸子は出世門第一關を前にして、断じて完全なる準備の結了に全力を傾倒せねばならぬ。青年立志の本懐ながら蓋し一苦闘である。



自分は微力ながら職を中學に奉じ、實際直接、受験生諸子の悲壯なる準備生活に關係もし、目撃する機會を與へられて居る一人である。如何にかして此の苦闘を効あらせ度い。此れは偽らざる衷情である。

此の書は此の一念から生れ出たき云つてよいと思ふ。

能率的に

合理的に

理會的に

さうかして斯様な方法で始終思ひ續けて居つた。本書には拙いながら全篇に此の心が生きて居なければならぬ。此處に、私はささやかながら、此の仕事の意義を自覺し得る事を喜ぶものである。

今上梓して愈々諸君に見ゆるに至つた事は著者の最も欣悦する處である。願くは受験生諸君

座右の伴侶として、著者編述の素志に添はん事を。

尙ほ本著編述に當り、大方諸賢の垂れ賜はれる御懇篤なる御指導御鞭撻を、特に宮永印刷所の寄せられたる多大の好意に對し深甚の感謝の微忱を披瀝して筆を擱く。

昭和八年八月

著者 石井清澄 識

銀母、金母玉母、奈爾世武爾、麻佐禮留多可良、古爾斯迦米夜母。

しろがねも黄金も玉もなにせむにまされる賢子にしかめやも

萬葉集——山上憶良



詩形十七文字を出でずとも包蔵する所は天地無限の幽情なり。宇宙を籠めたる崇嚴相なり。時間的空間的に八絃に磅礴たる造化の隱微なり。立体的にして且つ動的なる自然相なり。然して、此の時間的、空間的に乾坤を蔽ひ廣表に渉る縹渺たる神韻を表出するに當りては、十七字克く其の粹を探り、其の機微を捕へ、以て殆んど瞬間的斷面的点出展開を行ひ、時間的空間的なる立体相と主観とは無形の餘韻と暗示とに斐然ならしめんとす。古人の作と否とを問はず、名句に之を窺はんか、枚舉固より數ふべきに非れども、或は「立秋に大鐘つくや瘡法師。」に見よ。或は「長々と川一筋や雪の原。」に見よ。或は又「應々と云へど叩くや雪の門。」「大原や蝶の出で舞ふ朧月。」何れとしてその表出点出の客觀的、瞬間的、斷面的展開にして、固定的ならざる無きが如し。然もその包蔵する處、何ぞその天地乾坤に充塞するの一氣ある。即ち僧の手に操らるゝ鐘樓撞木の綱、その綱一度動きて餘韻、閉寂の山野を掠むるの瞬間より、含蓄する所、何ぞ時間的立体的にして動的なる。更に、雪皚々の大平原、吾人際涯を知らず。銀色に染め出し流るる一河の帶、その果てを見ず。何ぞその空間的無涯の暗示ある。何ぞその廣袤に渉る無限の象ある。更に「應々と云へど叩くや、…」音は響きて耳朶に徹す。詩趣の焦点一つに此處に集まる。而して点出一つに是れ瞬間的なり。更に又おぼろ／＼の夜景、蝶のあくかれ出でしすがた、何ぞそれ優なるの情趣ぞ。展出する十七文字、一つに客觀的、斷面的の大原の相なれども、一詠一過瞬裏に印する所、何ぞ立体的にして生動的なる。何ぞ神韻縹渺の造化幽光の顯現なる。

著者——俳句本質我觀中より——

### 合理的 國文解釋 目次

最近入試問題集編(徒然草、增鏡、神皇正統記、東關紀行、方丈記、十訓抄、十六夜日記、等)……………一——一六

第一編 徒然草……………一——八〇

第二編 增鏡……………八一——一四五

第三編 神皇正統記……………一四六——一七二

第四編 東關紀行……………一七三——一九七

第五編 方丈記……………一九八——二三六

第六編 十訓抄……………二三七——二四九



第七編 十六夜日記……………二五〇——二六八

第八編 平家物語……………二六九——二八七

第九編 平治物語……………二八八——三〇五

第十編 太平記……………三〇六——三二〇

第十一編 謠曲……………三二一——三四三

第十二編 大鏡……………三四四——三六二

第十三編 伊勢物語……………三六三——三八七

——(目次終り)——

# 能率的 合理的 國文解釋

石井清澄 著

## 最近入試問題集抄

昭和七年度、出題例 (徒然草・増鏡・神皇正統記・東關紀行  
方丈記・十訓抄・十六夜日記……等)

【徒然草】 【昭七、横濱高商】 つぎさまの人は、あからさまに立出でて、けふありつる事とて息もつきあへず語り興するぞかし。よき人の物語するは人数多あれど一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は誰さもなく数多の中にうちいでて見る事のやうに語りなせば皆同じく笑ひののしる、いとらうがはし。(徒然草五六段) (徒然草解釋篇【三〇】の直後にある文なり。解釋篇中之を省けり。)



【徒然草】 【昭七、福島高商】 何ごも入りたためましたるぞよき。よき人は知りたるごごとて、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎より出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。(徒然草第七九段)

【徒然草解釋篇 五六頁 参照】

【徒然草】 【昭七、六高】 さしたる事なくて人のがり行くはよからぬごとなり用ありて行きたりとその事はてなげ疾く歸るべし久しくゐたるいとむつかし人と對ひたればごはおほく身もくたびれ心もしづかならず萬の事はりて時をうつす互のため益なしといはしげにいはんもわるし心づきなき事あらんをりはなく、その由をいひてん。(徒然草一七〇段)

【徒然草解釋篇 七三頁 参照】

【徒然草】 【昭七、名古屋高商】 人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむはなごがまじごにや、心まごはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事もなほさだかにと思ひてや問ふらむ。またまごに知らぬ人もなごかなからむ。うららかにいひ聞かせたらむは、おきなく聞えなまし。(徒然草二三四段)

【徒然草解釋篇 七七頁 参照】

【徒然草】 【昭六、和歌山高商】 しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひさのみぞ、せむ方なき。人静まりて後、長き夜のすまびに、何ごなき具足せりしたため、残し置かじと思ふ反古なごやり棄つる中に、なき人の手ならひ繪かきすまびたる、見出でたるこそ、ただその折のこちすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なごも、心なくてかはらす久しき、いごかなし。(徒然草二九段)

【徒然草解釋篇 三六頁 参照】

【徒然草】 【昭六、大阪女高専】 雪のおもしろう降りたりし朝人のがりいふべき事ありて文をやるとて雪のごご何ごもいはざりしかへりごごにこの雪いが見るご一筆のたまはせぬほどのひがひがしからむ人の仰せらるるご聞き入るべきかはかへすがへすも口惜しき御心なりさいひたりしこそをかしかりしか今はなき人なればかばかりのごごも忘れがたし。(徒然草三一一段)

【徒然草解釋篇 四二頁 参照】

【徒然草】 【昭六、神戸高商】 大事を思ひたむ人は、さりがたく、心にかからむことのほいを遂げすして、さながら棄つべきなり。しほしこの事はてて、同じくは、かの事さたしおきて、しかじ



かのこと、人のあざけりやあらむ。行く末難なくしたためまうけて、年頃もあらばこそあれ、その事待たむほごあらじ、ものさはがしからぬやうになご思はむには、えさらぬここのみ、いご重りて、ここの盡くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに少しこころあるきはは、みな、このあらましにてぞ、一期は過ぐめる。(徒然草五九段)

【徒然草解釋篇 四九頁 参照】

【徒然草】【昭六、臺北高商】世に語り傳ふるこまこまはあいなきにや多くは皆そらこまなりあるにもまして人はものをいひなすにまして年月過ぎ境も隔りぬればいひたきまに語りなして筆にも書きごめぬればやがて定りぬ道々の物の上手のいみじき事なごかたくななる人のその道知らぬはそぞろに神の如くにいへごも道知れる人は更に信も起さず音に聞くと見る時は何ごまかはるものなり。(徒然草七十三段)

【徒然草解釋篇 五四頁 参照】

【徒然草】【昭六、東京高師】よろづのこがあらじごおもはば何事にもまごありて人をわかすうやうやく詞すくならんにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども殊にわかかたちよき人のこごうるはしきは忘れがたく思ひつかるものなりよろづのこがは馴れたるさまに上手めき所

えたるけしきして人をないがしろにするにあり。(徒然草二三三段)

【徒然草解釋篇 七六頁 参照】

【徒然草】【昭六、大分高商】主ある家にはすろなる人心のままに入りくるこまなごあるじなき所には道行き人みだりに立ち入り狐鼻やうのものも人げにせかれれば所得がほに入り住みこたまなごいふけしからぬかたちもあらはるものなりまた鏡には色彩なき故よろづの影來りてうつる鏡に色かたちあらましかばうつらざらまし虚空よくものを容るわれらの心に念々のほしきまに來り浮ぶも心さいふものなきにやあらむ心に主あらましかば胸の中にそごべくのこと入り來らざらまし。(徒然草二三五段)

【徒然草解釋篇 七九頁 参照】

【増鏡】【昭七、和歌山高商】あづまの夷ごもやうやう攻め上るよしきこゆもさより東にある武士ごもわれさきにさきほひ参る木の丸殿にはさこそいへむれむれしきものなしいかになりゆくべきかさいご心細く思しみだる。わが御心もての御事なればかこつかたなけれご故郷の空もあはれに思し出でらる秋も深くなりゆくままに山の木の葉のうちしぐれ谷の嵐のおごづるも敵のきはふかと肝を消す御すまひいつしか御身をかへたるこごちしたまふもあぢきなし。—増鏡—

【増鏡解釋篇省略】



【増鏡】【昭七、高松高商】年もかへりの所々浦浦あはれなる事をのみおぼしなげく佐渡院（順徳上皇）あけくれ御行をのみし給ひつなほさりてもとおぼさる隠岐（後鳥羽上皇）には浦よりをちのはるばるを霞みわたれる空ながめ入りて過ぎにし方かきつくしおもほしいづるに行方なき御涙のみぞごまらぬ。―増鏡―

【増鏡解釋篇 一二三頁 参照】

【増鏡】【静岡高校】野中の清水二見の浦高砂の松など名ある所々御覽じわたさるるもかからのみゆきならばをかじうもありぬべけれどよろづかきくらす御みだり心地に御目さまらぬもわれながらいたうくんじにけるかなとおぼさるいさ高き山のみれに花おもしろくさきつづきて白雲をわけ行く心地するもえんなるに都のこさかすくおぼしいでらる。

花はなほうき世もわかすさきてけり都も今やさかりなるらむ。―増鏡―

【増鏡解釋篇 一三八頁 参照】

【増鏡】【昭六、東京女子大學】このおはします所は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは、少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に、葦ふける廊など、けしきばかりこそそぎたり。誠にかりそめに見えたる御やどりなれど、さる方に

なまめかしくゆゑづきてしなさせ給へり。塩風のいとこちたく吹きくるを聞しめして、

同じ世にまたすみのえの月や見む、

今日こそよそにおきの鳥守。―増鏡―

【増鏡解釋篇 一一九頁 参照】

【増鏡】【昭六、東京高校】おりの御門（花園）は御兄の本院（後伏見）さひさつ持明院に住ませ給ふもさより御子のよしにておはしませばまいてひとつ院の内にていささかも隔なく聞えさせ給ふいと思ふやうなる御ありさまなりさるべき御中さいへども昔も今も御腹などはりぬるはいかにぞやそばそばしき事もうちまじりくせあるならひにこそあるをこの院の御あはひまめやかにおもほしかはしたるいさありがたうめでたし。―増鏡―

【増鏡解釋篇 一二七頁 参照】

【増鏡】【昭六、山口高商】さて都には二十四日の夜六波羅より常陸守時知馳せまゐりて百敷の中をあさり騒ぐ。そのほご人の曹司などにおのづから落ちのこりたる女房の心地いはんかたなしおはします殿を見れば近き御厨子御調度などもなにくれ硯などもさながらうちちりて只今までおはしましけるあさ見えながら宮人などになし……錦の几帳の内につかれまじつる后の宮も何の儀式もなく忍びてあわていでさせ給ひぬればあたりあたりかきはらひ時の間にいさあさましく御簾几帳などふみしだきひきおとして火の影もせず。ここかしこもくちがりてうちあれたる心地す。



今朝まで九重の深き宮の中に出て入りつかへつる男女一人もこまらず。えもいはぬ武士どもうちり荒々しげなるけはひに續松高くまぎて細殿渡殿何くれ眼蔭さしてありきたるけしきけうごくもあさまし。世はうきものにこそ。時の間にげに心あらん人人はやがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺ゆる。(増鏡)

問。右は後醍醐天皇が都を脱出せられし時のことを書いた文ですが、傍線を引いた言葉を書きぬき漢字で書いてあるものには讀ミガナをつけ、各語句の大意を説明してください。假令へば「九重の深き宮」大内裡のこゝに眼蔭<sup>マカゲ</sup>さして眼の上へ手をかざすこゝで、精密な觀察を要する時の仕草です。といふやうに。一増鏡

【増鏡解釋篇 一三〇頁 参照】

【増鏡】【昭六、陸士】美作の國におはしまし著きぬ。御心ちなやましくて、この國に二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御やどりなれば、物深からで、さぶらふ限りの武士ども、おのづからけちかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君もおもほしつづくる事ありて、

あはれさはなれも見らむわが民と思ふ心は今もかはらず。一増鏡

【増鏡解釋篇 一三九頁 参照】

【増鏡】【昭五、東京高等商船】かくて世を離かしたため行ふ事も、ほごく古きには超えた

り。まめやかにめざましき事も多くなりゆくに、院の上、忍びて思したつ事なごあるべし。近くつかうまつる上達部殿上人、まいて北面の下藤、西おもてなごいふも、皆この方にほのめきたるは、あけくれ、弓矢兵仗のいさなみより外のこゝなし。劍などを御覽じ知るこゝさへ、いかで習はせ給ひたるにか、道のものにもややたち勝りて、かしくおはしませば、御前にてよきあしきなご定めさせ給ふ。一増鏡

【増鏡解釋篇 九六頁 参照】

【増鏡】【昭五、和歌山高商】次ノ文章ノ意味ヲ平易ニ解釋セヨ。

御道なかげになりぬれば、御送の者共上下、都出でしよりも猶花やかに今めかしうさうぞきかへたり。大方はあやしうさまこゝなる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々心づかひしたる氣色なごは、かうさまの御ありきを見えず、いこやんこゝなくなん。さはいへご今まで國のあるじにて、世をいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらん、いそねんころにのみ仕うまつれり。古への御幸ごもにはかやうはあらざりけりぞ、古き事知れる人々いひ侍りける。一増鏡

【増鏡解釋篇 一四〇頁 参照】

【神皇正統記】【昭七、富山高校】義朝父の首を斬らせたりしこゝ、大なる科なり。勳功に申し替ふるとも、自ら退くとも、なごか父を申し助くる道のなかるべき。(名行缺けはてにければ、いか



でか終にその身を全くすべき。滅びぬる事は天の理なり。およそかかる事は、その身の科はさる事にて、朝家の御誤なり。よく／＼案あるべかりけることにこそ。その頃名臣も数多ありしにいかがいませしにや。 — 神皇正統記 —

【神皇正統記解釋篇 一六二頁 参照】

【神皇正統記】 【昭七、大分高商】 言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも君をないがしろにし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を踏むよりいたるならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは日月の光の變るにあらず草木の色の改まるにもあらず人の心のあしくなりゆくを末世さはいへるにや。 — 神皇正統記 —

【神皇正統記解釋篇 一六六頁 参照】

【神皇正統記】 【昭七、彦根高商】 凡そ王土に生れて忠を致し、命を捐つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵し、その後を憐びて賞せらるゝは君の御政なり。下として争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致すこと、自らあやぶむる端なれど、前車の轍を見ることは誠にあり難き習なりけむかし。此の頃よりのことわざには一度軍にかけあひ或は家の子郎從節に死ぬるたぐひもあればわが功におきては日本國を賜へなご申すめり。まことにさまで思ふ事はあらじなれどやがてこれより亂るゝはしこもなるな

り言語は君子の樞機なりといへりあからさまにも君を蔑にし人におこることはあるべからぬことにこそ。 — 神皇正統記 —

【神皇正統記解釋篇 一六七頁 参照】

【神皇正統記】 【昭七、横濱高商】 【明四二、海機。大九、神宮皇學】 凡そ王土に生れて忠を致し、命を捐つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵しその後を憐びて賞せらるゝは君の御政なり。下として争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致すこと、自らあやぶむる端なれど、前車の轍を見ることは誠にあり難き習なりけむかし。 — 神皇正統記 —

【神皇正統記解釋篇 一六七頁 参照】

【神皇正統記】 【昭五、東京高師】 人臣としては君を尊び民を憐み天にせくぐまり地にぬき足し日月の照すを仰ぎても心のきたなくして光にあたらざらむ事を怖ぢ雨露の施すを見ても身の正しからずして恵に洩れむことを願みるべし朝夕に稻の種を食ふも皇恩なり晝夜に水の流を飲むも神徳なりこれを思ひも入れずあるにまかせて欲を恣にし私を先として公を忘るゝ心あるならば世に久しき理あらじ。 — 神皇正統記 —

【神皇正統記解釋篇 一六五頁 参照】

【東國紀行】 【昭七、東京外語】 こよひは更にまごろむ間だになかりつる草の枕のまるぶじなれば



寢覺さもなき曉の空に出でぬ。岫くきが崎さいふなる荒磯の、岩のはさまを歩き過ぐるほどに、沖つ風  
烈しきに、うち寄する波もひまなければ、急ぐ潮干のつたひ道、かひなき心ちして、ほす間もなき  
袖の半までは、かけても思はざりし旅の空ぞかしなごうち詠められつ、いと心ぼそし。

—東關紀行—

【東關紀行解釋篇 一九三頁 参照】

【東關紀行】 【昭六、東京帝大農學部、教員養成所】 柏原さいふ處を立ちて、美濃國關山にもか、  
りぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしくれわたりにて、日影も見えぬ木の下道あはれに心細し。  
越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板底年經にけり見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れに  
し後はたゞ秋の風。」と詠ませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、賤し  
き言の葉を遣さむも中々に覺えて、こゝをば空しくうち過ぎぬ。 —東關紀行—

【東關紀行解釋篇 一八三頁 参照】

【東關紀行】 【昭六、東京女大】 天龍てんりゅうと名づけたるわたりあり、川深く、流激しく見ゆ。秋の水漲  
り來て、舟の去る事、速かなれば、往還の旅人、たやすく向ひの岸に著き難し。此の河水まされる  
時、舟なごもおのづから覆りて、底の水屑みづくずなる類、多かりと聞くこそ、彼の巫峽の水の流、思ひ  
寄せられていさ危きこゝちすれ。しかばあれども、人の心に比ぶれば、靜かなる流ぞかしく思ふに

も、喻ふべき方なきは、世に經る道の險しき習ひなり。

此の河の早き流も世の中の人心のたぐひさは見す。 —東關紀行—

【東關紀行解釋篇 一九〇頁 参照】

【昭和八年度入試問題】……方丈記より出づ。問題は方丈記解釋篇二三六頁に掲載

【方丈記】 【昭六、横濱高商】 【昭和五年東京外語國語書取試験に右の箇所を出せり。】 左の文章を  
解釋すべし

それ三界はただ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望なし。今さび  
しきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食こじきとなれるこゝを恥づ  
さいへども、かへりてこゝに居るときは、他の俗塵ぞくじんに着するこゝをあはれぶ。もし人このいへるこ  
ゝを疑はば、魚鳥の分野を見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願  
ふ。鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくのごとし。住まずして誰かさくらむ。

—方丈記—

【方丈記解釋篇 二三四頁 参照】

【十訓抄】 【昭七、東京商大、専門部及商業教員養成所】 つたなき身を願ふるに秋の螢の光を聚め



ずして風月の望みにくらく春の露のさへづりを學ばざれば絲竹の曲にうさし藝なく能かけたりなす事なくして徒らにあまたの露霜を送るばかりなり。かかるにつけてはもしほ草かきあやまれる言の葉も數つもり梓弓ひき見ん人の嘲もはづれ難く覺えながら志のゆく所ただにやはいかやまんきてならし。 — 十訓抄 —

【十訓抄解釋篇 二四一頁 参照】

【十訓抄】 【昭七、神戸高等商船】 人は慮なく、言ふまじき事を口さく言ひ出し、人の短をそしり、したる事を難じ、かくす事を顯し、はちがましき事をたゞす。これらはすべてあるまじきわざなり。われは何さなく言ひ散らして思ひもいれぬ程に、言はるゝ人は思ひつめて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも與へられ、身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劍はさらでだにも恐るべきものぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるゝものなり。大方口輕きものになりぬれば「某にその事なきかせそ、彼の者にな見せそ。」など云ひて、人に心をおかれ隔てらるゝ、口惜しがるべし。又人のつゝむ事のおのづから洩れ聞えたるにつけても、かれ話されしなご疑はれむは面目なかるべし。 — 十訓抄 —

【十訓抄解釋篇 二四五頁 参照】

【十訓抄】 【昭七、第二高】 道々の家に生れたる者はさる事なりさなきもほさくにつけて能は必ずもつべきなり氏をうけたる者藝おろそかにして氏をえつがぬもあり道にあらざる者能によりて道

にいたるもあれば氏をつがむがため道にいたらむがためかれもこれもさにも勵むべし。 — 十訓抄 —

【十訓抄解釋篇 二四七頁 参照】

【十訓抄】 【昭六、姫路高校】 人は心にあはぬ事あればきてうちたのむ人にもあれあひしたしき中にもあれ物恨のさき立つまじきなり約束の旨の變改あるにてもさるやうこそあるらめと心ながく忍びすぐしたらむはくれり腹立つよりも中々はづかしくいさほしくも覺えぬべし。 — 十訓抄 —

【十訓抄解釋篇 二四七頁 参照】

【十六夜日記】 【昭七、東京高師、國漢科特題】 曉たよりありき聞きて夜もすがら起き居て都の文ごもかく中に殊にへだてなくあはれに頼みかはしたる姉君に幼き人々のことなごさまさまに書きやるほご例の浪風はげしく聞ゆればただ今あるままの事をぞ書きつけける。

夜もすがら涙もふみもかきあへず

磯、こす風にひさり起きあて。 — 十六夜日記 — 【十六夜日記解釋篇 二六五頁 参照】

【十六夜日記】 【昭六、海軍生徒】 左の文章中傍線を施したる部分を平易なる語を以て解釋せよ。



(イ)

草の枕ながら、年さへ暮れぬる心細さ、雪のひまなさなど書き集めて、

(ロ)

消えかへり眺むる空もかきくれて

ほども雲居ぞ雪になりゆく。

(ハ)

など聞えたりした、立ちかへりその御返りごと。便あらばこゝ、心がけまゐらせつるを、今日は師

走の二十二日、文待ち得て、珍らしく嬉しき。先づ何事も、こまかに申したく候ふに、今宵は

(ニ)

御方違の行幸の御上さて、まぎるるほどにて、

(ホ)

思ふばかりもいかがと、本意なうこそ。

—十六夜日記—

【十六夜日記解釋篇 二六六頁 参照】

# 徒然草

(室町時代)

兼好法師

【つれづれ(退屈)なるまに(「まに」の略。まかせて、ので、)日ぐらし(終日) 硯にむかひて(

筆を執りて)とか「案に向ひて」とか云ふのと同じ意と見てよい。)心にうつり(浮んで)行く(来る)

よしなしごと(理由根據も無いつまりぬ事)を、そこはかとなく(それと別段目的もなく)(十筆にまかせ

て十)書きつくれば(……すると。書き付けること。【此の「ば」は已然段に添うてゐるから確定の「ば」

である。故に譯は「から」となるべきである。此れが正規な用法であり譯し方であるが時には「……する

と云ふ」となる場合や「……したところ」が「云ふ様な意味になり特別の場合では殆んど「假定」に近

い様な事さへある。【怪しうこそ(實に怪しく、全く怪しく、「怪しう」||「怪しく」||妙に不思議に) 物

ぐるほしけれ。(狂氣じみてゐる事であるよ。【こそ……「けれ」等の如く「係結び」の修辭法を使つて

ゐるのは矢張「詠歎的」「強意的」表現をする爲である。であるから口語譯をする場合にも何とかして此

の心持ちを表はす様表現形式を撰ぶ事が必要と思ふ。此れに就ては「その心持ちを意識して譯せばよい。」



等と論ぜられて居るものもあるが、何としましても「言葉は表現である。」から何かの特定の形式を探ることが肝要である。で多くの場合、「係り」の處には……「こそほんきに」さか、又は「ほんとうに」「まあ」「誠に」「全く」等を適宜付け、「結び」には……よ……よ。わい……である事よ……の事であるわい。等を適宜に附けるのが一般の係り結びの譯し方である。】

①……已然形に接續する「ば」に注意。

②……係り結びの口語譯に注意。

## 附録

右は徒然草冒頭的一篇で極めて短い文ではあるが正に本書全篇の精神を總括するものとして古來他の凡べての段と獨立させて序文として考へられてゐる。誠に強ちなる考へでもない。扱序文にもある如く、兼好つれづれのまにまにそこはかさなくものしたところの此の漫筆が何と云ふ因縁か、世の人々に讀せられ持囃される事限り無く、註釋書研究書數を知らず。或は内容は取るに足らざれども文辭の妙なる事他の追從を許さずと云ひ、或は篇中磅礴せる精神乃至は趣味、さりざり面白しと稱し、紛々の説一つも定る所なきが如し。吾人固より先人未發の見あるなしと雖も、此處に少しく心の用意を望むものである。即ち文學作品の遊戯視を排して、熱意

を探らんとするのである。精神生活の一部局的善惡末梢を論ぜずして——即ち兼好が虚無恬淡老莊の如くなるが故に面白しとし、或は更に、佛教を説けるが故に貴しきなすは是れ一部局の思想末梢に捕はるるにあらすや。然らずして宜しく全的人間生命の躍動相を見極めなければならぬ。そこはかさなく書かれた文そのものにも、そこには必ず善と惡とを超越した全的人間生命が如實に發露せられてゐるのではなからうか。自分は如何にも兼好は靜かに人生を凝視してゐる隱者であると思ふ。靜寂と人生凝視の姿が兼好の全容に付纏つて居る様に思ふ。然も彼に於ては凝視の結果、果して何物に歸一統一せられたであらうか。解決すべからざる雜多をそのまゝ、統一の姿と諦めんとする眞の現實人としての姿が横へられてゐるではなからうか。此の複雑心理は正しく説明と理論の外を彷徨するものであるから一つに徒然草が彼一個の趣味論である論斷せられる所以である。趣味と云へば輕々にも考へられるが、兎にも角にも、複雑な心理の持主ではないか。人の世の惱みが内生活の複雑相と分裂相とに衝突するものとすれば、兼好も亦一個の人の世を惱める者ではなかつたらうか如何に。觀じ來れば徒然草全容の生命は恐らく此の邊に潜んで居るものではなからうか。成程そこはかさなく書きなぐられた、よしなし事の集載である。筆執る心はそこはかさなき心である。何の目的もなければ期待もない。然し寫された心展開された心の内容は偽らざる人生相であらねばならない。我々の世に文學が恒久の生命を存續して行くのは論するまでもなく文學が對人生的の本質關係を底深く潜在する處に



あるを断じなければならぬ。近來文學を深く對人生問題に掘り下げて考へんとするの多きを見るは又宜なる事である。かくの如く論すれば此の冒頭一篇も盡きざる仔細含蓄あるものと謂はれるのである。左に掲ぐるものの中土居先生の所論は我々に徒然草に關する此の邊の消息を御示し下さつた恰適のもので諸氏の大なる参考となるものと信じるから御説を拜借する。

〔土居光知氏文學序説〕

つれづれは展開なき沈滞のなやみ、充實した人生を見出し得ざる悶えではあるまいか。兼好のつれづれも充實した生活、展開する思惟に入ることができぬので、この途を見出さんがためには分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して我の姿を如實に眺めなければならぬ。しかるに何といふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物苦ほしさを感ずるさういふ如き意味ではあるまいか。西行や長明は社會と人生とにそむき、自然の愛、彼岸の宗教に逃れんとした人であるが、兼好はこの對立の一半を捨て、他の半面に生きるにはあまりに複雑心の所有者であつた。其の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉・室町時代の厭世觀とが争つてゐた彼にとつて「つれづれわぶる」心は靜寂主義に赴かむとする心である。彼は「佛に仕う奉るこそつれづれもなく心の濁も清まる心地すれ」といひ、社會生活を離れむとする。然し一方には來世の信仰に生きることできぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、戀愛を讚美し、家居の趣味等に風雅

の心を述べるかと思ふさ、やがて戀愛を否定し、清貧を崇拜し、名利を求めぬ心を専んでゐる。彼は元來享樂主義の傾向を有してゐた。そして彼が死を直視し、人生の無常を痛感したことは、かへつて生の價値を切實に感じ、最も充實した刹那を持つやうにそれがためには自己を知り、自己に忠實になり、自己に集中せんとした。かゝる複雑な精神内容を統一するには當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者で、彼の著作は一貫した主張のない結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想が理想を笑ふ自嘲アイロニーがある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮した文章であり、デアアレクチックな考へ方の眞剣さがある。これを消閑の戯筆と見ることは不可能である。

（土居光知——文學序説93—94）

○尙ほ徒然草に關し井上通文氏は徒然草精義に述べられて曰く、

〔徒然草精義（落合直文閱、井上通文著）〕

「徒然草讀むべき注意。」本書は兼好が書き散らしおきつるをその頃文雅に志せる人之を愛惜して纂輯せしもの故固より完成せしものならず。故に自らその文体の一貫せざる處あれど又やむを得ざるべし。又消閑の漫筆故興至りて筆をされば行雲流水の如く風月の雅趣、嘲弄戲談、悲憤等歷々として紙上におどる。されば往々道理外に奔逸せるものあるが如きは之亦止むを得ざる處なり。世上流布せる本書の註釋、極めて多しと雖も相伯仲して逕庭あらざるのみなら



す、徒らに一言一句を金科玉條の如くに尊重し、推稱の極とするは先進の虚榮興りて力あるべし。此處に伊勢貞丈翁かの揣摩臆造の説を排斥し、公平不偏の眼識を以て本書を見るべき要領を示されたるものあり。徒然草大意と云ふ。予之を讀みて同感の情割愛するに忍びずして左に抄録して以て讀者に便にす。

貞丈按するに徒然草の抄物世に多し。其の註釋を書ける人多くは己れ己れが好める道に引おとして説をなせり。その説々變目ありと雖も、いづれも兼好の心は人の爲に教を施せる書なりとなす處は皆同じ。いづれもかたくなにひがめる事なり。兼好がかの草紙を書ける主意は「つれづれなるままに日ぐらし硯に向ひて心にうつり行くよしなきを書きつくる」といへるを以て考ふべし。兼好の心あながちに人の爲にせんとして書けるにあらず。つれづれなるままに心にうつりゆくにまかせて思ひよれる事をきのふも書きけふも書きてつれづれのさびしさにこれをなぐさみさせしなり。心のうつり行くままに書きしもの故心ざす處一道ならず、神道もあり、儒道もあり、老莊もあり、佛道もあり、歌道もあり樂の道もあり朝廷の故實、武道上の奇談心にうつりゆくとはこれこれを云ふなり。今こそはかの草紙世にもてはやされ、兼好がかの草紙書ける時、かくあるべしとはよも思はじ。只無心にして何となく、かきすさびしなり。今の世に至りて註釋をつくる人強ひて人の爲教訓のため書けりなご云ふは兼好の本意にはあらず。只兼好の隨筆なりと見るべし。

【二】「べき」(べき)。「この世に生れては」(生れて来た以上は)「願はしかる」(願はしくある)「べき」

べき答の(【此の「べき」は單に推量に解釋したのもあるがあまりに當つてゐない様である。それならば、「べき」は何んな意味を表はしてゐるか。多くの詳解書には大抵單に「望ましい事が……」と通釋をしてある。然し「べき」を使つてゐる以上は單に本文が「望ましき……」となつてゐるより何か違つた心持が含蓄されてゐるものと思つてその眞意を探ることが大切である。多くの詳解書に單に「望ましい事とあるのは上に……」「生れて来た以上は」とあるので餘程利いて來ると思ふ。即ち「……生れて来た以上誰でも是非望ましく思ふ様な」の心持ちである【こと(事が)こそ(誠に)多かめれ(事多いであらう)】みかどの(天子の)御位はいと(大變)も(まあ。感動助詞)かしこし。(恐多い。有難い)竹の園生(皇族。支那の梁の孝王が竹園に居たと云ふ故事)の末葉(御子孫)まで人間の種ならぬぞ(神の御血統であらせられて人間の血統でない事はまあほんとうに)やむことなき。(高貴の限りでありますわい。)

【①「べき」の用法】……推量・當然・命令・可能・斷定・決意・希望等あり。注意を要す。

【②③④⑤】……係結びの口語譯法の一般形式に注意を要す。



【三】人はかたち(容貌)有様(風采)の勝れたらむ(十、こ十)こそ(勝れてゐる事こそ誠に)【〇此の「たらむ」は形式から云へば未だ完了の形になつてゐる。随ひて文法通りに嚴譯すれば「……たであらう」と譯すべき所であるが例の例外の「て十ゐる」と譯す場合なのである。〇又「たらむ」の「む」は「連体形止め」になつてゐるからその次に「こそ」が省略せられてゐるを見るべきである。】あらまほしかるべけれ。(さうあつてほしい事でありませうよ。)(物言ひたる(一寸物を言ひます)↓)【此れも過去に譯すべき場合ではない。完了であつて「現に言ふその様子姿」を表はすのである。】(十のも、又はのは事は。又は様子姿は十)聞きにくからず、愛敬(可愛氣)ありて、詞多からぬこそ、飽かず(いやだ)と云ふ氣が起らないで何時迄もと譯す。むかはまほしけれ。(向き合つて話し度くありますよ。)(十自分はその人に對してかれがれ十)めてたし(立派な人だ)と見る(平素考へてゐる)人の(が)心劣りせらるゝ(今迄は尊敬してゐたのにどうも案外見誤つてゐたわいと輕蔑を感じないでは居られない様な)本性(ホンシヤウ。性質)(十が十)(十何かの機會に十)見えむこそ(誠に)口をしかるべけれ。(遺憾であるに違ひない事ですわい)【四】しな(人品)かたち(容貌)こそ生れつきたらめ(は誠に生れ付いたものであつてどうすることも出来な

いであらうけれども)心はなにか賢きより賢きにうつさばうらさらむ。かたち、心さま(心だて)【心ば

せ」と云ふ語があるが此れは「氣だて」と譯すべき語であつて大体同じ語である。然し「心ばへ」と云ふ語がある。例へば「深き心ばへ」と云ふ時等は「深い意味、趣旨」と云ふ意である。】よき人も、才(才)【學才)なくなりぬれば、品下り(人品が劣り)顔にくさげなる人(容貌の憎さうな人)にも立ちまじりて、かけず(わけもなく)けおさるゝ(壓倒せらる)こそ、本意なき(残念なる)わざ(こと)なれ。(でありますわい。)

【五】(十人の命が十)あだし野の露(十の如くに十)消ゆる時なく(十又十)鳥部野の煙(十の如くに十)立ち去らてのみ。(消え去つて終ふと云ふ様な事が全くなくつて)【のみは「全く」と譯しておく。凡べて無駄な言葉は使つてないわけである。それくゝの語は皆相當の意味と心持ちを持つてゐる筈であるから、餘り不自然な譯文となつても困るけれども一々言葉々は吟味してなほざりにしない様にする事が大切である。】住みはつる(一生を終る)ならひ(當。もの。)ならば(十即ち永久に此の世に生きながらへて居る事が出来るものであるならば十)いかに物のあはれ(物のおもむき。喜び悲しみ、苦しき樂しきすべて心に深く感ずる具合、事。)もなからん。世は定めなき(無常である)(十事十)こそいみじ(結構である。面白い事ですわい。)けれ。(わい。)



【①あだし野。】……消ゆるの序詞。嵯峨野の奥愛宕山の麓にあつた墓地の邊の稱。

【②鳥部野の畑】……「立つ」の序詞。鳥部野は京都東山の阿彌陀峯の麓に火葬場があつた。その名稱であつた。

【六】命あるもの（生物）を見るに、人ばかり久しきはなし。蜻蛉（カゲロフ。普通には「蜉蝣」の字をあててゐる。蜻蛉に似て小さき虫。すべてはかない例に引かる。）の夕を待ち（十て早速死し十）夏の蟬の（十）春生れて夏死し夏生れては秋に死んで十）春秋（十即ち一年十）を知らぬもあるぞかし。（ありますよ。）【そかしは強意の感歎詞である。語の末尾に附して其の意を強む。】（十一）体物は考へやう、感じ様で短いと思へば短い。又長閑な氣持になつて居ればすむものであつて十）つくづくと（落着いて心靜かに）一年をくらす程だにも（一年を暮せばその一年の間でさへも）こよなうのどけしや。（詠歎の助詞。よと譯す。のどけしはのんびりさしてゐる。）飽かず（不満足不充足で）をし（命を終へるのが惜しい）と思はば、千とせを通すとも、一夜（ヒトヨ）の朝（即ち夢と云ふものは覺めやすいはかないものであるがその様にはかない）の心地こそせめ。

【七】すみはてぬ（どの途すみおほせぬ、どの途死なればならぬ）世に（十長生して老いばれて十）みにくきすがたを待ち（結局は）得て何かはせん。命長ければ恥おほし。（壽則多辱と莊子天地篇にあり。）長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。（目安し。見苦しからず。見て難なし。立派であらうわい。結局な事であらうよ。）そのほど（年齢）過ぎぬればかたち（なりふり。容貌。）を愧づる心（恥ぢて容儀等を取りつくりはうこの心）もなく、人にてまじらはん（人中に出でつきあふ）ことを思ひ（望み）夕の陽に子孫を愛し（夕の日即ち將に沈まんとする如き人の老年晩年に子孫を愛し）さかゆく末（子孫の榮えゆく末）を見んまでの命をあらまし、（豫期し、動詞あらましますの連用形）ひたすら世を貪る心（名利を貪る心。）【此れには二説ある。即ち①徒らに長生を望む心。②名聞利欲を貪る心。前者は前の句と重複するから不可とせられてゐる。】のみふかく物のあはれ（情趣）も知らずなりゆくなんあさましき。（情ない。ほんといやなことであるよ。）

【①あさまし】此の「あさまし」は種々に譯せられる語で今も「あさましい料簡だ」等と普通使つてゐる處であるが、こんな場合は「驚きあきれる程さしい卑陋と云ふ様な意味である。大体原意が



「驚きあきれる程で全く思ひもよらぬこと」と云ふ様な意味なのである。従つて(1)思ひがけない。(良否  
兩用。)とか今少し程度を越えて(2)驚歎の至りである。(之も良否兩用)とか而して又(1)(2)の場合が悪い場合  
である時、多く道徳的に身を逸してゐる時に特に「卑劣だ」とか「淺はか」とか「さもない」とかの意に  
限定されて來るのである。

【八】劇居(住居)のつきづきしく(似合はしく、ふさはしく、自分の氣分に適すること)あらまほしき(あり  
度い)(十、二十)こそ(は誠にほんまに)かりの宿りとは思へど(あの佛説で云ふが如くに死後の永生  
の生活に比べるならば此の現世の生活と云ふものは眞の假の生活ではあるがの意。「假の宿り」)「此の世  
の假の住居」興(面白味。趣)あるものなれ(であります十わい)「係り結び」は意味を強めるために用ひ  
られてあるのであるから解釋通釋する時に何ぞかして強辭的な方法を採る事が大切である。故に「係り  
の處には「誠に」<sup>◎◎◎</sup>とか「ほんまに」<sup>◎◎◎</sup>とかを用ひて譯し「結び」の所に「わい」<sup>◎◎</sup>とか「よ」<sup>◎</sup>とかを用ひて詠  
歎の意を以て譯したらよからう。何度も云ふ様であるが此の修辭法は多く出て來るから注意をしてゐ度  
い。よき人(自分の立派な人)の、のどやかに(安閑と、散閑に、心静かに)住みなしたる(そこに住ん  
で生活してゐる)所は、さし入りたる月の色も、一きは(一段と)しみじみと(深く心にしんで十ゆかし

く、趣ありげに)見ゆるぞかし。「ぞかし」も之も強意の辭であるから「わい」<sup>◎</sup>を附して「見えるものであ  
りますわい」<sup>◎◎</sup>としておく。(四一、東女師文科。大正二海經。)

【九】今めかしく(現代風に)きららかに(華美)ならねど、木立(樹立せる庭木)。「草木が一寸立てるを前栽」  
センザイ、特に大木古木の立てるを木立と云ふ。ものふりて、わざとならぬ(人爲的の様子がなくつて  
自然らしい)庭の草も心ある(趣ある)さまに(十見え十)簀子(スノコ)「縁側」。「簀子」  
「スノコ」<sup>◎</sup>とは竹又は葦莖等にて作りたる筵様のもの。又之にて作りたる縁を「簀子」と云ふ。従ひて「簀子」  
と云へば(1)前述の筵様の敷物の轉じて竹縁。又細い板を横に並べて雨露のたまらぬ様にした縁も云ふ。(2)單  
に縁側。透煙「スノコ」竹や木にて作りたる隙間のある向ふの見え透く様な垣)のたより(様子、  
おもしろく(趣深く)うちある(一寸何氣なく置いてあるところの)調度(家具、手まはり道具)も

多いのである。



昔覺えて(古雅であつてそれを見ると昔が思ひ出される様であつて) やすらかなる(落ちついてゐる)こ  
そ、心にくし(おくゆかしい)と見ゆれ。(思はれますわい。)

【一〇】(十一体俗人ごもの住居でよくありがちな事であるが↓+) 多くのたくみ(大工)の心をつくして(一  
生懸命)磨き立て(立派に作り)唐のやまとの(支那や日本の) 珍しくえならぬ(何とも云へぬ)調度  
ども並べ置き、崩れ(「センザイ。」)庭先きの一寸した植込みの草木まで、心のまならず(草木の自  
由も考へず枝をためたり切り落したり等して如何にも不自然に) つくりなせるは、見る目も苦しく、いと  
わびし。(い)やである。(さ)ても(それでも。そんなに立派な住宅を造り構へたからとて) やは(反語さす  
るために附けた助詞であつて「……であらうか。……ない。」となつて来る文意である。) ながらへ住む  
べき。(いつ迄も永く存命して居住する事が出来ようか。決して出来ないであらう。)(+それから+) ま  
た、時の間の煙ともなりなむ(不意の火事等であつて云ふ間もなく焼けて終ふ事もあるだらう) とぞ(と  
まあかういふ風に) うち見るよりも(一寸そんな家を眺めただけで早や) 思はるる。(思はれてなりませ  
んわい。)(「るる」は自發の助動詞「る」の連体形。)

【一一】 かな月(陰曆十月)の頃、栗栖野(山城の醍醐の邊に在り。)といふ所を過ぎて、ある山里(山の人里。

山中の里。里とは人住む場所。又は里近き山中の里。)に尋ね入ること侍りしに(まゝろが)【には助詞で  
種々の意を表はすことあり。注意を要す。の。ところか。その時等。】 逢かなる(づつとそこ迄長く續  
いてゐる) 苔の細道を踏みわけて(十行つた處に+) 心細く(いかにも淋しさうに。時を得顔ならざる  
様。)住みなしたる(住んで住居としてゐる) 庵あり。木の葉に埋るる窟(カケヒ。|| 水を通ずる爲掛けた  
種)のしづくならでは、(外には) 露(少しも) おとなふ(訪れ来る)ものなし。 関伽棚(アカゲナ。|| 佛  
に供へる水又は花、佛具等をおく棚。「アカ」は梵語で「水」の意。)に菊・紅葉など折りちらしたる(て  
+ある)(+のは+) さすがに(さうは云つても矢張) 住む人のあればなるべし。 かくても(かくの如く  
即ちあはれな住居にしても) あられけるよと(住めば住む事の出来るものであるわいと) あはれに(興深  
く。感心して) 見るほどに、(見てゐると云ふその途端……)が目に着いたと云ふのである。【「ほど  
に」は「……と云ふと」「その時」等譯すべき語である。随分種々の用法のある語で注意すべき語である。  
】ので「時」「程度」「様子」等種々の場合がある。】 かなたの庭に、大きな柑子(カウジ。|| みかん。か  
うじみかん。柑橘の類。)の木の枝もたわわ(たわむ程の様子) になりたるが(實が生つてゐるのが)【な  
りたる+木が】である。例の連体形止めの主格である。連体形の次に体言を省略されてある事に注意せれ



ばならぬ。』(十)ありましたか(十)その木の(十)まはりまきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて(興さめ  
て殺風景に思ふこと)この木無かからましかは(無かつたならば)(十)結構なことであるのに(十)どうもこ  
んなに柵をめぐらせた木の爲に(十)これ程風情を害ふかしらん事だわい(十)等々(十)おぼえしか。(感じら  
れた事ですよ。)

【一二】 同じ心(情趣を感じる心。趣味。)ならむ人と、しめやかに(しんみりさ)物語して、おかしき事(興味あ  
ること)も、世のはかなき(つまらない)事もうらなく(全部心につまみかくすことなく)いひ慰まむこ  
そ、うれしかるべきに(十)世間には實際には(十)さる人(然る人、情趣を解する心即ち趣味の同じき人)  
あるまじければ、つゆ(少しも)違はざらむと(相手の人の心に違ふことがない様に)向ひ(話し相手  
となつて向ひ合つて)居たらむは(「居るのは」と譯す。)(十)事實は許す相手さ向きあつてゐても(十)恰も  
十(ひとりある心地やせむ。互にいはむほどのことまは、げにときくかひあるものから(十)人がお互に話  
し合ふからには(十)お互に云ふて話し合ふ程の事は、げに(「げに」成程尤もな事だ)と聞くかひ(「かひ」甲斐、  
價值)はあるものではあるものから(「ものから」もの、ものではあるが)聊か(少し)違ふところ(話  
す人のお互の心の間に意見、思ふことの違い)あらむこそ(ある人はまことに)われはさやは思

ふ(「自分はさう思はうかい。さうは思ひはせぬ」此れは意見の合はぬ相手が他の一方の相手に云ふ言  
葉である。)など争ひにくみ(十)又或は(十)さるからさぞ(「さうであるからさうなのだよ」此れも同様  
に意見の合はぬ相手の言葉である。)ともうち語らば(十)矢張(十)つれづれ(徒然、退屈)(十)か(十)慰  
まめ(慰むでありませうなど)と思へど、げには(實際は)少しかこつ(不平を云ふ)方(方面)も(位  
な事でさへも)われと等しからさらむ人は大方の(世間常並の)よしなしごと(わけもないこと。つ  
まらぬこと。浮世の四方山話)いはむほど(ほど)時。言つて話してゐる時)こそあらめ(位は成程面  
白いかも知れないが)まめやかなる(真面目な)心の友には逢かに隔りたるところのありぬべきぞ  
(有る筈のものであることは眞に誠に。「ぬ」意味を強めるため。「べき」當然の「べし」である。)  
わびしきや。(心淋しいことであるわい。)

【一三】 人は己を(己が身を)つゞまやか(儉約)【(十)手輕簡易(十)儉約。(十)慎み深くする】にし(十)驕(奢侈)を退けて  
財(「タカラ」財寶)を待たず(期待せず)世を食ら(世を食ふ)無闇に長生する事を欲する。さらん  
(十)のが、事が(十)【所謂連体止めで主格を表はすもの。次に「のが」「事は」を補ふ。】ぞ(誠に、ほんこ  
に)いみじ(立派)かるべき。(……でありますよ。……ありますわい。立派でありますよ。わい。昔よ



り賢き人の富めるは穠「マレ」なり。唐土(支那)に許由(堯帝の時の高士)と云ひつる人は(十があつたがこの人は十)更に身に從へたる(つけた)貯もなくて、水をも手して捧げて(手でもって掬つて)飲みけるを見て、なりひさごと(瓢箪)云ふ物の(を)人の(が)得させたりければ、或時(十その瓢箪を十)木の枝に懸けたりければ(……といふさ。……したところが。ので)【已然形に續くばでも必ずしもからと譯せればならぬとも限らぬ】風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて捨てつ。(捨てて終つた)(十そして十)(十それからいふものは十)また(再び)手に抱びてぞ(こんな風にして)水も飲みける。(よ)如何ばかり心のうち涼し(爽か)【①涼しい。②爽か。③あつさりして潔きよい。】かりけん。孫巖(家賃にして席を織りて生計を立つ。經書に通じ榮達した。)は冬の月(冬)に劍(「フスマ」夜具。)なくて葉一束ありけるを、夕べには之に卧し。朝には收めけり(しまつておいた。)もろこし(支那)の人は之をいみじ(結構。立派。)と思へばこそ記し止めて世にも傳へけめ(……したからこそ感心して……したであらうけれども→十)これら(我が國)の人は(十假にこんな人があつたとしても十)語りも傳ふべからず。(語り傳へさうにもありません。)

【①】……連体止めの主格をなすもの「のが」「事が」「のは」「事は」を補ふ。

【②ぞ…へき】……係結びの譯し方。

【③ば】……已然段に添ふ「ば」の譯法。必ずしも「ので」「から」このみ譯すべからず。本文参照。

【④ぞ…ける。】……係り結び形式になつてゐても仲々前述⑤に譯せる如く規則通り「ほんとに……わい。」

でばかりはごうも不自然な譯になる事があるからその場合には④の場合の様に適當に意識し工夫して相當の特別の口譯形式を採擇する事が肝要である。

【、そ…けめ。⑥の】……普通の係り結びでなく次に續く場合である。

【一四】折節(四季折々。四時の季節。)の(が)移り變る(十のは十)こそ(ほんまに。實際。)物ごとに(何につけても)あはれなれ。(情趣深いことでありますよ。)(「物のあはれは秋こそまされ。」(秋が最も優つてゐる事である)と人ごとに(誰も誰も)言ふめれど(言ふ様であるが)【春はたゞ花の一重に咲くばかり、物のあはれは秋ぞまされる。(拾遺集)】<sup>(1)</sup>それもさるものにて(一應はさうではあるけれども)今(き)は(一段と)心の浮立つものは春の景色にこそあめれ。(あるめれ。ある様であるよ。)(鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる(うらうらとした)日影に(日ざしに。日の照る所に。)(此の【句は二様に譯



されてゐる。(1)は日光に照されて。日光によりて。等と譯し(2)は日なたで。日のさす所で。である。前者は「に」の助詞を原因を表はすものとして嚴格に眺めてゐるし、後者は「に」の助詞を單なる場所を示すものとして見たのである。今は後者に譯しておいた。『垣根の草萌え出づる(芽を新しくふき出す)頃より、や』(次第に) 春深く (此の深くは前後兩方即ち春と霞とにかかつてゐると見てよい。) 霞み渡りて (一面にかすんで。一面にかすみこめて) 花 (此う云ふ場合には多く櫻の花の意味である。) もやうやう (だんだん) けしきだつ (その様な様子のあらはれること。花も愈々春らしく綻びようとする) 程こそあれ (「程に」と云ふを強めた意味の形である。程||時分。時。頃。それで「程こそあれ」で丁度その時に譯したらよからう。) 折しも (折も折。時も時。丁度。「しも」は強辭。) 雨風うち續きて、心あわただしく (氣ぜはしさうに。如何にも心せはしく。擬人法。)『あはただし||あはてる事。うろたへる様。せはせはしさうなこと。紀友則の歌「ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらん。」とあるところの「しづ心なく」の意も同じことである。』散り過ぎぬ。(散つて終ひます。)(「此處の「ぬ」は「マシタ」を譯さぬがよい。別段過去とか完了とかの意を明瞭に表はす氣持ちよりか感歎的、強意的表現法なのである。一体完了とか過去の助動詞は別に本來の意味でなく詠歎的の氣持ちを表してゐる事が多いから注意を

要す。』青葉(新緑)になり行くまで雨(何につけ、雨につけ、風につけ)唯心をみぞ惱ます。

【二五】

花橘(橘と云ふに同じ。橘は其の花を賞するのでかく云ふ。) は名にこそ負へれ(定評は持つて居るけれども。有名ではあるが。「定評」さか「有名」さか云ふのは「昔の事を思ひ出す」と云ふ定評があるのである。古今集にも「さつきまつ花橘の香をかげ昔の人の袖の香ぞする。」とあり) なほ(何と云つても矢張り) 梅の香に (+よつて+) ぞ古の事も立ちかへこりしう思ひ出でらるる。(昔の事を思ひ出す点に於てはどちらかさ云へば矢張り梅の匂によつての方がどうも思ひ出されてなりませんわい。自發の「らる」である。) 山吹の清げに (+咲いてゐるのや+) (+又+) 藤のおぼつかなき様 (なよくと垂れて色形共に判然しない危げそうな。頼りなさそうな様子) したる (して+ある) (+の+) (+は+) すべて思ひ捨て難き事 (見捨て難い、即ち印象の深い情趣が) 多し。

【①花橘】……橘は一体その花を賞するところから花橘と云ふのである。格子「カウシ」のこと。田道間守が垂仁帝の爲めに外國より持ち來つたものと云つてゐる。非時の果物「トキシタノカケノコノミ」と云ふ、是れなり。香氣の高きもの故に、其の香によりて、昔を偲ぶことに云ひなら



はしたり。(中辭林)又一説には垂仁帝が田道間守をして橘を求めに百濟の國に遣はされたが歸國に先ち帝崩ざられ彼も悲しみて彼の國に死したれば昔を偲ぶに云へりとも云ふ。「まつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。古今集。」

【②名におふ】……此の語は大体二様の意がある。

(1)名を持つてゐる。

(2)有名である。定評ある。

○例の有名な在五中將在原業平の「名にしおはどいざこまはん都鳥わが思ふ人はありやなしやま」の場合の如きは前者である。

○又八犬傳の芳流閣上の血戦の場の「流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫緒絶え……」の所の如きは後者である。

【③こそその係り結び形式になつてゐるものの例外。】……「こそ」の後を「已然段」で受けるのは普通は強意又は詠歎の係結なのであつて「……はほんまに……であるわい。」等譯すのであるが、時に「こそ十已然形」で「……であるけれども」「……であつても」の意となる場合があ

る。注意すべきである。

【④梅の匂にぞ……】……古來梅が香、乃至梅と昔を結び付けた歌は随分多いのである。伊勢物語には業平の歌として「梅の花の盛にこそを思ひてよめる。」「月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、我が身一つはもこの身にして」とあるのは有名であり、古今集に「題しらす、讀人しらす」として「色よりも香こそあはれはおもほゆれ、誰が袖ふれし宿の梅ぞも」。又新古今に「梅が香に昔をさへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる。」とあり。又源氏物語の早蕨の巻に「御前近き紅梅の色も香もなつかしき……」「……橘なられど昔おもひ出でらるるつまなり……」等ある故、梅と橘とを關係附け比較して書いた兼好の文章は此等に據つてゐるかも知れない。

【⑤おぼつかなき様】……和泉式部の歌にも「見てもなほ覺束なきは春の夜の霞のうちに咲ける藤浪」と云つてあるのもあつて「おぼつかなし」は色彩上の感じであること云ふ説もあれども、又一説には「なよ／＼と垂れ下つてゐる不安らしい様子だ。」と云ふ説もある。「山吹の情げに」と相對してゐるものであるとすれば前説の方がよいかも知れぬが、然しあの芭蕉の「草臥れて宿借る頃や藤の花」と云つた句を見ると我々には單に色彩上ののみ「おぼつかなき」はあるばかり



でもない、即ち垂れ下つた藤の花の形態上の情趣にも充分「おぼつかなさ」は見る事が出来る  
と思ふ。

【⑥したる】……「たる」は完了のたるでない事に注意。「して十ゐる」の気持ちである。  
【のたる】……所謂連体止めの省略法であつて主格を表はす一般の形であるから注意を要す。「してゐる十  
の十は」さなる。

【一六】**濯佛**（四月八日、釋迦誕生會。）の頃、**綱**（古く京都にて單に祭さいひしは賀茂社の姿祭なり。四月の中の  
酉の日に行ふ。男山八幡宮の祭に對して北の祭とも云ふ。）の頃、**若葉の櫛**（枝）すゞしげに、茂り行く  
**程こそ**（丁度その頃こそほんさに）**世の**（人生の）**あはれ**（深い凡べての感興）も人の戀しさもまされ。  
**と人の**（誰かが）【之は誰か不明の人に託して云つてゐるけれども實は兼好自身なのであらうと云ふ説と、  
又「仰せられしこそ」と言つてゐるから誰かは分らぬが身分ある人であらうとの説と、凡河内躬恒を言つ  
たのだ等の諸説がある。】**仰せられしこそ**（誠に）**實にさるものなれ**。（その通りでありますわい。）**五月**  
（十の頃十あの一）**あやめふく頃**（五月五日の節句に毒氣を退ける意味で家々の軒に菖蒲を挿す。）**早苗取**  
**るころ、水鶏**（クヒナ）のたたく（人の家の戸でも叩く様な聲で鳴く。）【水鶏は五月の頃家の戸を叩く様  
がある。】

な聲で鳴くので普通「クヒナ」は鳴くと云はないで「たたく」と云ふ。など心ほそからぬかは。（やる瀬  
ない様な氣持にならないだらうか。なる。）【此の語は閑寂の心持も含んでゐる。】**六月**（ミナツキ）の頃、  
**あやしき**（いやしき粗末な）**家に、夕顔の白く見えて蚊遣火**（蚊を追ふ爲の火）**ふすぶる**（いぶす）もあ  
**はれなり**。（趣のある事である。）**六月祓**（ミナツキハラヒ。六月晦日に行はれる大祓。）**またまかし**（趣  
がある。）

【①人の仰せられしこそ……】凡河内躬恒の歌に「我が宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しか  
るべき。」といふ歌あり。一首の意は「自分の家に美しく咲いてゐる花を見るのが目的でその  
花見旁々自分を訪問して呉れるところの人は、やがて此の花が散つて終つた後には目ざす花が  
無いから自分を訪れても呉れないであらう。だから自分は、そんな人を花の散つて終つた後は  
定めし戀しく思ふことであらう。」

【②六月祓。ミナツキハラヒ。……いにしへ、六月、十二月の晦日に百官を朱雀門に會せしめて行つたさ、  
ろの神事である。半年間の罪穢を祓ふ式。今も皇室をはじめせられ各神社に行はれる。六月



のを夏越の祓「ナゴシノハラヒ」さも六月祓「ミナツキバラヒ」さも云ふ。

【③をかし。あはれ】……少し注意してゐる人は既に了解してゐる事とも思ふが「をかし」と云ふのは「あはれ」と云ふ語と同様凡べて「趣きのある事」「情趣あること」である。有名な枕草子には此の「をかし」と云ふ語を用ひてゐる。それならば「情趣がある」とか「あはれ」とか「趣がある」と云ふのは實際どんな事を云ふのかと云ふと、それは「凡べて喜悲哀歡人の情を深く感ぜしむる様な事」を云ふのである。だから單に「おもむき」とか「あはれ」と云つても「随分風致此の上もない」と云ふ様なおもむきもあれば、所謂「鴉立つ澤の秋の景色」の様な哀愁遣る方ない様なものもあるわけである。日本文學ではどちらかと云へば常に幽趣にその眞の相を見出してゐる様である。

【一七】七夕(タナバタ)祭る(七月七日の宵に牽牛、織女の二星が一年に只一度、天の河を渡つて相逢ふのを祝ふ祭。)こそなまめかしけれ。(あてやかで美しいことですよ。)やうく夜寒(秋も中頃になつて込んだん夜の寒くなる頃)になるほど(頃)雁鳴きて来る頃、萩の下葉(十黄色に+)色づくほど早稲田(わけの稻、即ち早く熟れる稻を作つた田)刈りほすなどとり集めたること(あれやこれや様々のこと)は秋の

みぞおほかる。又野分(秋冬にかけて吹く疾風)の朝こそをかしけれ。言ひつゞくれば皆源氏物語・枕草紙などに事ふりたれど(言ひ古されてゐるが)同じ事また今更に(今新しく繰返して)いはじとにもあらず。(言つてはならないと云ふ事もない。)おほしき事(心に思つた事)云はぬは腹ふくる。(氣がふさがつて腹がふくれた様な氣がする)わざ(わざ。こと)なれば、筆にまかせつ(まかせて)。(十書いたのであつて+) (十固より是の如きものは+) あぢきなき(つまらぬ) すざびにて(筆のすざび、手なぐさみであつて) かいはり(書き破り) 「かい」は接頭語 捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

【④つゝ、】……「ながら」さか「……して」等と譯す語であつて動作の重なる場合若しくは續行進行する場合である。が時にそれでは口語譯としては餘りにクドクツテ適當でない様な場合がある。此の文の例等が然りであつた此の方は「任せて」と「て」によつて解釋してよからう。

【一八】さて冬枯の景色こそ、秋には、まさく(大して。あまり。まんざら) 大方。大抵位の意になることもある。劣るまじけれ。汀(ミギハ)水うちぎは)の草に紅葉のちりとままりて、霜いと白う置ける朝、



遺水（細き流れを庭園に堰入れたるもの。昔の寝殿造りにあつたもの。前の「汀」も此の寝殿造りの汀と見てよからう。）より煙（水蒸氣）の立つこそまかしけれ。年の暮れはてゝ人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。（十昔から十）<sup>(1)</sup>すさまじき物にして、（殺風景。興さめたものとして）【單に「興のないもので眺める人もない……。」と譯したのもあるが前者の解釋の方がよからう。】見る人もなき（十冬の十）月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ほそぎ（心細く閑寂な）ものなれ。御佛名（十二月十九日より三日間禁中で行はれる佛事）荷前（年の暮に十陵八墓に幣帛を奉られる事。）の使たつなどぞ、あはれに（十も十又十）やんごとなき（貴い）公事（クツ）<sup>(2)</sup>朝廷の儀式行事。どもしげく、春のいそぎ（いそぎ）<sup>(3)</sup>用意、準備。春を迎へる準備の忙がしいのに）にとりかさねて（かてて加へて）催し行はるゝ様ぞいみじき（えらいことであるよ。大變なことであるよ。）や。追儺（宮中で大晦日に疫病の鬼を追ひやる式。）より四方拜（元旦の早曉、天皇が天地四方を拜せられ、一年の災を祓ひ御世を祈らせられる儀式。明治以後は皇大神宮、豊受大神宮、天神地祇、神武、孝明兩山陵、氷川神社、男山八幡宮、鹿島、香取神宮を御拜あらせられる。）につよくこそましろけれ。晦日（大晦日、歳晚）の夜いたう暗きに（時に）松（「マツ」たいまつのこと。焼松、松明）ども（複数をあらはしたるもの）【別に他の種類の燈火、明りを指し

示す心持ちではないのである注意を要す。】<sup>(4)</sup>ともして、夜半すぎるまで、人の門叩き走りありきて、（此れは年末の勘定掛取りのため門を叩き歩くのだこの説と京童どもが松さもし夜半過ぐる頃迄人の耳に逆ふ言を吐きて家の門を叩き歩くなりこの説とありて何れも主張する根據はあり。）何事にかあらん、ことごとくしくのゝしりて（聲高に物言ひて）足を空にまどふが（いそがしさうにあるく様子を言つたのである。足も地に付かない様に東奔西走する→十者か）曉がたよりさすがに（さうは言ふものの矢張）音なくなりぬる（なつて終ふのは）こそ（誠に）年の名殘（別れ）も心細けれ。（わい。よ。）

【(1)すさまじきものにして……】……之を單に「興のないものであるので」云ふよりか、「昔から興なきものとして」と譯す方が當つてあると思はれる点は昔から種々文献「書物」の上にあらはれてゐるのであるから兼好もその心持ちで書いたではないかと思はれるのである。即ち、枕草子「すさまじきもの、晝吠ゆる犬、春の綱代……」。源氏物語に「世の人のすさまじきことにいふなる師走の月の、くもりなくさし出でたる、」又更に冬の夜の月の澄みたるを「すさまじきものに言ひ置きけん人の心淺さよ……。」等ともあり、又狹夜物語にも「げにすさまじき



ものにいひ言ひ置きたる師走の月も、見る人からにや、宵過ぎていづる月かけ、さやかにすみ  
わたり……」等とあり。

【③】……やむごとなき……此處を「やむごとなき。さして文を切る一本がある。ごちらごも見られ  
るが本文では切らないでおいた。」

【④いそぎ】……準備、用意と云ふ意味。特に注意すべし。

【⑤人の門叩きありきて……】……本文にて解釋してある様に二説あるのであるが、此れに關して更に  
「人の」なる語が證議せられればならぬことなる。即ち此の「人の」を所有の「の」と見ず  
して主格を表はす「の」であるとする説があるのである。此の説によれば「門を叩き走く」は  
京童の徒ら事等と見ずして俗世の一人前の男が金勘定に狂奔してゐるものと見るがよからう。  
つまり兼好自身が人の、即ち他人の姿を容觀的に見たものと見てよからう。

【〔追記〕公事】……「クジ」「オホヤケゴト」

①朝廷の儀式、行事。

②朝廷の政務。

③公務。

此處は①の意味である。

③の意味の場合には多く「オホヤケゴト」と訓んである様である。伊勢物語「さてもさぶらひて  
しがなと思へど、公事「オホヤケゴト」どもありければ……」の場合等は③の意味である。

【一九】亡き人のくる夜とて魂（死者の靈）（十を十）まつる（十二月の晦日にまつるのである。）わざ（事。行事）  
は、このころには無きま（<sup>①</sup>）が。けれども。刺（アツマ）開東。の方には猶（<sup>②</sup>）する（<sup>③</sup>）ことにてありしこそ、

あはれなりしか。（猶矢張續けてある行事であつた事はあはれでありましたよ。風情多い事であつたわい。）

【此れは必ず上記の様に譯すべきである。單なる現在の強意的描寫と見てゐるものもあるがそれは誤りであ  
る。兼好は東國（武州金澤）に住んだ事もあるから彼の經驗を指示したものであると見なければならな  
い。】かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへ（うつて變つて）珍しき心地  
ぞする。大路（都大路）のさま、松立てわたして花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。（あはれに  
趣がある。）



【①を】……反對の「を」である

【二〇】飛鳥川（大和國高市郡にある川。古來その河底の變化が激しいとせられてゐる。即ち昨日淵であつたかと思ふと早や今日はそこが瀬となるが如くに淵瀬が常でない、一定でない云ふ様な位な意である。古歌にも「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日の瀬となる」を歌はれてゐる。）の淵（+と+）瀬（+と+）常（一定）ならぬ（+如くに+）（+常に一定でない。常住ならぬ、即ち無常の+）世にし（「し」は強めたのである）あれば、時（月日）移り、事（其の時の出來事。事件）去り、たのしび、かなしび行きかひて（交互に立ち代り入り交り去來し）はなやかなりし、あたり（住宅地）も人すまぬ野ら（野原）となり、變らぬ住家（+たまたま+變らないで昔のままに残つてゐる住宅）は人あらたまりぬ。（+ふと見れば、「年々歳々花相似たり」と詩の句にもあるが如くに、桃李「モ、ヤスモ、」だけは昔と變ることなく咲いて居る。益々感慨無量今昔の感に堪へぬ。昔の事も問ふて見たい。話して見たい。+）（+然し+）桃李ものいはねば誰と共にか昔を語らむ。まして（自分が）見ぬいにしへのやむごとかなりけむ（貴かつたであらう所の。）【常に云ふ様にこんな場合の「けむ」は婉曲に云つたのであつて、「ける」と云ふ様な心持で「貴かつた所の」と譯してよい。「けむ」は過去の推量であるが推量と未來から体言に續ける口語譯は自然でないからである。跡（……住家の跡）のみぞ（ばかりはほんとうに）はかなき。（その變り様と云つたら全く頼み甲斐ないものでありますよ。）

【二一】京極殿（京都土御門の南。京極の西に在つた藤原道長の邸で法成寺の西隣にあつた。）法成寺（ホウシヤウジ。道長の造替せる佛寺。入道して後は此の寺に住んだ。）など見るこそ（見るにつけても誠に）心ざし止まり（當の主人公道長が京極殿や法成寺等に對して後代の事迄を思ひにかけられた願望は徒らに止り存じて）【此處も種々議論のある所である。「とごまりて」を「意志中斷」するものと見るのと「願望の趣は徒らに今も残つて居る様に思はれ」と云ふのとの見方がある。此處では後者を採つた。然し前者を主張してゐる方が多い位である。】事（事業）變じにけるさまはあはれなれ。（感慨無量である。）御堂殿（道長を指す。法成寺に住んでゐたからかく呼んだ。）の造り塵かせ給ひて莊園（中世に、朝廷より、皇子、功臣等に賜はりたる田園。又は權勢家や寺社の私有地。此處は寺領の土地。）おほく寄せられ（寄進せられ、）我が御ぞう（オンソウウ一族）のみ（+が+）御門（ミカド天子）の御うしろみ（御後見役たるの攝政關白）（+然して又+）世のかため（世の鎮護）にて（+となつて）（+かくて+）行末まで（+榮えう+）と思し置きし時、いかならん世にも斯ばかりあせ果てん（荒廢し切つて終はう）とは思してん（未

る口語譯は自然でないからである。跡（……住家の跡）のみぞ（ばかりはほんとうに）はかなき。（その變り様と云つたら全く頼み甲斐ないものでありますよ。）



來完了の形式になつてゐるのであるが此處では過去の推量の心持と同様に思ふたらよい。判(反語の助詞)。「反語の時は補ふ事が必要である。」

【三三】大門(總門)金堂(本堂)など近く(近頃)までありしかど、正和(第九十四代花園天皇の年號)の頃南門

(南方の門で此處では大門をさす)は焼けぬ。金堂は其の後倒れ伏したる儘にて、とり建つる業もなし。

(再建する事もしない)無量壽院(阿彌陀堂)。「梵語の阿彌陀を無量壽と譯す。」ばかりぞ、其の形とて

(形見として)残りたる。丈六の(たけの高さ一丈六尺ある)佛九體、いと尊くて並びおはします。行成

大納言(「カウゼイダイナゴン」)權大納言藤原行成の事である。小野道風、藤原佐理と共に三蹟と云はれ

た能書家。の額、兼行(藤原兼行。後冷泉。後三條兩天皇の頃の人。書畫を能くす)が書ける原、あさや

かに見ゆるぞあはれなる。「感じが深い。」とか「情趣がある。」と云ふ中にも此處は主として哀情の方を

云つたのである。法華堂(「ホツケダウ」)法華三昧と云ふ事を行ふ堂。専ら偉人の遺骨を葬る場とす。

【法華三昧】とは法華經を誦讀してその妙理を觀念すること。法華經「ホケキヨウ」|| 妙法蓮華經の略。

中天竺の摩阿陀國靈鷲山にて釋迦が八年間説法したるを、阿難尊者の結集せしもの羅什三藏の譯にて一部

八卷廿八品なり。新体國語漢文辞典」などもいまだ傳るめり。(有る様だ)これも亦いつまでかあらん。

かばかりの(此ればかりの)名殘(残つた様子)だに(さへ)なき所々は、おのづから(自然と)礎はか

り残るもあれど(十之は何々のあとであること)さだかに(ハッキリと)知れる人もなし。されば、萬に

見ざらん世(死後)までも思ひおきてんこそ(思ひ残し置くであらうこと。即ち計畫し置く。)(十のは誠

に十)はかなかるべけれ(つまらないことでありませうよ)。

.....

【(1)だに。】……輕きを舉げて重きを言外に含ませる場合に云ふ語であつて口語の時(1)さへ(2)でも(3)なつ

と等に譯す。

【(3)思ひおきてむ……】……次の兩様の解釋あり。

(1)思ひ捉てむ (動詞・下二)(助動)

(2)思ひ置きてむ (動詞・四)(助動)(助動)

本文には(2)の解釋にした。それば前に「思ひ置きし……」と云ふ語があるので矢張、この意味に使つたのであらうと云ふ説を探られて居るのが可成多いからである。然し又反對にてむと云ふ過去完了の形を用ふより單に未來の「む」を附する方が適當の形であること云つて(1)の説を主



張する人も多いのである。さもあることである。

【捉つ。】定む。決める。處置す。

【二三】しづかに思へば(考へて見る事)よろづ(總じて何物によらず)過ぎにし方(物事)のこひしさのみぞ(戀しく思はれる。こればかりはほんまうに)せむ方なき。人静まりて後、長き夜(秋の夜や冬の夜の様に長い夜)のすさび(手慰み)に何となき(何といふこともない)具足(家具、調度品)取りしたため(整理して)殘しおかじと思ふ反古(「ホゴ」書や畫の書きくづされたもの)など、やり(破り)すつる中に亡き(死んで居なくなつてゐる)人の手習ひ(字を習ひ)繪書きすさび(慰み)たる(十もの十)(十を十)見出てたる(見出したる)こそたゞその折(その當時)の心地すれ。此の頃ある人(現在存命中の人の文だに(でも)(十早やそのものが書かれてから年を経過する事が十)久しくなりて(十あれを書いたのは十)いかなる折、いつの年なりけむと思ふはあはれ(感慨深い)なるぞかし。【ぞ】【かし】は何れも念を押すための強辭法(十自分が十)手馴れし具足なども心なく(無心に)かはらず(變化なく)久しき(久しくあるのは)いとかなし。(いとほしい様に思はれる)

【二四】人の亡き跡(死後)ばかり悲しきはなし。中陰(人の死後七七四十九日)の程(間)山里(山里の寺等に

移り行つての意)「山里」||山中の人里。「里」||人の住む土地。當時は四十九日の間山里の寺に、親戚一族の者が集り移つて追善、則ち「死者の冥福を祈る」のが習慣であつた。【などに移ろひ(「移り」の延音)て、便あしく(不便な、不自由な)狭き所に數多あひ(寄合ひ、寄集り)居て、後の業(「ノチのワザ」||死後の法事)ども誓みあへる(誓み合ふ。仕合ふ。)(十のは十)心あわたし(全く心の落付かぬものである。)|日數の(其間四十九日の時日が)早く過ぐる程ぞ(程度、様子、さいつたら誠に)物にも似ぬ。(例へ様もありませんですよ。)|果の日(中陰の最後の日)は、いと(いかにも)情なう(冷酷な態度で、無情な態度で)互に云ふ事も無く(別に互に今更口も聞かず、云ふ事もなく、詞もなく。)|【今迄四十九日】が間寄つて集つて話し盡したのであるから別れる時、今更の様に口を開く事もないのは道理である。然し此の邊の消息を此處に書き立てて居るのが如何にも既に歸るに急ぐ態度が表はれてゐる。|我かしこげに(各自勝手に思ひ思ひに、ぬかりなく、てきばきき。てんでに、さつさき。)|物ひきしたため(衣類調度品を取まこめ、取片付け、始末し)散々(「チリザリ」)|に行きあかれぬ(別れぬ。||別れてしまふ。)(十かうして十)舊の住處に歸りてぞ(歸つてから又ほんまに)更に悲しき事は多かるべき(多いであらう。)|「しかくの事(これこれの事)は、あなかしこ(ああ、恐ろしい。恐れ慎しまればならぬ。矢鱈の







||接頭語。「ゆ」||は元來は完了の助動詞であるけれども「うち笑つた。」と云ふのでなくつて「うち笑う様にもなる」と云ふ感動的な圓滑的な敘法である。【も】は感動の助詞【から】(死骸) はけふとき(人氣少い淋しい。【これを「キョウトシ」と發音させて解釋する人は「人氣」と解するを排斥して「氣味悪い」恐ろしいと解して居るが如何?)山の中にをさめ(埋葬して、さるべき日ばかり(然るべき忌日命日の日ばかり)詣つて、(折々お参りして)見れば(見るこ)程なく(間もなく)卒都邊【墓所に立てる標識。木又は石にて地、水、火、風、空の五層に積みあぐ。近時は細長き棒又は板に塔形を刻みて梵字等を書いて墓側に立つ。】も苔むし(生へ)木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふ(おまづれる)【よすが(つて。縁者。よるべ。ゆかり。)なりける【此處は非帝に大切である。訪れる縁者にては何か。それは夕の嵐、夜の月のみである。別に人等は訪れる等すれば、こそこ云ふ様な意味。随つて「よすが」は「たより。ゆかり。よるべ」の意ではあるが此處等では「訪れる處のもの」と英語の關係代名詞風に譯してもよい。】(十然しそんな風にして疎くなつてゆくにしても+) 思ひ出でて、しのぶ人あらむ程こそあらめ(思ひ出して偲ぶ人が此の世にある間はまだよいが。【偲ぶ||思ひ慕ふ。なつかしく思ふ。】【裡こそよくあらめど】と下に續いて行く。【そ(その人)も亦ほどなく失せて(死んで) 聞き傳ふるばかりの

(此の死者の事を唯噫で聞き傳へに聞く位の) 末々は(末の世の人々は) あはれとやは思ふ。(あはれと思はふか。思はない。【あはれと思ふ】とは彼の故人の死に就きて種々感じを興して悲しく思つたり等する事。此處では「何の感じも別に起さないだらう。」等と譯してもよからう。) さるは(然あるは。それは。【さあるからには。】それで。【故に】と云ふ風に軽く上を承けて下を起す様に解釋してもよい。【これを「ではあるが」とか「然しながら」等と解するのは正しくない。此の語は場所によつて少し意味を異にする。即ち二様の意味があるのであるが此處等ではどうしても前文の續から見ても前者でなくてはならない。【あととふわざ(死者の後を用ひ冥福を祈る法事、法要、即ち五十年忌とか百年忌等)も絶えぬればいづれの人とも名まだに知らず(十人がその墓所の邊りを通つても+) (その墓所は誰の墓所だか主人公の名迄も知らない様になり)(十只+) 年々の春の草のみぞ、心あらむ人(物のあはれを知る人。物の情趣を知る人) はあはれと見るべきま(十まだ、こんな風に春々若草は萌え出て来る間は+) (種々感興を催してうち眺めるであらうけれども) はては(終には) 嵐にむせびし松(咽ぶ様に響を立て、居た松)【むせぶ】とは聲を咽につまらせた様にして泣く事であつて此處では嵐がそんな悲しい様な聲を立て、泣くこと。【も、千年を待たて薪に摧かれ、古墳は鋤かれて田となりぬ。(田となつてしまふのである。)(+)



かくして遂に遂に十) そのかた (墓所云ふ形迹) だになくなりぬるぞかなしき。

【(3)の去る者は日にうさじ……】

文選の古詩に「去ル者ハ日ニ已ニ疎ク、來ル者ハ日ニ已ニ親シム。出<sup>ニ</sup>郭門<sup>ヲ</sup>直視スレバ、但見<sup>ル</sup>丘<sup>ト</sup>與<sup>テ</sup>墳。古墓<sup>ノ</sup>碑<sup>カ</sup>レテ、爲<sup>リ</sup>田<sup>ト</sup>、松柏<sup>ノ</sup>摧<sup>カ</sup>レテ、爲<sup>ル</sup>薪<sup>ト</sup>。白楊<sup>多</sup>シ悲風、蕭々<sup>ト</sup>シテ、愁<sup>コ</sup>殺<sup>ス</sup>人<sup>ヲ</sup>。思<sup>ハ</sup>ハズ<sup>バ</sup>。還<sup>ラ</sup>シコト<sup>ヲ</sup>ニ、故里<sup>ニ</sup>欲<sup>シ</sup>テ歸<sup>ラ</sup>ント道無<sup>シ</sup>因<sup>ル</sup>。」

【(3)いづれの人とも名をだに知らず、年々の草のみぞ……】

白樂天の詩に「古墳何<sup>レ</sup>代<sup>ノ</sup>人、化<sup>シ</sup>テ爲<sup>ル</sup>路傍<sup>ノ</sup>土<sup>ト</sup>。不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>姓<sup>ト</sup>與<sup>テ</sup>名、年々春草生<sup>ヒ</sup>タリ。」とあり。

【二六】雪の面白う降りたりしあした、人のがり(或る人の許「モト」へ)いふべきこと(何かいければならぬ事)ありて文(手紙)をやる<sup>とて</sup>(やつたがその手紙をやるについて)雪のこと何ともいはず、返事に【注意||此れはつまり、自分がその面白い風情ある雪景色に就て何とも手紙に書かなかつたのでその手紙の返事に向ふの人から次の様な文句の返事が来たのである。】「この雪をいかゞ見る」(かくくゝに眺める、思

ふ)と(十云ふ風に雪に關係した事を十)一筆(十も十)のたまはせぬ程の(様な)ひがくしからむ人(心のひかんだ即ち面白からぬ、情味を解せぬ人)の仰せらるゝ事、聞き入るべきかは。(どうして聞き入れませうか。聞き入れる事は出来ません。)(十雪の事を一筆もお書きにならないなぞ十)返すくも口惜しき御心なり。」と言ひたりしこそをかしかりしか(實に面白い。含蓄ある事でありましたわい。「しか」は「き」の已然形で、「こそ」の「結び」そなつてゐる)今はなき人なれど、かばかりの(此れ程の)事も忘れ難し。

【二七】長月(九月)二十日の頃、ある人(貴人)にさそはれ奉りて(自分の動作であるが此處では誘はれた人に敬意を表するために尊敬の語を附せり。)(十夜の十)明るるまで月見ありく(あるく)こと侍りしに(ありましたがその時に)(十自分の伴して居る人が十)(十何か不圖十)おぼし出づる所ありて(思ひ出される所があつて)【所】は||【事】と【家】と兩様の説あり。【案内せさせて(「アナイ」)取次を乞はれて。【させ】は尊敬の助動詞であつて、従者に案内をさせて云ふ使役の助動詞でない事に注意すべきである。刺を通ぜられて等云ふに同じ。】入り給ひぬ。荒れたる庭の露繁き<sup>(3)</sup>(露繁くおいてゐるのに。露繁くおいてゐるがそこに)わざとならぬ(殊更らしくない。今更わざわざ客のためでもなく平生からのたしなみ



で焚き蒸じさせあるまゝの( )にほひ(蒸物「タキモノ」の匂)【(参考)蒸物「タキモノ」〓練香「ネリカウ」のこゝにて細末の香料を蜜にて練りたるもの。焚きくゆらすに用ふ。】しめやかに(しんみりさ。しつとりさ。)<sup>(3)</sup>うちかきりて、忍びたる(世を隠れ避けて暮してゐる)↓【たる〓て+ある】けはひ(様子)いと(大へん)ものあはれなり。(情趣深い。)<sup>(4)</sup>よきほどにて(程よき程度、時分に)(+辞して+)出て給ひぬれど(+自分は+)【兼好自らである】なほ(矢張り)(+その+)事さま(様子)の(が)優に(優雅に)おほへて(思はれたので)ものかくれ(物陰)よりしばし見ぬたるに(見てゐるさ)(+その家の主人は+)番戸(出入口簷の戸で左右に開き戸になつてゐるもの)を今すこし推しあけて、月見るけしき(様子)なり。(+自分は痛切に感じた。即ち↓+此の主人が若し↓+)やがて(そのまますぐ)かけこもらましかば(假に萬一寝てしまふ様な事であれば)くちましからまし。(残念な事であらうのに)(+實はさうでなかつたのだが+實に此の人は殊勝な人ではないか。↓+) (+然し+一体こんな場合に↓+)跡まで(客の歸つた跡迄を)(+自分の様に+)見る人ありとは、いかてか知らむ。(どうして氣に附かうか。誰だつてそんな事に氣は付かない。↓だから此の主人だつて別段それに氣が附いたわけではない。朝夕の心のたしなみがさうさせたのだ)(+實に全く+)かやうの(+ゆかしき+)こと

はたゞ朝夕の(平素の)心づかひ(注意)によるべし。

【(3)「に」の譯し方】……此の助詞の用法は實に種々あり。注意を要す。

(1)の「イ、順當の場合。ロ、反對の場合」(2)……といふこと。(3)……といふこと(4)……したまゝころが。(しけるに)(5)……であるその上。(6)……であるそこに。

【(3)たる】……過去さばかりに限らないから注意を要す。即ち「て+ある」「て+ある」。

【(4)ほど】の用法】……(1)時(2)時分(3)程度(4)程子(5)ので等。

【(5)に】……前出〓と云ふこと。

【(6)やがて】の用法】……(1)直ちに、直ぐ、(2)その中。おつつけ、その中やがて。やがてその中。(3)そのまま、(4)そこで(4)そのままそれが。

【(7)ましかば——まし】の用法】……之も注意すべき語である。「萬」……でないこと(7)……であらう」と云ふのでその次に「實は……でない」と云ふ様な場合に用ひる。

【(8)様な】……口語譯で假定を表はす時には普通は過去や未來の語は用ひないで様なと云ふ語を用ひて



譯すに便利である。大体あてはまる。本文及び口語譯を参照せよ。

【二八】朝夕へだてなくなれたる人(慣れ親んで来た人)のともある時(何かの事がある時)われに心おき(遠慮をして)引きつくるへるさま(体裁をのさし作り、行儀ばつた様子、改まつた様子)に見ゆる(十)こそ、今更(今こなつて事新しく)かくやは(此う云ふ風をするまでもあらうか、あんな態度を執るの要はない)。等いふ人もありぬべけれど(ありませうけれども)なほげにくしく(尤もの事であり、成程さうであつて)よき人かなとぞ(立派な人だなあ)おぼゆる。うとき人(疎遠にしてゐる人)のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし(思ひ付く、思はれるであらう)。【此れも所謂兼好流の趣味と云へば趣味である。前半は、親密な人云へども或程度迄遠慮氣を見せ無闇に所謂無禮講でない所に趣がある云ふのであり、後半はその反對にさう親しくない人でも慣れくしく云つて來るのはそこに無さなくゆかしさがある云ふのである。】「たる」連体止め主格。云ひますその十事は十↓。【二九】名利(名譽名聲と利欲)に使はれて(役せられて。奴隷となつて)閑か(閑靜)なる暇なく一生を苦しむこそ愚なれ。財(「タカラ」—金錢其他貨財、品物)多ければ身を守るに(身を害なき様に守るには)まどし(貧し。不充分である。どうも具合がわるい)害を買ひ(受け)爛(面倒)を招く(招來する)。

引起す。なかだちなり。身の後(死後)には金こがねをして(黄金金銀財寶を)北斗ほくとを(北斗星を)支さふ(「ササフ」—ささえる。つかえること)とも(程澤山にしても)十却つてそれは十人(子孫)の爲ためにぞわづらはるべき(誠)に面倒視せられるでありませうよ。おろかなる人の目を歡はしむる樂しき亦あぢきなし(面白味がない。いやなものだ。つまらない)。大なる車、肥えたる馬、金玉(金や寶玉)の飾も、心あらん人(思慮ある人)はうたて(甚だしく)面白味なきこと、いやなこと(「面白味なきこと、いやなこと」に云ふ事もある。此處等も「甚だしくつまらなく感じて」を譯してもよい)。愚なりとぞ見るべき。金は山に棄て玉は淵に投ぐべし。利にまどふ(心が定まらず亂れる)十又(十)又は(十)云ふ人十はすぐれておろかなる人なり。

【三〇】ぞへべき。……係り結びの口語譯法……ほんこにうよ。わい。

【三〇】心あらん人……「未來助詞に十体言」の形の口語譯法。及びその注意—文法通り、に直譯すれば、「思慮あるであらう人」と譯すべきである。然しながら現代口語では未來の助動詞から直ちに体言「名詞代數詞」に續く語法はないのであるから、現在に「ある人」の意味に譯すか或は又「思慮ある様な人」と口譯をしたらよからう。であるから答案を書く場合の注意としては、かくの



如くに文法的に直譯すれば口語譯としては不自然な文になるし、それと云つてその不自然な口語譯を避ければ本文本來の形を無視した様な風になる時は時間の許す限り此の邊の理由をよく述べておく方がよい。つまり更に語を換えて繰返せば本來本文の形式を無視した口語譯をする場合は意味もなくその無視した口語譯形式を採つたのでない理由乃至自分の態度、見解、立場を明らかにしておくがよい。

【三〇】 久しく隔りて(疎遠にして居つて)(+久々で+)逢ひたる人の(が)わが方(ワガカタ。その話す自身の方)にありつること(起つた種々の出来事、關係した事。)數々に残りなく語りつゞくるこそ、あいなけれ。(可愛氣がない。)  
【あいなし】 ①面白くないか ②可愛氣がない。愛らしさがない。愛嬌がない。云ふ意味の語であるが此語では②のがよいと思ふ。次に來る「たまさか會へば親しかつた人でも氣恥づかしさ遠慮氣味がするものであるのに厚がましいと云ふ様に續くのであるから。若し「面白くない。」と譯するならばそれは餘程所謂「面白くない」の原意より離れて「如何と思ふ。感心せぬ。」と云ふ意味に解せなくてはならぬ。】隔てなく馴れぬ人も程經て見るは、恥しからぬかは。(恥づかしい様な氣持がしないでありませうかい。+恥づかしいですから……) ↓前にかゝるのである。)

【①あいなし】……①可愛ゆらしげなし。②面白なし。

「世に語り傳ふることまこと(實際の事は) あいなき(面白なき)にや多くは皆そらこと(うそこと)なり。」(徒然草)

【三一】 大事(佛道修業の大事)を思ひ立たむ人(思ひ立つ人)はさりがたく(その事をさても見捨て去る事が出来なくつて)心にかからむこと(心にかゝること)の本意をとげずして(本望を達しないで)(+途中でもよいから+)さながら(そのままつきり)捨つべきなり。(ればならぬ。) ↓然るに、さう云ふ風に考へないで ↓+ しばし此の事(+を+) (+成し+) 果て、(+それからしようと思つたり+) (+又+) 同じくは(同じ事なら)彼の事沙汰しおきて(始末をしておいて) ↓+ からにしよう+) (+さか+) (+又は+) しかじかの事(此れく)の事を此のままに打捨て置いては此の事は)人のあざけりやあらむ。( ↓+ であるから+) 行末(將來)難なく(凡べて此の様な非難せられる点の無い様に) したためまうけて(處置をして置いて) ↓+ からにしよう+) (+又は+) 年頃もあれはこそあれ(永年かうしてやつて來たのであるから今更それを直ぐ思ひ斷つ程の事はない)(+一体又+) その事待た



【**む**】**む**（その事が済むのを待つのも幾らもない事であらう。）（+であるから+）**物さはがしからぬやうに**（さうあはてぬ様にして）（+ゆつくりと落ちついて佛道信仰には取りかかる様にしよう+）**など思はむには、えさらぬ事**（止むを得ぬ用事）の**みいとどかさなりて、事**（それ等用事）の**つくるかぎり**（際限）もなく（+佛道修業を+）**思ひ立つ日もあるべからず**。（到底有り得ない。）**おほやう**（大体）**人を見るに、少し心ある**（道理の分つてゐる）**きは**（際、程度の人）**は皆このあらし**（豫定）（+のみ+）**にてぞ一期**（一生涯）**は過ぐめる**（過して終ふ様である。）

【**三二**】**まかしきことをいひてもいたく興ぜぬと興なきことをいひてもよく笑ふにぞ品**（人品）の**ほど**（程度）は**量られぬ**【**強めた辭であるから此の助動詞の助けてゐる動詞の上に「實際」をか「ほんさうに」をかを補つて譯したらよからう。**】**べき**。人の**見さま**（「見た様子」と云ふので、容貌や行跡等一切のこと）【**此の「見さま」を「身さま」と文字を改めて「一切行動立居」の意味に譯したのがあるが必ずしもさうしなくとも行跡行動の意に取れると思ふ。「見解」と譯すのは悪い。**】の**よしあし**（+や又+）**才**（「ザエ」學才）ある人（+に就て→+）**はそのことなど**（即ち才ある人の學才等に就て）**定め**（批評す。論じあふ。）**あへるにおのが身に引きかけて**（標準にして）**いひ出たるとわびし**。（聞きづらいものである。）

【(イ)人の見さまの……】……此處は種々の解釋が行はれてゐる様である。

(イ)人の見さまのよしあし（+をば批評するに當りて+）才ある人はそのことなど（即ち人の見さまのよしあしなど）定めあへるにおのが……。

(ロ)人の見さまのよしあし（+をば論じ合ふに當りて+）（+此處に+）才ある人はそのこと（その事。あんな事。そんな事。）（+があつた+）など（+と云つて+）定めあへるに（+下等の人は+）おのが身に引きかけて……。

即ち「定めあへるにおのが身に引きかけていひ出たるとる」の主語は

- (イ)は才ある人
  - (ロ)は下等の人
- であり

「定めあへる」の語の目的は

(イ)は「人の見さまのよしあし」であり然して二度目に今一度同格ものを「そのことなど」で重ねて表はしてゐるを見る。



(ロ)は「矢張「人の見さまのよしあし」であるが其の次ぎに来る句即ち「才ある人はそんな事があつたなご云ふ事」と云ふ句が前の「人の見さまのよしあし論評」の具体的一つの事例としてあげられて同じく目的を表はしてゐるを見るのである。

解釋篇中の主語は「一般人になり」

目的は「(1)人の見さまのよしあし。(2)才學ある人に就てはその才學の事である。」

【三三】 名を聞くより(聞くこと。聞く事によりて)やがて(直ぐ)面影(顔の様子)は推し量らるゝ心ちするを<sup>(1)</sup>

(の)に。が。(+)それならば見る時はその想像通りであるか云ふその實は決してさうこのみ行かないで+)【反對の「を」】見る時はまた、かねて思ひつるまゝの顔したる人こそ無けれ。(人云つたらほんに無いものですわい。)昔物語を聞きても(+)其の昔話に出て来る場所は。其の話の場所は。+)この頃の人の家の(この頃の人の家で云へば)そこほど(そこら邊り)【(1)此處に解したのは昔物語に出て来る場所が↓今で云へばあの家の邊りであつたらうと解釋したのであるが(2)今一つの説は昔物語に出て来る家の様子、工具、程度が今の人で云へば某々の家のその程度であつたらう……の二様がある。即ち主語を家の場所とすれば「程」が「邊り」となり主語を家の具合とすれば程が「程度」となる。】にてぞありけむ

(ま、あつたらうよ)と覺え、人も(物語りの中の人物も)今見る人のうちに、想ひよそへらるゝ(自然想ひ比べられてならない)(+事+)は、誰もかく覺ゆるにや。(誰もかように感じるのであらうか。又感じないであらうか。どうだらうか。)

【(1)を】……反對の「を」の譯し方。

【(2)こそ——けれ】……係り結びの譯し方。

【(3)ほど】の譯し方……(1)程度。(2)道程。(3)邊。(4)時分。(5)間。(6)身の程度。身分。(7)……する中に「(8)……するので」「(9)……してゐる」と

【(4)らる】……自發の「らる」の譯し方。

【(5)体言止めの主格】……(+の+)(+事+)を補ふ。

【三四】 又いかなる折ぞ<sup>(1)</sup>(か)(+はつきりわからぬが+)(+まにかく+)たゞ今人のいふ事も、目に見ゆるものも、わが心の中も(今人の云ふ事、即ち自分が耳にする事も、又自分の目に見ゆるもの、即ち自分が今見てゐるもの、又我が心の中、即ち自分が今思ふ事も)かかる事(此の様な事。即ち今列擧した様な事)



の(が) いつぞやありしが (いつぞやあのたがなあ) と (+ それだけは+) 覺えて (感じて。気が着いて) いつとは思ひ出てねども、まさしく (たしかに) ありし心ちするは (+ 一体+) わればかりかく (こんな風に) 思ふにや。(思ふのであらうか。どうであらうか。疑問に思ふ。)

【①いかなる折ぞ】……此の語が次の何れにかゝるかは考慮に價する。普通の註釋書にはそこら確實につきこめてない様である。多くは次ぎの「ありしが」にかゝるさしてあるが此れは少し疑問である。何さなれば「いつぞや」と云ふ次の副詞と重複する事になる。即ち「いかなる折ぞ」なる語と「いつぞや」は同格であるから、敢へて同類語を二度用ひた事となる。「いつかハッキリせぬが……」のことがよくあるのは「の意である。」

【②の】……助詞の用法には一般に注意を用す。此の「の」は「が」の意味に用ひられたので此れ等は左迄難点ではないがさもなく助詞には注意を要す。

【三五】 世に語り傳へること (言ひ傳へること) (+ 十) まこと (眞實のことと言つたのでは) あいなきにや (面白くないのか) (+ 恐らくさうなのであらう+) 多くは皆それごと (虚言。偽りごと) なり。ある

にも過ぎて (實際以上に) 人は物を言ひなす (假構捏造して言ふ) に (の) まして年月過ぎ、境 (場所) も隔りぬれば (……て終ふと言ふ) 言ひたきままに語りなし (偽り言ふて) (+ 終には+) 筆 (記録、文章) にもとどめぬれば (止めて終ふ) なり (そのまま) 定まりぬ。(愈々事實定まつて終ふ。)

【三六】 (+ 一体人) と話をするに當つて (+) けに (く) しく (事實らしく) (+ 話して+) (+ 自分のはつきりせぬ人の疑ひさうな所はわざと+) ところ (うち) おぼめぎ (ぼんやりさせて) よく知らぬ由 (風) して、さりながら (然し) つまづま (話のはしげし) (+ 十) 合せて語るそらごと (虚偽の話) はおそろしき (大へん悪い) ことなり。わがため面目ある様に (「体裁のよい様に」を譯しておく。「面目」とは世の中に立ちて相當の地歩を占め、他人に對してはづかしからぬさま) いはれぬるそらごとは人いたく (いたく+) は あらがはず。(反抗しません。)(+ 又時には前の様に自分の面目体裁を造らふためばかりの虚言でなくとも次の様に随分みんなの面白がる様な虚言を云ふものもあるが此の+) みな人の興ずるそらごと (+ 對して+) は (+ その虚言を人が話す時+) 獨り (自分が獨り發言して) (+ その人に向ひ+) さもなかりしものま (さうでもなかつた、あなたが話してゐる様でも實際はなかつたのに) (+ ながさ+) とい



はむもせむなくて(つまらない事であるので)

聞きぬるほどに(聞いてゐるさその中に)

隠人にさへ

(までも) されていどど (さうく) 全く 定りぬべし。(事實を云ふことになつて終ふであらう。) とにか くにもそらごと多き世なり。

【三七】

何事も(につけても) 入りたため (立ち入らぬ、深く知つてゐない様な) さましたる (態度で居る) (十の  
が、事が、+) ぞ (まことに、ほんさうに) よき。(よい事がありますぞ、……わい。) よき人 (賢い人)  
は、知りたる事とて (たとへ……事だからと云つて) さのみ (さうく) ばかり、一も二もなくさうまで  
知りがほにやは云ふ。(反語である。) かた田舎よりさし出てる人こそ 「こそ」は係り結びの「係り」  
である。即ち強辭法を用ひてあるのであるから、いつも云ふ様に解釋する時強意の心持が表れる様な文  
にしておく事が必要である。】 よろづの道(事) に心得たる (心得てゐる、會得してゐる、承知してゐる)  
よし (様に、風に、らしい) さしいら (應對) はすれ。 されば (十此等田舎漢即ち知つた振りする人を  
見るさ+) 世に (非常に、甚だ) はづかしき (その人には此方が恥づかしく思ふ様な) 方 (すぐれてゐる  
方面) もあれど (十惜しい事には+) みづからも (その人自分からも) いみじと (自分はすぐれてゐる  
さ) 思へるけしき (様子、態度) (十は+) かたくな (おろか) 「頑冥。 見苦し。 下品等と隠してもよから

う。】 なり。 よくわきまへたる道(事) には必ず口重く、(容易に口を開かず) 問はぬ限りはいはぬこそい  
みじ (結構) けれ。(でありますよ。)

【三八】

人の心 すなほならねば (正直でないから) 偽なきにしもあらず。 されど (十其人な人の中にも+) おのづ  
から (自然) 正直の人などかなからん。 おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。(世の  
常にある事。普通の事。) 至りて愚なる人は、たまく 賢なる人を見て、之をにくむ。(十而して次の様に  
賢者を譏るのである+) 至りて (十即ち+) 賢者と云ふものは非常無欲恬淡とした風をして居るがあれ  
は實際はさうでなく+) 「おほきなる利を得んがために、すこしきの利をうけず、偽り飾りて名をたてんと  
す。」と 誇る。 己が心 (その下愚の人の心) に (十比べる) 賢人の利を思ふ心が、趣きが+ 違へるに  
よりて (違ふものだからして) (十己れの心推量から+) 此の嘲をなすにて (のであるから) 知りぬ。(至  
愚の人だ。矢張り馬鹿だと云ふ事が分る。) 「次の事柄を知る事が出来る」と解したのもある。】 此の人は  
下愚うつるべからず (最下等の性質はとて賢に移らず) 「論語に「上智與下愚不移」とあり。】 偽りて (十  
大利を辭する様な事が出来ないのは勿論+) 小利をも辭すべからず。(小利も偽り辭す等と云ふ事は出来な  
いだらう。)(十故に宜しく賢を學び+) 假にも愚を學べからず。(べきではない。) 狂人のまねとて



大路を走らば則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥(1)(一日千里を走る駿馬)を學ぶは驥のたぐひ(類)。仲間(2)受を學ぶは受の徒(3)(まがら、仲間)なり。偽りても賢を學ばんを賢といふべし。

.....  
【(1)驥を學ぶは.....】...蹄、驥之馬亦驥之乘也。蹄、顔之人亦顔之徒也。(楊子方言)

【(2)舜を學ぶは云々】...子服、堯之服、誦、堯之言、行、堯之行、是堯而已矣。(孟子)

【五九】ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢(二本の矢)をたばさみて(手に挟み持ちて)的にむかふ。師のいはく「初心(習ひ初め)の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢(二番目の矢)」。【兩矢の中前の矢を甲矢「ハヤ」云ひ後の矢を乙矢「ヲトヤ」云ふ。】を積み、初の矢になほさりの心(輕卒に考へる心)あり。毎度ただ得失なく(得失の考へ。即ち最初の矢であつて損をして次で損をして)その損失はとりかへす等の損得に關して考へを持たないで。即ち又「あたるさかあたらぬさかの考へ無く」と云つてもよい。即ち結局「あたらぬなら云々云ふ様な考へなく」この「一矢に定むべし」(此の一本の矢で必ずあてねばならぬ)と思へ。といふ。(十成程、考へて見るに十)僅かに二つの矢(十を持つて十)(十而かも十)師の前にて(十何として十)(十その中の十)一つをおろそかにせむと思はむや。

・**懈怠**(「ケタイ」怠りなまける)の心(十が起つてゐる等と云ふ事は十)みづから(十は十)知らずといへども、師これを知る。このいましめ(訓誡)(十は十)萬事にわたるべし。(萬づの事にわたつて考へる事が出来る。萬事にわたつて注意せねばならぬことである。)

【四〇】道(學問)。「※此の「道」を「人倫の道」の意に解するならば今日の狀況から考へては單に「學問」と云つたのではしつくりあてはまつた解釋の様に思はれない。何故なれば遺憾ながら今日の所謂「學問」は「人の道」を修めるための學問になつてゐないから。然しながら、昔とは「學問」と云へば多く「人の道」を修めるためにしてゐたのであるからそんな時代を基準に置くならば此處等も「學問」と譯しておいてよからう。※尙ほ此の「道」をすべて「人道、藝道」と見てもよからう。】を學する人(十は凡べて一般には十)夕にはあしたあらむことを思ひ(夕方には明朝があるからまあ今勉強を怠がないでも又明朝の時を頼んで勉めようと思ひ)(十又十)(十同様に十)あしたにはゆふべあらむ(あるだらう)(十されればその時勉め勵まん.....さかう云ふ風な↓十)ことを思ひて、重ねて(くり返して)ねんごろに修せむことを期す。(十かゝる様子より眺めるさ云ふさ實に人は随分大きなままつた一日さか半日さか云ふ光陰をゆづりゆづりてさへ此れで別段此のやり方、此の考へ方、即ちあすを頼む心がとりもなほさず時間空費の轍



を踏んでゐるのであるさは氣が着いてゐないのであるからまして十→況や「刹那」(最も短い時間の單位。一度指を弾く間と云ふ。)のうちにおいてけだ(懈怠)の心ある事を知らむや。(氣が着かうか、着かない。)(十げに考へて見ると云ふと十)(十人は十)何ぞただ今の一念「甘刹那を一念と云ふ。」において(十自分の本務を十)ただちにすることの基だかたき。(困難な事であるよ)

【四一】寸陰惜む人なし。これよく知れるか。(寸陰惜むべきの理を知りてなほ實行出來ないのか。)(十或はそれと十)おろかなるか。(愚にして寸陰を惜しむべき事を知らざる爲に實行出來ないのか)(十前者に對しては早や説く要もない致し方ないことであるが十)愚にして怠る人のために云はゞ(十先づかう云ふわけがらではないか。宜しく注意すべきだぞ。即ち十)一錢輕しといへども、これを累ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜む心、切なり。(非常なものである。)刹那「印度に於ける時の單位。「劫」は時の最大單位で、「刹那」は最小單位。」覺えずといへども(氣にも付かない程であるけれども)これを運びて(送り行きて)やまされば、命を終る期、忽にいたる。されば道人(佛道修業する人)は速く(遠大の事のみを考へて)日月を(日、月、又は歳と云ふ様な、大きい時ばかりに目を付けてその日月を→)惜むべからず。只、今の一念(一刹那と云ふに同じ)空しく過ぐることを惜むべし。

【四二】貧しきものは財をもて(財貨を人に贈ることを以つて)禮とし(禮儀であるを考へ)老いたる者は力を以て(勞作、勢力を他人に提供する事を以つて)禮とす。(→十思ふに貧者は常に貨財物資に乏しいので己れの境遇より推し及ぼして人に財貨を贈るを以て最も他人の喜ぶことであるを考へ又思ふに老人は常に己が体力の足らずして勞作に堪へざる苦しき經驗より勢力を他に提供するを以て最大の禮なりと考ふるは無理からの事なれども→十是れが又抑々誤りである。貧者であり、老人である事が既に所謂「一人前」でないと思はねばならぬ。「一人前」の慾望を遂げ得べき分でないのである。正しく間違つた考へである。→十一体すべて→十)おのが分を知りて及ばざる時(到底自分に出來さうにない時)(十は十)速に止むを智と云ふべし。許さざらむは(止める事を許さないのは)人のあやまりなり。(→十決して自分の誤ではないのである。十若し又他人が強要せぬのに自から十)分を知らずして強ひて勵むはおのれがあやまりなり。貧しくして分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病を受く。

【四三】花はさかりに(盛の満開の時に)月は圓(曇り)なき(十の十)をのみ見るものは。(眺めるものであらうか。決してさうではあるまい。)雨にむかひて(十月を眺めようと思ふ時に十雨に降られて眺めることも出來ず徒らに雨に向ひ居て、對し居て)月をこひ(眺め度くこひしく思ひ)たれこめて(塵などを垂



れて家の中に籠つてゐて、春のゆくへ（春が経過して行く様子）知らぬも、なほ（矢張）あはれに（感興があつて）なさけ（情趣）深し。（+即ち何でも十分でない所に一層の情趣を感じられるものである+）喚きぬべき（殆んど咲き切つて終ふ様な）程の（程度の）櫛（枝々）（+や+）（+又は+）散りしをれたる（梢々からは散つて終つて落つたのがしぼんでしまつてゐる。「しなる」||よはりたむ。たわみしぼむ。）庭などこそ、見どころ（見るに足る、いゝ所、いゝ点、見る價值）多けれ。歌のことはがき（歌のはしがき。「歌の題」と云つてもよからう）にも「花見にまかれりけるに（行つたところが）はやく散りすぎにければ（+かく詠んだ+）」とも「さばる（花見に行く支障）ことありて、まからで。」（行かないで）（+かく詠んだ+）なども書けるは「花を見て。」と云へるにおとれることかは。【反語である。】

【四四】よろづの事は始終（その始や終が）こそまかしけれ。望月（満月）のくま（曇り）なきを（一点の曇りもない満月を）千里の外（即ち非常の遠方）までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたる（その時迄待つてやつと出て来たところの）【曉近くなつて出るのは月の廿日頃から廿五日頃迄の月である。】（+月+）がいと心深う（趣が深く）【心深う青みたるは續くのではない。】（+又+然しその曉方の月でも+）+（+特にあの夕方の月の様に黄味を帯びすして+）青みたるやうにて【夕方の月は黄味を帯び明方の月

は青みたりと云ふ。】深き山の杉の梢に見えたる（杉の枝の邊に見えてゐる—↓）木の間の（木の間にちらづく）影（月影。月。）（+や又+）うち（一寸）しぐれたる（秋冬の頃の雨が降つたり止んだりしぐれた空の）むら雲（一叢の雲）がくれのほど（……にかくれた時等の月と云ふものは）又なくあはれなり。榊（榊の枝。榊の木。）しらかし（白樫）などの（+つやつやと+）ぬれたるやうなる葉の上にきらめき（きらきら月光の輝いて）たる（て+ある）（+のは。月光は。+）こそ身にしてみて心あらむ（風流心のある。物の趣味を解する心ある）【兼好は此の頃は雙が岡なる田舎に居を構へてゐたのである。それで田舎には風流人は居らず、友戀しく都戀しく思つたのである】友もがな（愁しい）と都こひしうおぼゆれ。

【四三】しぐれ「時雨」の降る事。しぐれ||秋冬にかけて降つたり止んだり繁く降る雨又特に時雨が降る様な音を立てて風の吹くことに云ふ。

【四二】「たる」は完了の助動詞であるが「……てしまった。」と口語譯せないで「て+ある」の現在に譯す場合が多いから注意を要す。

【四五】すべて、月花をばさのみ（さう〜）。さうばかり（目にて見るものは。（+心にても観すべきものであ



る十) 春は家を立ち去らても(出て行かなくつても) 月の夜はねや(寢床)【寢所。寢室。を譯してもよ  
 いが此處では前者に譯してよい。】の中ながらも(寢て居て) 思へるこそ(月夜の風情花の眺めを彼是想  
 像する事は誠に) いとたのもうしう(望ましく) おかしけれ。(面白いことでありますよ。)

【四六】 家にありたき木は松櫻。松は五葉もよし。花(櫻花) は一重なる(である)(十のが十)よし。八重櫻は  
 奈良の都にのみありけるを此の頃ぞ世に多くなり侍るなる。(なつたのである。)  
 殿の御階の前の左にあり。右にある橋を右近の橋と云ふ。左近、右近の陣の近き處なればいふのである。  
 また、南殿の櫻、南殿の橋とも云ふ。【みなひとへにてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり。(風變  
 つたものである。)]いと(甚だ) こちたく(こつこく、くどく) ねぢけたり。(すなほでない。) 植ゑずと  
 もありなん。(植ゑないでおいの方がよい。【此處を單に植ゑないでもよいであらうと譯すのは感心しな  
 い。】「なむ。」の文法的用法から考へて選擇の意に譯すべきである。】選櫻またすさまじ。(面白くない。)  
 虫の(毛虫) つきたるもむつかし。(いやな氣味のするものである。)

(1)助動詞の完了と未來と結合して未來完了の形をしてゐるもの。

【なむ】……「なむ」は

- (一)種々の用法
  - (二)純粹な未來完了から推量の意に轉じ、それが更に **選擇** の意を表はすことあり。
- (2)助詞
- (一)係結びの場合。
  - (二)……してほしいと云ふ願望を表はす場合。

右の如くであつて(1)の(二)と(2)の(二)とはよく似た形式と意味とを持つてゐる。

即ち(1)の(二)……連用段に連りて選擇の意。(助動詞)  
 (2)の(二)……未然段に連りて願望の意。(助詞。)

従つて未然段と連用段とが同形なる時は見分けが付きにくいのである。

【四七】 身死して財(種々貴重な品物)(十が十)のこることは智者(道理の分つた者)のせざるところなり。  
 よからぬもの(碌でもない物)たくはへ置きたるもつたなく(その人の心性素性が拙劣に感じられるし)  
 (十又十)よきものは(立派な品物が残つてゐるとすればそれを見るこ)心をとめけむと(かゝるものに



心をさめけむと。あんな風なものに關心を持つてゐたのであらうかと。あんなものに執着心を持つてゐたのであらうかと(十思はれて→+) **はかなし**。【頼りない。】「つまらない。」「馬鹿馬鹿しい。」と云ふ様な心持ちで云つてゐるのである。従つて「つまらなく思はれる。」と云ふのは同情的に眺めるなら「頼りない事に執着を持つてゐたとは氣の毒な事である。」となり、又更に程度を進めて少しく侮蔑の眼を以てすれば「憐憫に堪へぬ。」ともなるであらう。【+又+】**こちたく**(こてこてき)【「こちたく」】と云ふのは「言痛し。」の義で「人の言ふことがうるさい。」と云ふ様な原の意味であつて、(1)くさい。しつこい。うるさい。(2)甚だし。こまこまし。仰山げ。等の意となる【多かるまして口惜し。(十又一方、かく遺された財産、財物などがある→+)】**「我こそ得ぬ。」**(私がその遺産、遺物はまあ貰ひませうわい。)等いふものどもありて、**あとに争ひたる**(死後に例の遺産争ひ等します)(十のは+) **さまあし**。(醜態である。)**後は**(自分が死んだ後は)(+此の遺産遺物は+) **誰に**(+ゆづらう+)と、**こころさすもの**あらば **生けらむうち**(生きてゐる中。)**「文法的に解剖するならば四段活用「生く。」の已然段に完了の「り」の未然段「ら」が滑ひ、更に未來の「む」の滑へるもの。文法的に嚴譯すれば「生きてゐるであらう中」となるわけである。】にぞ譲るべき。朝夕なくてはかなはさらむ物(必要品は) **こそ**(それは) **あらめ**(貯へて**

もよいであらうけれども)その外は何も持たてぞあらまほしき。

【四八】 **能**(何か藝道のわざ) **まつかむと**(身につけようと)する人、(+が+) **よくせさらむ程は**(上手にその藝が出来ない内は。「む」は未來であるが、此處では例により「現在」に譯しておく。) **なまじひに**(なまじつか。) **人に知られじ、うちく**(内々で)よく習ひえて、**さし出てたらむこそ**(入中に出たらばそれはほんとうに) **心にくからめ**。(奥ゆかしい事であらうわい。)**【單に「にくく思ふ。」と云ふのとは違ふ。物事が自己の感を奮ふ様な氣のする点に於ては同じである。】と常にいふめれど**(云ふ様であるが。云ふらしいが。)**【此處らでは「らしい」と譯しても「様である。」と譯してもどちらで當てはまる所である。場所によるさごうも「らしい。」では不自然な場合があり。注意を要す。】かくいふ人一藝も習ひうるることなし。**(→+反對にさうは考へないで→+) **いまだ堅固**(藝が堅くて圓熟しない)(+で+) **かたほ**(片帆。不完全。)なる(+時+)より、**上手の中にまじりて、そしり笑はるるにも恥ぢず、つれなく**(平氣で。)**【「強情」さか「強面」さか書いて「ツレナシ。」と讀んでゐる。(1)情が強い。」さか(2)「無情である」さか(3)「情「ナサケ」ない」さか種々となる。さうして更に(4)に「平氣で」さか「そしらぬ顔して」さか云ふ意味で随分用ひられてゐる。】過ぎて(やつて行つて) **たしなむ**(好んでやる。熱心にやる)人(七**



は十)天性その骨(「コツ」天賦の才能)なけれども、道になづまず(修業の道に拘泥せず。【又「藝道に怠け滯らす」を解釋したのもあるが一体「なづむ」とは「拘泥すること。」「執着すること。」「滯る。」のであるから矢張「怠けること」にもなる。】(十それか云つて+)みだりにせずして(無法矢鱈にする事なく藝道を大切に)年を選れば(年を積むから)堪能の(「カンノウ」上手の)(十人が+)たしなまざるよりは、遂に上手の上に至り、徳だけ(徳望も増し)人にゆるされて(名人達人と認められ許されて)ならびなき名(名譽。名聲。)を得ることなり。(十凡そ+)天下の(天下第一流といはれる程の)もの上手(藝道の達人)といへども、はじめは不堪(不器用、下手)の聞え(評判)もあり、むげ(随分の、ひどい)環瑾(欠点)もありき。されどもその人、道のおきて正しく(十守り+)これを(此の規則を守るを云ふ。こさを)重くして、放埒(「ホウラツ」我が儘勝手)せざれば、世の(天下に名ある)博士(達人)にて(となりて)萬人の師(模範たるの人)となること、諸道かはるべからず。

【四九】「道にたづさはる人(二つの藝道に關係してそれを修めてゐる人)(十が+)あらぬ道の(自分の修めて居る道とは關係のない藝道の)むしろ(會合の席)に臨みて、【此の次の言葉は此會合の席に臨んだ此の人の云ふ語である】「あはれ(ああ)わが道ならまし(若し此れが自分の事間に修めて居る藝道に關係

してゐる會合の席であるならばよい)のなあ)(十そうすれば+)かくよそに見待らじ(立ち入りもしないでよそ事に傍觀しては居ない)ものを(ものになあ)(十事實は自分の専門以外の會合の事である故かくして傍觀して居なければならぬ。何たる残念な事ではないかな)といひ(十又實際云ふだけでなく)↓+)心にも思へること常の事なれど、よに(大邊、非常に)わろくおぼゆるなり。しらぬ道の(を)うらやましくおぼえは、<sup>(3)</sup>「あなうらやまし。なか習はさりけむ。(十如何にも残念な事だ+) (十な)↑+)といひてありなむ。(↑)といつておればよいのだ。)

【①】「ましかば」又は「まし」……何故此の「ましかば」が假定の條件を示す意なるか。一体此の「まし」は推量の助動詞である。何れの場合でも「ましかば」と已然形+助詞「ば」となつてゐる時は既に確定的の事實現象が生起して居るのを假にその反對の事實を定めて推量し假定する場合に用ふるのである。有名なる「念がすば濡れざらまし」<sup>(2)</sup>を旅人のあさより晴るる野路の村雨「さか又は「世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。」さかの歌の中の「まし」に就て考へて見るに最も此の邊の消息が明瞭なるであらう。又此の如き嚴格な意味で用ひら



れないで單に推量助動詞「む」の様な用法で用ひられてある場合がある。然し此の場合も特別の意味を持つて居る様である。即ち「雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅ぞわきて折らまし。」の例に於ては「まし」の附いてゐる「分きて折る」と云ふ動作が「雪が降つて木毎に花が咲いてゐる」爲に非常に困難な場合として用ひられてゐる。

【此の章の精神に就て】……此の全文を譯するに當りて「あはれ、我が道ならましかばかくよそに見侍らじものを。」と云ふ心根と「あなうらやまし。なごか習はざりけむ。」と云ふ精神と何故に前者の精神が悪いのかと云ふ眞意を明瞭にする事が大切である。文の眞意を理解しないと往々譯文が死んで來る様になる。眞の精神が躍如として來ぬ。只試験答案を認める等の場合は嚴譯摘譯が大切であつて不要の敷衍の言を徒らに挿入附加することは飽く迄も注意せねばならぬが、必要缺くべからざるの箇所に至りては宜しく眞意を表現する爲には適當な敷衍も行はねばならぬ。此處は前者は「自分の不勉強なりしを歎ずるのではなくて兎にも角にも己が専門外の能をば他人のたづさはる道と張り合ひ争ふ事に興味を持つ結果それが出來ないのが残念なのであり」後者の心根は「そんな争ふふさが張り合ふとかの虚榮心の満足な喫し得ないのが残念なので

はなく兎も角いづれの道にせよ自己の修業の足らざるを恨むのであり」其の間自らその心性の高卑の別があるわけである。】

【五〇】年老いたる人の、一事すぐれたる才能（才能藝能）ありて、「此の人の後には誰にか問はん。」など云はるは（頼みに思はれて持囃されるのは）老（老人）のかたうど（味方）にて（十老人たりとも十）（十そんなに稱讃して呉れる味方が居る位ならば十）いけるもいたづら（むだ）ならず。さはあれど、それもすたれたる所（年老いても藝道が一向に退歩廢類する所）のなきは、一生此の事にてくれにけり（此の人は一生涯此の藝道のみをやつて暮して終つた。それで他の事は出來ずして此の藝道が、こんなに冴えてゐるのであるわい。）と（十その人の心根も十）つたなく（見苦しく。愚に。）みゆ。「今は忘れにけり。」と云ひてありなん。（云ふてゐるのが良い）

【五一】大かたは（概して老人に限らず一般的に）【此の（大方）は】大部は知つてゐてもと譯したのがあるが如何はし。】知りたりとも、すぐろ（やたらに）に云ひちらすは、さばかり（それ程の、大した）の才にはあらぬにやと聞え、（十又實際そんなに大言してゐても十）おのづから（自然）あやまりも有りぬ（意味を強めた「お」である。）べし。「さだかにもわきまへ知らず。」など云ひたるは、なほ（矢張）まことに道の



**あるじ** (その道の大家) 【あるじ博士とか棟梁とかの意に解してもよい。】 **とも覚えぬべし** (思はれるであらうよ) **まして知らぬこと (+を+)** **したり顔におとなしく** (おまならしく立派で) 【此れはその得意氣に話す人の身柄を云つたのである。即ちその得意氣に言ひ聞かす人は如何の人か云ふさ「おまなく即ち立派で目上の人でその人に對しては相手の者は彼是非難等は出来さうにもない様な人が」その意味である。】 **もどき** (非難する) **ぬべく** (可能のべくである) **もあらぬ人の、言ひきかするを (+此方聞いてゐる方では+)** **さもあらず** (さうでもないよ) **と思ひながら (+然し向ふが目上ではあるし非難も出来ず+黙つて→+)** **聞き居たる** (聞いてゐる) (+のは+) **いとわびし** (いやだ。不快である).....

【①大方】.....凡べて副詞は何れの語を修飾限定するか即ち何れの語にかかるかを探究する事が大切である。限定語が被限定語の直上に來てゐても居ないでも即ち他の語を隔て、限定して居ても多くの場合意味の上から推定出来るものであるけれども時に非常に此の邊の見定め付かない場合があり、隨ひて解義の上に飛んでもない誤りを來す事があるから注意を要す。

【②「わ。」】.....助動詞「わ」を單に意味を強める爲に用ひたる例。

【③「わびし。」】.....種々の用法のある語である。

①淋しい。心細い。退屈。

②つらい。いやなものである。不快である。悲しい。堪へ難い。

③貧しい。

【五二】 **さしたる** (大した、重要な) **事** (用事) **なくて人のがり** (人の許へ) **行くはよからぬことなり** (+若し止むなく+) **用ありて行きたりとも、その事ははなば疾くかへるべし**。 **久しく居たる** (留つて居る事は) **いとむづかし**。(厄介である。うるさい。) **人と對ひたれば、ことは多く、身もくたびれ、心も靜かならず**。(+) **又かくて自然そのために+** **よろづの事** (種々用事が) **さはりて** (差支が出來て) **時をうつす** (時間を空費す)。(+) **是等の事は+** **たがひのため益なし**。(+) **それならばさいつてかくお互に益なき無用の來客があつた時→+** **いとほしげに** (主人の方から如何にも迷惑さうに) **いはむもわるし**。(→+然しながら矢張り+特に自分に何か用事でもあつて→+) **心づきなき時は** (氣乗りのこない様な場合に) **は) なかなか** (却つて) **そのよし** (その事情。今日は生憎の用件で何うも時間の都合が付きかゝると云ふ事情。理事わけ) (+を+) **言ひてむ**。(言ふがよい) 【てむ】を文法上より解剖すれば完了の助動詞



「つ」の未然形「て」に未來の助動詞「む」の添ふた未來完了の形。文法上より嚴譯すれば「言ふてしまふであらう。」さなるわけである。然し此くの如く結合された形になつて終ふと此の形の表はす意味は完了の意を表はさないで強い意志を表はし又願望の意を表はす様になる。(十然しながら↓+) 同じ心に(自分さよく氣が合つて) (十自分はその人さ↓+) 向はまほしく(對坐したく) 思はむ人(思ふ程の人)。「む」は未來の助動詞であるが矢張「現在」に譯しておく。の(が)つれづれにて(退屈して↓その人が↓+)「今しばし。(十御話し下さい。+) 今日心靜かに。(御ゆつくりさ) (十なさい。+)」などいはむは(言ふ時は)この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼は「阮籍」支那晉の代の竹林七賢の中の一人。阮籍が氣に入つた人を青い眼を以て迎へ、さうでない人には白い眼を以て對したと云ふ様に好惡に對して人々場合場合相當の表情を探る事は) 誰もあるべき事なり。そのことなきに(格別の用事があるでもないのに)人の來りて、のどかに物語して歸りぬる(十事、それは+)いとよし。又文も、(手紙も)「久しく聞えさせねば、(久しく御書面差上げませんから) (↓+一筆申し上げます+)」などばかりいひおこせたるいとうれし。

【五三】よろづの道(藝道)(十に携はるさころ+)の人(即ち専門家)(十は+)たとひ不堪なり(堪能ならぬ、

さ、下手)といへども、堪能の(上手なる)非家(非専門家)にならぶ時(立ちならんだ場合には)必ずまさることは(優れてゐるものであるがそのわけは)(十専門家の人は+)たゆみなくつゝしみてかるくしくせぬと(十又一方非専門の人は+)ひとへに自由(勝手氣儘)なるとの(十点に於て+)ひとしからぬなり。藝能(技藝)所作(しわざ。矢張、技藝と云ふと同じ様な意味に使つたのであらう。)のみにあらず、大かたのふるまひ心づかひ(注意のしかた)もおろそかにしてつゝしめるは(↓+たさひ才能は至らないでも慎しみ慎しんでゐること)得(利得)のもとなり。(十是に反して+) たくみにして(上手であつて)ほしきまゝなるは(勝手氣儘なのは)失(損失)のもとなり。

【五四】暗き(闇愚なる)人の(が)人(他人)(十の智識の程度等↓+)をばかりて(推測して)その智を知れり(推知し得た)と思はむ(思ふさしても此の思ふ事は)更に(到底)當るべからず。(當を得る事は出来ない。)(十例へば+) (十何をさせても+)拙き人の(で然し)基うつことばかりに敏く(拔目なくて)たくみなる(十人+)は、賢き人の(が)此の藝(甚をうつわざ)におろかなるを見て、(十その賢き人の智慧はすべて↓+)おのれが智に及ばずとさだめて、(定め+かくして+即ち+)萬の道のたくみ(専門家)(十は+)わが(その専門家の)道を人の知らざるを見て、おのれすぐれたりと思はむこと、



大いなる誤なるべし。文字の法師（學問により智識の修得のみを事とし一向に行を修め座禪を知らぬ僧）  
 （+と+）暗闇の禪師（「文字法師」に反対に座禪工夫のみこれ専らとして教相即ち教の知識に暗き法師。）  
 （+と+）たがひにはかりて（推量りて）（+双方共に+相手の者を→+）おのれに如かずと思へる（思つて+ある）（+のは+）ともに當らず。おのれが境界（佛語。因果應報の理によりて得た境遇の意。此處では分限内。専門。）にあらざる者をば、（↓彼是れ並べて+優劣を→+）争ふべからず。  
 是非（批評）すべからず。

【五五】 眞のとが（過失）あらじ（意志を表はす。過失を無い様にしよう→）と思はば、何事にもまことありて（誠實誠意で）人まわかず、うやくしく、詞少からむには若かじ。男女老少、みなざる人（さう云ふ人、前述の人を指す）よけれども、殊に若く形（容貌）よき人の、ことうるはしきは（詞がよいのは）わすれ難く思ひ付かる（慕はしく思はれてならぬ）。【此處の「るる」は受身でも、可能でも、尊敬でもなく、所謂「自發」の「るる」である。「何さなくさうせずには居れぬ。」「自然にさうなる。」と云ふ様な時に用ひるのである。】ものなり。よろづのとがは、馴れたるさまに上手めき所えたるけしき（得意な様子、自慢らしい態度）にて、人まないがしろにする（輕侮する）にあり。（そこから起るものである。）

【五六】 人の（が）物（或る事）を問ひたるに（場合に）「+この人は即ち問ふた人は+）知らずとしも（知らんと云ふのでもまあ。「し」は強辭。）あらじ。（+自分を試してゐるのかも知れぬ。+であるから+）ありのままに（答へればならぬ事實通りに）いはむはまごがまし。（馬鹿氣である。）とにや（さかう考へるのだらうか）心まどはすやうに、（ぼんやりと、合点しかねる様に）返事したる（返事する事をする）（+のは、又は事は+）よからぬことなり。（+問ふ人は+時に+）知りたることもなほさだかに（+知らう。+）と思ひてや問ふらむ。又まことに（實際）知らぬ人もなかなからむ。うららかに（明瞭に）いひ聞かせたらむ（云ひ聞かせてやる）。「む」に拘泥せず現在に譯しておく。【（+の+）はおとなしく（あたりきはりなく）聞えなまし。（「なまし」は「まし」と略々同じ心持の推量）人（他人）は未だ聞き及ばぬ事を、我が知りたるままに（まかせて）「さても」（さてまあ）その人（これは第三者をさす。）の（+なしたる+）事のあさましさ。（随分驚き果てたひどいことであるよ。）などばかり（なぞそれだけ+答へて他の詳しい事を少しも先方問ふた人に對して云はないで+）いひやりたれば（云ひやるを。）（+先方からは+）（+それならばそのあさましさ等あなたの申されるのは→+）いかなる事のあるにかと（+初め告げた人の方に+）おしかへし問ひにやるこそ心づきなけれ。（氣に喰はぬものですわい。いやな



ものですわい。(+)此等の事は餘程注意すべき事で+一休+↓)世にふりぬる事(云ひふるされてあること)をも、おのづから聞きもらすあたり(事)。「人」と譯したのもあるが如何ならむ。】もあれば、ほづかなからぬやうに(明瞭に、確かに) 告げやりたらむ (「告げやる」の意に譯してよい。常に出て来るやうに「完了」や「未來」や「推量」の助動詞が附いてゐても大体「現在」だけの意で譯してもよい場合なのである。)(+事は+) あしかるべき事は。(↓+別に悪い事ではない。+) かやうの事 (不明瞭な事。聞く人の迷惑する様な事。手数をかける様な事)は 物馴れぬ人 (世事に馴れぬ人。經驗乏しい人) のある(する)事なり。

【(1)確定の「ば」の例外的意味】……「いひやりたれば」は文法通りに譯すと「云ひやりましたから」となるべきであるが、此れも「いひやれば」が確定の「ば」であり乍ら「云ひやります」となると同様の意味で假定に近い「ば」である。ツマリ「ば」の助動は

- (1) 假定形式 || 未然段 + ば …………… ナラ
- (2) 確定形式 || 已然段 + ば …………… ト云フト

(3) 全 || 全 …………… カラ  
 となる様である。

【五七】 ぬし (住家の主) ある家には、すゞろなる人 (そゞろなる人。漫然と當てもなくみだりにやつて来る人) 心のまゝ に入りくることなし。あるじなき所には、道行く人みだりに立ち入る。狐。梟やうのもの (「狐や梟の様なもの」と云ふ意。)も 人げ (人の居るけはひ。人の居る様子) に せかれねば (せきふせぎ止められないから、邪魔し防げられないから) 所得がほに (うまい所を得た、都合のよい場所を得たと云ふ様な顔付で) 入りこみ、こだま (「木霊」「木魂」など、書き老樹の精霊を云ふのである。) などいふけしからぬ (怪しき、一体「けしからぬ」とは「怪しくない」との意味になる筈であるが慣用上「怪し」即ち「あやし」の意味に用ひられてゐる。) かたちもあらはるゝものなり。又鏡には色 (+や+) 形なき故に、よろづの影 (形、すがた) 来りてうつる。鏡に色 (+や+) 形のあらましかは (若しあつたならば) うつらさ らまし (うつらないであらう。) 虚空 (大空。空間) よくものを容る。われらの心に 念々の (雑念が) ほ しまゝ に来り浮ぶも、心といふもの (心といふ主人公、本尊公) なきにやあらむ。心に 主あらましかは (主人があつたならば) 胸の中にそこばくのこと (澤山のこゝ、幾多の雑念) は入り来らざらまし。(+)即



ち家に主あることの大切なごとく心にもその主、本体本尊がなくてはならぬものである。+

(昭和八年度入試問題)

成城高等學校

静かに思へば、よろづ過ぎにし方の戀しきのみぞせむ方なき。人しづまりて後、永き夜のすきびに、何さなき具足さりしたため、殘し置かじと思ふ反古なごやりする中に、なき人の、手習ひ、繪かきすきびたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なごも、心もなくてかはらず久しき、いさかなし。

(徒然草)

(イ) 右ノ文章ヲ解釋セヨ

(ロ) 右ノ文章ニアラハレタ「あはれ」ト「かなし」トノ語義内容ヲ比較説明セヨ(漢文共九〇分)

※ 徒然草解釋篇三六頁參照  
※ 「あはれ」…全二六頁參照

# 増鏡

(室町時代)

作者 不詳

(一條冬良も二條良基も云ひて定らす。)

## 附録

### 増鏡

後鳥羽天皇の御代より後醍醐天皇の弘元三年(天皇が隱岐より御還幸の年)に至る五代百五十年間の事を記した歴史物語である。卷の一「おどろのした」より篇を分つて二十さなし卷二〇「月草の花」で結んである。その記事の運び方は、嵯峨の清涼寺で百餘歳の老尼が、自己の見聞させる歴史に就て物語りするのを書き寫した体裁になつて居るが此れは大鏡に模したものである。内容は、承久の御企、兩皇統の起伏、元弘の御快復、公家であるに係らず武家に接近せんとして榮華を極めた西園寺家に就て等である。神皇正統記等の様には何等の主觀的意見も批判も加へてないで單に客觀的に記述してあるが之が爲に却つて文學的價値を高めてゐる。之に就ては藤岡作太郎博士の國文學史講話中には左の如く出てゐる。

「増鏡は後鳥羽天皇の御即位より後醍醐天皇の建武中興に至る迄の歴史にして、此の間に起れる大小の事實を客觀的に記述して一見別に南北分争に關する何等の意見をも挿めるものに非るが如し。——中略——著者が編述の目的は、極めて平明なるが如し。雖も余輩の選擇にして誤



らすんば、承久の亂を開卷として結末を建武の中興に選べる著者が内心、また、何等の意味をも存せず云ふを得ず。たゞ神皇正統記と選を異にして、明々地に正閏の議論を云爲せず、事實を事實として表面一様の敘述を用ひたるが爲に、その意味を汲むに難んずるのみ。此の増鏡が深く思想を裏に包みて、傾向的著色を帯びざるは、やがてその文學として正統記に優れる所以にして、流麗の筆致またよくその模範たる榮華物語の文章を凌ぎ、大鏡の類にも接せんす。されど時代の先後より云ふも、又絶對的價值より云ふも増鏡は到底假名歴史の隨一として名譽を恣にするには足らざりき。(國文學史講話)

【一】きさらぎの中の五日(陰曆二月十五日)は鶴の林(沙羅樹林。即ち釋迦入滅の地である。)に薪つきにし日【薪つきにし】とは「釋迦の入滅せられたこと」を云ふ。【法華經序品に、「佛此夜滅度、如薪盡火滅」とあり。】猶ほ、「鶴の林云云」に就ては、涅槃經序品に、「二月十五日、臨涅槃時云々、爾時拘尸那城娑羅樹林、其林變白、猶如白鶴」とあり。なれば、かの如來(此處は「釋迦如來」を指す)【如來とは佛の十稱號の中の第一の稱號であつて「如」は「眞如」にて眞理を云ひ、眞理より來れる人なりとの意にて如來と云へり。】二傳の(天竺「印度より支那へ、支那より日本へ」渡つたこと)御かたみ(御形見。御佛「御オモカゲ」。記念像のこと)【此れは、釋迦入滅の時に跋嵯國の主優填大王が之をかなしみ、毘須

羯摩天の化工をして旃檀の香木にて、釋迦の像を刻せしめたのであるが、此れが東晉孝武帝の時に、初めて支那に傳はり更に釋齋然と云ふ僧が入宋した時、日本に持ち歸つたと云ふので元亨釋書釋齋然傳に、「……………其優填摸像、見今在嵯峨清涼院」とあり。のむつまじさに(慕はしさに。なつかしさに。なつかしくて拜み度くつて)嵯峨の清涼寺【山城國葛野郡嵯峨村大字北嵯峨に在り、淨土宗の名刹なり。嵯峨の釋迦堂と稱せられてゐる。本尊は所謂三國傳來「本文に二傳とあるが世に三國傳來に云つて居るのである。」の釋迦像である。此の尊像は前にも述べた通り、毘須羯摩天の化工の原作が宋に渡つて居たのを釋齋然が入宋の時に我が國に持ち歸つたものである。】にまうて、「常在靈鷲山」(法華經壽量品中の偈の句である。「釋迦は其の死後と雖もその法身は常に靈鷲山に在り。この意。【偈】「ゲ」梵語「カタ」の轉訛。頌の義に當る。佛家にて、讚美に用ふる一種の詞。「正信偈」等云ふも此の一種なり。○靈鷲山 || 釋迦が生時法を説いた處。】など心のうちに唱へて拜み奉る。

【二】傍(「カタハラ」。増鏡筆作の傍である。)にやそぢ「八十」||「ヤツヤ」を訓む。にもや餘りぬらむと見ゆる(と云ふ風に様子からして思はれる。窺はれる。)尾(女僧)ひとり、鳩の杖(老人の携へる杖である。【鳩のかたちを握りの處に附けて飾した。此れは支那で昔天子が老人に賜つたもので鳩は啞「ムセ」ない



鳥であるから老人が噓ない「喉のつまらぬこと」様にこの御意に出でたものである。』にかゝりて（すがつて。便りに。）まぬれり。（「参れり。参拜してゐる。」とばかりありて（暫くして）「たけく思ひたちつれど（氣強く思ひ立つてやつては来たが、参詣はしたものの、）いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの間（ツボネ）―部屋。昔の寺には参詣者の爲の用意の部屋があつたのである。）にうちやすみなむ。（休ませて貰ひませう。「うち」―接頭語。）坊（バウ）―僧坊。僧侶の住む家の並んでゐるのを坊と云ふ。）へ行きてみあかし（御燈明）の事など（を上げる事なんか）いへ。（云ひつけよ。ともさせよ。）とて具したる（連れて来てゐる）若き女房（ニヨウバウ）―此處では女中のこと。【一体「女房」は古昔宮中にお仕へせし官女の稱。又貴族の家の侍女の稱。今は平人の妻を云ふ。】のつきづきしき（似合はしく相應なるを。ふさはしきを）【似合はしいさか相應しいさか云ふのは年も若くして使してはほんま適當らしい女中の意。】程なる（「程なる者」―程度の女中。様な女中）をばかへしぬめり。（……………たらしい。）

【三】（私は老尼より十）年（年齢）の程（程度、様子、百歳を越すと云ふ程の老人であること云ふ年齢の様子）聞くも（聞くにつけても）めづらしき（世にも稀なるめづらしき）心ちして、かかる人こそ（こそまあほんまうに）昔物語もすなれ（するものでありますわい）と思ひ出でられて（何さなしに自然に思はれて

「られ」は先づ自發の「られ」と見たがよからう。まめやかに（しみぐさ。れもころに）語らひつつ「昔の事のみまほしきままに、年のつもりたらむ（此處も「積りたる」の意に譯しておいてよい。）人もがな（人もあつてほしいものだ）と思ひたまふるに（此れは尊敬の語でなくつて却つて自分の動作を卑下して云ふ心持ちである）（十今日はあなた様の様な高齢の人とお會ひ致して十）嬉しきわざ（事）かな。すこしのたまはせよ（お話しなさい）おのづから（何かの折に、ごうかして、不圖。次の見るにかかる副詞）古き歌など書きおきたるもの片はし見るだに、その世にあへる心ちするぞかし。（心ちのするものですわい。）（+まして昔の事をよくお知りになつてゐるあなたにお話しでも聞いたならばごんなにか昔の事はつきりするでせうよ。）+といへばすげみたる（老人となり齒が落ち疎らになつてゐる）口うちほゝゑみて、「いかてかきこえむ。（としてそんなお話を申し上げる事が出来たものです。さて出来さうにもありません。）若かりし世に見聞き侍りしことは、こゝらの（多くの）年頃に（年月の間に）ぬばたまの（黒、暗、夜、夢などの枕詞）【「ぬば玉」は射干玉と書き、楡扇、一名烏扇と云ふ鳶尾科の草の實。その色の漆黒である事から聯想して「ぬば玉の」が黒、夜等の枕詞となつたと云はれてゐる。】夢ばかりだになく（元來夢はぼんやり不明瞭なるものであるのにその夢程さへも明瞭な点はない様に）おぼほれて（ぼん



やりまして何のわきまへか侍らむ。」(何が何やら分らなくなつてしまつた。)とはいひながら、けしうはあらず(悪くはない。話しても差支はない)あへなむ(あへてしよう、やつて見よう。承諾しよう。)と(十内心では+)思へるけしき(様子)なり。

【四】 建久三年三月十三日に、後白河法皇(「ホフワウ。|| 佛門に入りたまひし太上天皇を申し上げる語。「太上天皇」|| 「ダツヤウテンワウ」|| 太上天皇「ダシヤウクワウ」)も申し上げ、天子の位をお退き給ひし後の稱。おりぬのみかご)かくれさせ給ひし後は、後鳥羽の御門ひとへに世をしろしめして(御統治になりて)四方の海、波靜かに、ふく風も枝を鳴らさず(我が國四方の海も波が靜かで事も無く吹き來る風も枝を吹き立てて音をもさせない様に天下はすべて泰平で)世治り民安くして、あまねき(天下萬民にれ垂させ給ふことの)御うつくしび(御いつくしみ。御恵み。)の涙(御徳、御徳澤と云ふ意味であつて、海の縁語。)秋津島(大日本)の外まで流れ(及び溢れ)。「流れ」は「海」や「波」の縁語。「しげき(深い)」「度々の」を譯したる参考書もあり。如何?。御恵(十は+)筑波山(常陸の國の筑波山)のかけ(木の蔭)よりも深し。『古今集の「筑波嶺のこのもかものもにかけはあれど、君のみかげにますかげはなし。」より採れるものである。』よろづの道々(凡べての學問技藝の道ども)に明けくおはしませば、國に(國

内に)才(「ザエ」學才) ある人多く、昔(醍醐、村上御二帝のよく治まつた御代)に馳ぢぬ(劣らぬ)御代にぞありける。中にも數島の道(和歌の道)なむ(が誠に)すぐれさせ給ひける。(わい。よ。)御歌かずしらず(多く)人の口にある中にも(人々の口に云ひはやされてゐる中にも。人口に膾炙す云ふ語があるが此れと同じ意。)

奥山のおどろの下もふみわけて  
道ある世ぞと人に知らせむ。

と侍る(御詠みになつてあります) (十のは。事は。歌は。+)こそ(誠に)まつりごと(十な+)大事(十な事+)と思されけるほど(程度、様子)しるく(著しく、明白に、明らかに)聞えて(拜察する事が出来て)いと(大變)いみじく(勝れて)やむごとなく(尊く)は侍り。(御座いますわい。)

一首の意。|| 奥山のおどろ(雜木雜草等の生ひ茂つてゐる所。)の下もふみわけて(十行つて+) (十かか)る所にも+) (十人の歩むべき) ↓ +) 道ある世ぞと(人の歩むべき道はあるものであるぞと) (十云ふ事を) 人に知らせむ。(世の中の人に知らせ度いものである。) その裏の意味は|| 恰も奥山の雜木雜草の生茂れるにまかせたるが如き此の亂れきつたる世の中も立派に治世してその結果世の中には正義人道が存する



ものである云ふ事を人に知らせよう。世が亂れてゐては何として正義も人道もその姿を隠し光を蔽はれてしまつてゐる。この心であつて暗に北條氏の専横を御憤り遊ばされたものである。

【五】 (十後鳥羽天皇は十) 建久九年正月十一日、第一の御子 (ミコ) 皇子。即ち土御門天皇(四つになり給ふに、御位ゆづり申させ給ひておりぬ(御位をおお退きになること) 給ふ。御年十九、位におはします事、十三年なりき。今日明日(昨今) 二十(ハタチ) ばかりの(前後の) 御齡にて、いと(極めて) まだしかるべき(時の早すぎる筈の) (十思へばいさめてたからざる様な) (御事なれども、) (一十一休考へて見ますと御讓位なされました事は、帝位におられまして) (よろづの(萬事にわたりて) 所せき(御窮屈なる) 御ありさまよりは、なかなか(却つて) 安らかに、(御氣分の安らかな御事でありまして此の理由が一つと。それから又) (御幸(ゴコウ) 上皇の御出ましになる事。天皇の御出ましになる事は「行幸」と申しあげる事も我等のよく知るころである。) など(十も十) 御心のまゝならむとにや(御心のままに御自由に遊ばされようとの御思召しからしてでありませうか。多分さうでせう。)(十ですから従つて十) 世ましろしめす事は今も(御讓位になつた後の今日も) かはらねば(後鳥羽上皇は院政をなさいまして天

下の政治をおみそはしになる事は御在位の當時と變ることがありせんから) いと(大變) めてたい。(結構な事でありませう。)

【六】 (十後鳥羽院は十) 鳥羽殿 (トバドノ) 白河殿 (シラカハドノ) 【共に白河天皇御造營にかかる離宮である。白河殿は元は藤原良房の別荘であつたのを白河天皇が離宮となし給ふたのである。】なども修理(スリ) せさせ給ひて(なまつて) 【従ひて此處の「させ」を使役に解釋して「おさせになつて」にしたのがあるがさうではない。次にもすぐある様に此の頃の用法として「給ふ」と云ふ動詞に添ひて敬意を表はす語を用ひるだけでは物足りなくつて「給ふ」の上に尊敬の「さす」さか「す」の連用形を置くのが常であつた。此處のもその用法であるから「させ」は「尊敬」である。】常に渡り(そこに御出でになり) すませ給へど、猶又、水無瀬(山城國乙訓郡山崎附近) といふ所に、えもいはず(云ふに云はれぬ程) おもしろ割(風雅の) 院(①周圍に垣を設けたる壯大なる建物。②上皇の御所を申す語。此處では②の意若しくは單に「御殿」位の意に解してよい。) づくりしてしばく通ひおはしましたつ、(お通ひになつて) 【おはす自、サ變。①居るの敬語。②來るの敬語。③行くの敬語。此處では③の意。】「つ、」は動詞を繰返す意の語であるから嚴格に譯せば「お通ひくになまつて」であるが此んな風に語を疊み重れる迄にするさ却つて不



自然な場合があるから其んな場合には「つゝ」を單に「……」と譯しておけばよろしい。】**春秋の花紅**  
**葉**（春の花、秋の紅葉）につけても（の時節に於ても）**御心ゆく限り**（御満足出来るばかり。……程。）世  
 をひびかして（世間の人々の耳目を驚かす程、盛んに）遊をのみぞし給ふ。所がら（場所がら。場所の様  
 子。）も、（+如何さいへば+）はるくると（眼前廣々として）川にのぞめる眺望、いとおもしろくなん。  
 （大層風情多い事でありませよ。）元久の頃（土御門天皇の御代の年號）詩に歌を合せられしにも（元久二  
 年六月十五日藤原良經第にて詩と歌を合せられし時）（+も+）とりわきてこそは。（格別に此處の水無  
 瀬の景色を賞して次の様な立派な御歌を御詠みになりましたわい。）【詩に歌を合す】||同じ題の漢詩と、  
 和歌を取組ませて、その優劣を定めるのである。】

見わたせば山もと霞む水無瀬川

夕は秋と何思ひけむ。

【一首の意】||遙かに見やると云ふと彼方の山の麓は一ぱい春の夕霞にこめられてかすんである。その麓を  
 此の夕霞に鎖されて流れてある水無瀬川の情景は何と云ふ「あはれ」深い事であらう。ひしくと天地の  
 幽情が身に透られないでは居られない。古人も夕は秋、即ち夕は秋が最も情趣が深い様に云つてあるに就

ては自分も成程さうだと思つてゐたが【枕草子に清少納言は秋は夕暮と云つて、秋の夕暮が情趣深い事を  
 述べて居る。又西行も鴨立つ澤の秋の夕暮には心なき身にもあはれを感じられると云つてある。】どうして  
 そんなに思つたのだらう。今この水無瀬川の春の夕の感興は何とも例へやうがない。

【七】**宮内卿**（クナイキヤウ）後鳥羽上皇に御仕へ申し上げた女官の呼名。）が仕うまつられし（詠みて奉られ  
 た）**御百首の歌、いづれもとどりなる**（さりくゝの趣がある、即ち種々それくゝの趣がある）中に、【建  
 久元年に歌合せが行はせられ後鳥羽上皇御製をはじめ後京極攝政藤原良經以下卅人の男女の歌を各々百首  
 づつ奉らしめられたその時の事である。】

うすくこき野邊の緑の若草に

跡まで見ゆる雪のむらぎえ。

（+と云ふ歌が最もすぐれてゐた。此の一首の意は次の様である。即ち+↓）  
 【一首の意】||野邊に若草が萌え出でて居るのに緑の薄い所と濃い所とがあるのによつて雪がむら消えにな  
 つたこと即ち處々まばらに、早く消えたり遅く消えたりしたと云ふことがよく分る。

【むら消え】||むらになつて消える。即ち早く消える所もあり遅く消える所もあるやうになつて消えるこ



と。【跡】「あとかた。様子。こと。」(十賞に此の歌は十)草の緑の濃き薄き色にて、こそこのふる(ふつた) 豊の(が)遅く(十或は十)疾く消えけむ(消えた。)【けむ】は過去の推量を表けず助動詞であるが此處では單に過去に歸しておく。【ほど】(様子。程度。)を推しはかりたる心はへ(心の様子。心のおもむき。) など、まだしからむ(未熟なる。)【む】なる推量の助動詞の意は含まないで譯した。つまり「まだしき」 と云ふと同じに譯した。【人はいと】(隨分、甚だ以て。とても。)【思ひより】(氣が着き)難くや。(十あらむ。十)此の人年つもるまであらましかば(實際存命しなかつたが若し存命してゐたならば)實にいかばかり目に見えぬ神(荒く恐ろしい神)をも驚かし(感動させ)な(た)(十即ち立派な歌も詠んで動かし た十)【まし】(であらう)に(の)に【目に見えぬ鬼神をも動かし】と云ふは、古今集の序文に依つたものである。古今集の序のは大いに歌の力を讀したものであるが此處ではそんな偉大な徳、力を持つてゐる立派な歌を詠んだであらうの……。」と云ふのである。【若くて失せにし、いとほしく】(氣の毒で)あたらしく(惜しく)なむ(十ある。十)

【八】 猛き(勇武なる)もののみ(武士)のおこり(起元)を尋ねれば、いにしへ田村(坂上田村麿。醍醐天皇の御代の人。征夷大將軍として延暦中蝦夷の亂を平げて殊功あり。正三位大納言に進む。弘仁二年薨。年

五十四。從二位を贈らる。)利仁(利仁將軍。藤原利仁。醍醐天皇の頃の人。沈勇にして謀略多く將帥の器あり。延喜中鎮守府將軍に任ぜられ從四位下に至る。嘗て勅を奉じて下野國高座山の賊を破り威武一世に高し。)などいひけむ(いつた)將軍どもの事は、耳遠ければ(時代が既に距つてゐる事であるから)さしおきぬ。(さしおいて語らぬ事とした。)そのかみ(昔)より今まで、源平の二流(二氏。二つの血筋のもの)ぞ(が誠)に時により折にしたがひて(時代により又場合によりて)おほやけ(朝廷)の御まもりとはなりにける。(なつたのですよ。)

【九】 源實朝、故(「コ」既に他界して此の世に亡き)大將(古近衛府の長官で「ダイシャウ」と訓む。頼朝は右近衛大將であつた。次の意味の時は「ダイシャウ」と訓む。(今陸海軍最高級の將官。(汎く兵士を指揮統率するものの通稱。(一群の人の頭に立つ者の稱。かしら。なま。此處は(1)の意。源頼朝を指す。)の跡をうけつぎて、つかさ位(官職と位)滞る事なく(停滯する所なくごんごん)(十進み十)よろづ心のままなり。建保(順徳天皇の御代の年號)元年三月廿七日正二位せしは(になつたのは)閑院の内裏(京都二條通りの南にあつた御所)(十な十)つくれる(造替した)賞とぞ聞き待りし。同じき六年權(定員數より外に假に補せられてゐる所の)大納言(古、中納言と共に太政官の次官なり。正と權とあり。大臣を補



佐して政務を行ふ。大臣闕ぐる事あらば代りて事を處する事あり。故に亞相とも云ふ。) になりて左大将  
 (「サダイシヤウ」左近衛大将) 左馬のつかさ(左馬の頭。左馬寮の長官。馬寮(メレウ)は左馬寮「サマ  
 レウ」右馬寮「ウマレウ」の二つさす。) をさへぞつけられる。(兼任させられた。) その年やがて(又  
 早速。) 内大臣(太政官に屬し、左右大臣に次ぐ官。) になりても、猶大将(左大将)(十は十)もとのまま  
 なり。父にもやや立ちまさりて(官位がすれて) いみじかりき。(「素晴しかつた。」「出世であつた。」「偉  
 かつた。」等様様の解が行はれてゐる。)

【①やがて】……「やがて」の語源は「止難氣」であつて「直ちに」の意。此の語は随分と使はれてある語  
 であるが兎も角大抵の場合「直ぐ」とか「間もなく」とか「直ちに」とか譯しておけばよい様  
 である。然し場所に依つて自ら緩急はあるのであつて「その内に又」と云ふ位な心持ちになる  
 場合もある。大体に於て直ちに。②少し緩やかな心持ちになつて「又その中に。」「その中に又。」  
 「程なく又」③特別の場合に「早速+そのまま」「そのまま」……等に分ける事が出来る。  
 (例)「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ。西行法師。」の「やがて出

です」は「そこでそのまま落ち落ちてやがて出ると云ふ事はせない。」の意。「やがて出です」  
 とは「そのままにして早速出ると云ふ事はしない。」と云ふ意。

【②いみじ】……此の「いみじ」も用例を挙げれば實に種々様々である。然し大体要するに程度のひどい  
 善い方面と悪い方面とに分けられるので結局①甚だしく。「大層。」「實に」等と譯し、その  
 下に善い方面にしる、又悪い方面にしるその性質状態を表はす語が更に來る場合。③善い場合  
 を表はすもので「非常に結構。」「實に立派。」「大層勝れてゐる。」「非常に可愛らしい。」等。  
 ④「實に氣の毒。」「實に可哀さう。」等である。

※尚ほ父頼朝は從二位權大納言右大将までしか昇らなかつた。】

【十】この大将(オトド)源實朝)は大方(大体)心ば(性質。氣立。)うるはしく(圓熟して居られて) 獨  
 くもやさしくも(剛毅な点に於ても亦優雅な点に於ても) 或は「勇武な武の方面に於ても亦優雅な文の  
 方面に於ても) よろづ(凡べて) めやすければ(非難すべき点が無かつたから) ことわりにも過ぎて(道  
 理以上に) 武士の摩き従ふ(歸服する) さまざま父にも越えたり。いかなる時にか  
 山はさけ海はあせなむ世なりとも



君に二心われあらめやも。

とぞ（かくまわ）詠みける。（詠まれましたのですよ。）

【一首の意】 || よしたとへ、山は裂け崩れ、海は水が無くなつて淺くなつて終ふ様な天地の激變があらうとも、則ち如何なる場合ありとも自分は天子様に對して二心即ち謀叛を起す様な心を何として持たうか。そんな心は決して有りませんぞよ。

【十一】

かくて（此んな風で）世を靡かし（天下をば草木の風に靡き伏すが如くに靡かし従へて）したため行ふ

（天下の政治大小となく處理し取扱ひ專權なる↓）ことも、ほとく（殆んど）古きには超えたり。ま

めやかにめざましき事も（實に忠實であつて政治に専念なれば目も醒むる程政令は普く行はれると云ふ様な事も）【此處を「ほんさうに心外なる事も」と譯したのがある。「まめやかに」は「忠實に」「本當に」

等の意あり。「めざまし」は「目が覺める様である。」「驚きあきれる程である。」「心外な」等の意があるから此の説の方が次との續き具合もよい点もある。和田英松氏は前説。】多くなりゆくに（+つれては+）

院の上（後鳥羽上皇）忍びて（密かに）（+北條追討の舉を+） 思したつ事などあるべし。近くつかうま

つる（近侍の）上達部。【「カンダチメ」|| 公卿「クギヤウ」の異稱である。「カンタチメ」とも訓む。尙

ほ「公卿」は「上達部」の外「月卿」「卿相」とも云ふ。結局「上達部」と云へば「三位以上の殿上人」

とも云へる事になる。因みに「公」|| 攝政、關白、大臣。「卿」|| 大中納言、三位以上。此の三位以上の

者の中に一位に在りながら大臣となつて居ない者、即ち散一位と云ふのがあるが此れが含まれてゐる。】

殿上人、（「テンジャウビト」|| 四位五位、及び六位の藏人にて昇殿を許されて居るもの。うへびき。

雲の上人。雲客とも云ふ。）まいて、北面の下蔭（「キタオモテノゲラウ」|| 北面とは、上皇の院中を警衛

する武士である。此の北面には上下ありて五位が上北面、六位が下北面であること伊勢貞丈氏の著に著はれ

てゐる。北面の下蔭とは下北面の事なり。）【※此處では北面の下蔭と云つたのは上達部殿上人に對して云

つたのであつて下北面の事だけを云つたのでなくつて下蔭は比較的下位の者位の漠たる意をほめかした

のであると云ふ説もある。※一体「蔭」とは僧侶の修業を積んだ年を數へる語であつて轉じて仕官の人に

用ひては上位の者を上蔭と云ふに對して下位のものを下蔭と呼ぶのである。※北面の武士は白河上皇が始

めて置かれたのである。】西面（ニシオモテ|| 西面「サイメン」の武士であつて此れも院中に伺候する武

士、即ち任務は北面に同じである。北面武士に對する稱語である。）【西おもては後鳥羽上皇が始めて置か

れたのである。】などいふも、皆この方「カタ」（後鳥羽上皇の北條氏征伐の御企）にほめきたるは（ほ



のかに心持を寄せて居る者は窃に同意して居る者は) **あけくれ弓矢兵仗**(武器)【兵仗のみでも武器の總稱として用ふる語である。兵仗は戦争に用ふる刃物。仗は戈戟等の柄。】のいとなみ(仕わざ。仕事。「兵仗のいとなみ」兵器の用意やら手入れやら練習やらを云ふ。)より外のことなし。**劔**などを(刀劍の利鈍等を) **御覽じ知る**ことさへ(御鑑定になることさへ)いかて習はせ給ひたるにか、**道のもの**(専門家)にもや(可成り)【此の「やや」と云ふ語は(1)漸く(2)だんだん(3)随分(4)餘程(5)可成り(6)少しは】等の意があるが、此處も普通の(3)の意でよからう。(2)の意味にまでせねどもよからう。【**勝ち**りて、**か**しこくおはしませば(目が利いて御出でになるので) **御前にてよきあしきなど定めさせ給ふ**。(御前で、時々その鍛への良否を鑑定させ給ふのであつた。)]

附録

増鏡は第一巻「おどろの下」第二巻「新島もり」……となつてゐるのであるが、前に掲ぐる「猛きものふの起りを尋ねれば云々……」から「新島守」となつてゐる。

新島守の梗概

源氏、北條氏の相繼いで起つたこと、承久の亂、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇が遠島に御遷幸遊ばされたこと、及び配所のおはれな御有様を寫してある。左に「承久の役」に就て参考迄に掲げる。

承久の役に就て

(1)時代……承久三年五月十四日——八月七日

(2)原因……朝權恢復。朝權恢復は後三條天皇に初まる。即ち藤原氏の跋扈、僧侶の狼籍、平民の横暴、次ぎては頼朝の覇權等有り、殊に頼朝が守護地頭を全國に配置して以來、武門の權勢牢固として抜く事の出来ぬものであつた。然るに朝廷に於ては、上に英明の君、後鳥羽上皇ましまし、下には通信、良經等參議として政に與るありて、武を練り、刀を鍛へて時の至るのを待たれた。

(3)由因……源氏正統斷絶。承久元年正月、實朝は殺され、源氏の正統は此處に斷絶した。然るに政權は京都に還らず、幼少の頼經を京都より迎へて依然として實權は北條の手にあつた。

(4)動機……イ……信濃の人仁科盛遠、院の御所に司候せし故を以て義時その所領を公收す。上皇勅して之を復せしむ。(義時と上皇との間反目の様あるも、いさ畏多し)

ロ……上皇、白拍子龜菊に攝津之二庄を賜ふ。二庄の地頭代、之を侮慢す。白拍子、上皇に訴ふ。上皇義時をして地頭代を改補せしめさせられしも義時之に應ぜず。上皇大いに逆鱗に觸れ給ふ。

(5)戦争……三年五月十四日上皇は、鳥羽城西南寺の流鏑馬と稱して近畿の兵を徵せらる。然して十五日義時追討の院宣下る。先づ京都の守護伊賀判官光季と云ふ者を血祭にあげらる。事變録倉に達す。



義時は……弟時房を將として  
 子泰時を將として  
 東海 東山の三道より京に向はしむ。  
 北陸

官軍宇治勢多にて防戦せしも利なし。

六月十三日……時房……勢多に向ふ

泰時……宇治に向ふ……次いで京師に入る。

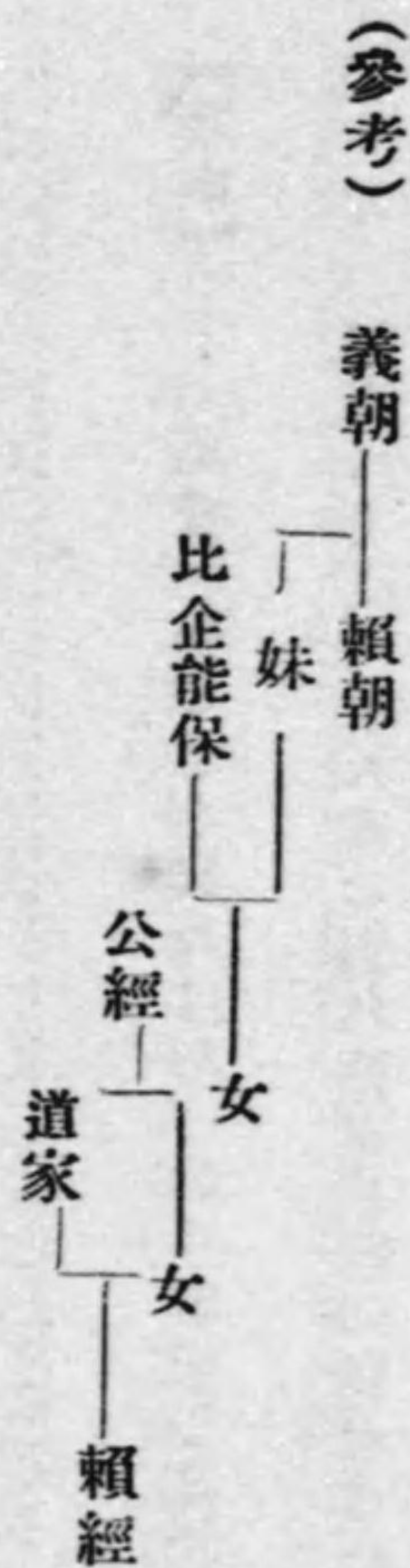
結果……藤原基朝、平有範、源廣綱、大江能範、藤原宗行——斬せられ、

後鳥羽、土御門、順徳の三院御遠島あらせられ、

時房……は京都守護となり、六波羅に探題を置く。

【一二】四月「ウツキ」二十日「ハツカ」(承久三年四月廿日)帝(順徳天皇)おりさせ給ふ。(帝位をお退きになりました。)春宮(「ハルノミヤ」)東宮の御事。仲恭天皇。(十の十)四つに(御四歳に)ならせ給ふに譲り申させ給ふ。近頃みな此の御齡にて受禪(「ジュゼン」)新帝が帝位をゆづり受け給ふ事。先常より云へば讓位である。)ありつれば此れも(今度かく新帝が御四歳にて御受禪になられました事も)めてたき(御結構なる)御行末(御將來)ならんかし。(なのでありませうよ。※「かし」は感歎で念を押す言葉であるから「よ。」位に譯しておく。)【後鳥羽天皇は御四歳にて御踐祚になつてあらせられ、土御門天皇は是亦

御四歳にて御踐祚になつてあらせられる。此等の事實を例として作者は此の度仲恭天皇が御四歳にて御受禪なされたのは此れも亦御芽出度い御將來なのであらせられるだらうと云つたのだが、之は後に於て説かんとする争亂と相對立させた伏線とも見えるのである。【同じき(承久三年四月)二十三日院覽の定め(御決定)ありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば(申しあげる事になりましたので)御兄の院(「院」上皇の御身を又は御居所を申す語。此處は土御門院)をば中の院と申し、父帝(後鳥羽上皇)をば本院とぞ(十かく十)聞えさする。(申し上げますのですよ。)此の程(此の内。最近。御讓位の時頃迄はの意。)は家言の大臣、(「イヘザネノオトド」近衛基通の子)關白にておはしつれど、(十順徳天皇が御讓位なされたので四月の二十日には十即ち→+)御讓位の時、(十家實は關白を止められて十)道家の大臣播政になり給ふ。(此の道家の大臣は→+)かの東の若君(「アヅマノワカギミ」關東の將軍藤原頼經)の御父なり。





【關白】……(1)萬機巨細さなく其人にあづかり申すこと。(2)古昔天子を輔佐して天下の政務を行ひし大臣、我國にては光孝天皇の御代藤原基經の任ぜられしに初まる。

【攝政】……(1)君主に代りて大政を行ふこと。(2)古昔。幼帝。女帝等の時に天皇に代りて大政を行ひし職。現今、天皇未だ成年に達したまはざるか、若しくは久しきにわたる御故障ありて、大政を親らしたまはざる時におかれ、天皇の名によりて大権を行ふもの、成年の皇太子、又は皇太孫を以てこれに任ぜらるるを原則とす、若しそれなき時は親王及王、皇后、皇太后、太皇太后、内親王及女王の順序によりて任ぜらる。

【一三】さて、(發語。「處が」位の意。)院(本院、後鳥羽院)のおほしかまふること(御計畫になりますこと。北條氏追討の御企なます。)忍ぶとすれど(外部にわからない様に願つたけれども)やうく漏れ聞えて、東さまにも(關東にも。北條側でも)その心づかひ(その用意)すべかめり。(すべくあるめり。するらしい。)あづまの代官(アツマ即ち鎌倉より來て京都の代官をしてゐた人。)にて(する人であつて)伊賀の判官(ハンガン又はホウガン。檢非違使の尉)(十を務めてゐる人に十)光季といふものあり。(あ

りました。)かつく(先づ。漸次。ボツく。)かれを御かうじ(勳事、勅勸。勅によりて勳當する。勅によりて攻める。)のよし(と云ふ事を)仰せらるれば(仰せられますので)御方に參るつはものども(御方は院を指す。院の方に參ります武士共が)(十伊賀判官を討取るべく十)おし寄せたるに(おし寄せました所が)(十彼は十)通るべきやうも(方法も)なくて腹切りてけり。「て」は完了の助動詞。「けり」過云の助動詞。「てけり」は過去完了の助動詞となる。)まづいとめてたしとぞ院は思召しける。

【一四】あづま(關東側、北條側)にもいみじう(大へん)あわて騒ぐ。【此れからの括弧の中は義時の思ふ様なり。】「さるべくて(然あるべくて。||然かあるべき因縁來りて。||それ相當の運命で)身の失すべき(身が亡ぶべき)時にこそあなれ。」(時で、まあ、ほんまにあるのだから。)と思ふものから(と一應は思ひますもの)【此れ又義時の思ひなり。】討手の來りなん時に、はかなきさまにて(あはれみじめな様にて)屍を曝さじ。(戦争で死ぬること。討死はすまい。)おぼやけと聞ゆれども(朝廷が御指圖されるのだと評判されてはゐるけれども)自ら(天子御親ら陣頭に立た、れて)し給ふことならねば(御征伐なさるのではないから)かつは(それと又一方では)我が身の宿世をも見るばかり。【自分等の前世の因縁がよいかわるいかなためして見るまでだ。】と思ひなりて(さう云ふ決心になつて)弟の時房と、(十子の十)



泰時と云ふ一男と、二人をかしら(大将)として、雲霞のつはものをたなびかせて(雲や霞のたなびいた様に寄り群つた大軍勢を率ゐて「たなびかせて」|| 雲や霞に縁ある語を用いたので「引きつれて」の意。)都にのぼす。

【一五】泰時を前にすゑて言ふやう「おのれ(おまへ)をこの度都に参らする(京都に放め上らせる)事は思ふ所(期待する所)多し。本意の如く(望み通り、目的通り)清きしに(潔きよき戦死)をすべし。人に(敵に)うしろ(背。せなか)を見えなんには(「見せなんには」に同じ。文法通りに譯すならば「見せるであらうならば」と譯すべきであるが「見せるならば」と譯してよいであらう。「敵にうしろを見せる」とは「敗北する」ことである。)(+再び此方に歸つて来て+)親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども、「義時の言葉としては謙讓の語である。】義時(自分は)君の御爲に(君に對して)うしろめたき心(やましき心。内心氣恥かしい心)やはある。されば横さまの死(不自然の死、非常の死)をせむ事(「する事」と譯してよい。)(+あるべからず。心を猛く思へ。おのれ(おまへ)うち勝つものならば、再びこの足柄箱根は越ゆべし。)(+越えよ。+そして此の關東に歸つて來い。+)など泣く泣くいひきかす。【此の邊誠に義時も此の度の合戦ばかりはなかなか難戦と感じてゐる様子が表はれてゐる。剛

膽不敵の義時が「泣く泣く」子泰時に云ひ聞かすあたり。尙ほ「心を猛く思へ」等勢を勵ます邊作者の用意も周到である。】(+泰時も亦+)「まことにしかなり。(さうである。)+また親の顔拜まむ事もいと危し。【(覺束ない事である。困難である。)+と思ひて、泰時も(+涙で+)鎧の袖をしぼる。(濡した。)+かたみに(+互に)今やかぎり」と(最後の對面であると思つて)あはれに(痛ましい程)心細げなり。(不安で心配らしい風である。)

【一六】かくて(かうして)うち出でぬる(出發したその)またの日(翌日)思ひがけぬほどに(意外の時)泰時只一人、鞭をあげて(馬を走らせて)馳來たり。父胸うちさわきて【父義時は大休今度の舉に就ては音ならぬ心配をしてゐるのであるから、泰時が急ぎ歸つて來たのを見て何事が出來したのであらうと氣も顛倒したのである。】いかに(どうしたのか)と問ふに(+子泰時の答へて云ふやう+)「軍のあるべきやう(戰爭に於て如何にすべき等の凡べての事柄は)大方の(大抵の)おきて(命令、指圖)などは仰の如く(既に仰せられました如く)その心を待りぬ。(御意を承知致しました。)(+然し+)若し道のほとりにも、圍らざるに、願く(おそれ多くも)鳳簫(屋根の上に鳳凰を附したる御ノリモノ、天子のおめしものりものである)をさきだてて御旗(天皇の御旗)をあげられ、隨幸(天皇の御行列)の嚴重なることも侍



らむに参りあへらば、その通退いかゞ侍るべからむ。この一事を尋ね申さむとて、一人馳せ侍りき。」と云ふ。義時、とばかり(暫らくの間)うち案じて「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことはないがあらん。さばかりの時(そんな状態程度の時)は、兜をぬぎ弓の弦をきりて備にかしこまりを申して(只、これ畏れ入り奉つて)身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましたながら、軍兵をたまはせば、命を捨て、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひもはてめに、急ぎ立ちにけり。

【一七】 都にも思しまうける事なれば、(朝廷の方でも豫期せられてゐた事でもありますので)武士でも召しつどへ宇治勢多の橋もひかせて(落させて)かたきを防ぐべき用意、心ことなり。(大したものです。「常きは違つて格別である。」の意。)(十たゞ然し十)公經(キンツネ)の大將一人のみなん(御一人だけはほんきに)御うまじ(御孫頼經)のこともさるることにて(の事が氣にかりますのもそれは御尤ものことであつて)(十一体十)(十此の公經卿の十)北の方(十は十)一條中納言能保といふ人の女なり。(此の公經卿の北の方は誰か云ふと一條中納言能保云ふ人の女なのであります。「北の方」奥方を云ふ。高貴の方の妻を云ふ。)その母北の方は(「その母」といふは公經の北の方の母をさす。又「その母北の方」といふは

「その母で然して能保の北の方」といふ意なり。)故大將(頼朝公)のはらから(兄弟)なれば一方ならず(大へん)あづまを(關東を)重くおぼして(重大視して)。さしいらへ(答)もせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。七條院(後鳥羽天皇の御母)の御ゆかり(御關係の)殿ばら(御方々)坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又修明門院(順徳天皇の御母)の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つきつきあまた聞ゆれど(いらつしやるけれども)さのみは(さうく皆々は)記し難し。軍にまじしたつ人々、此の外の上達部(カンダチベ)又はカンダチメ。三位以上の殿上人)にも殿上人(四位五位、六位の藏人の昇殿を許されたもの、雲客)にもあまたありき。

.....

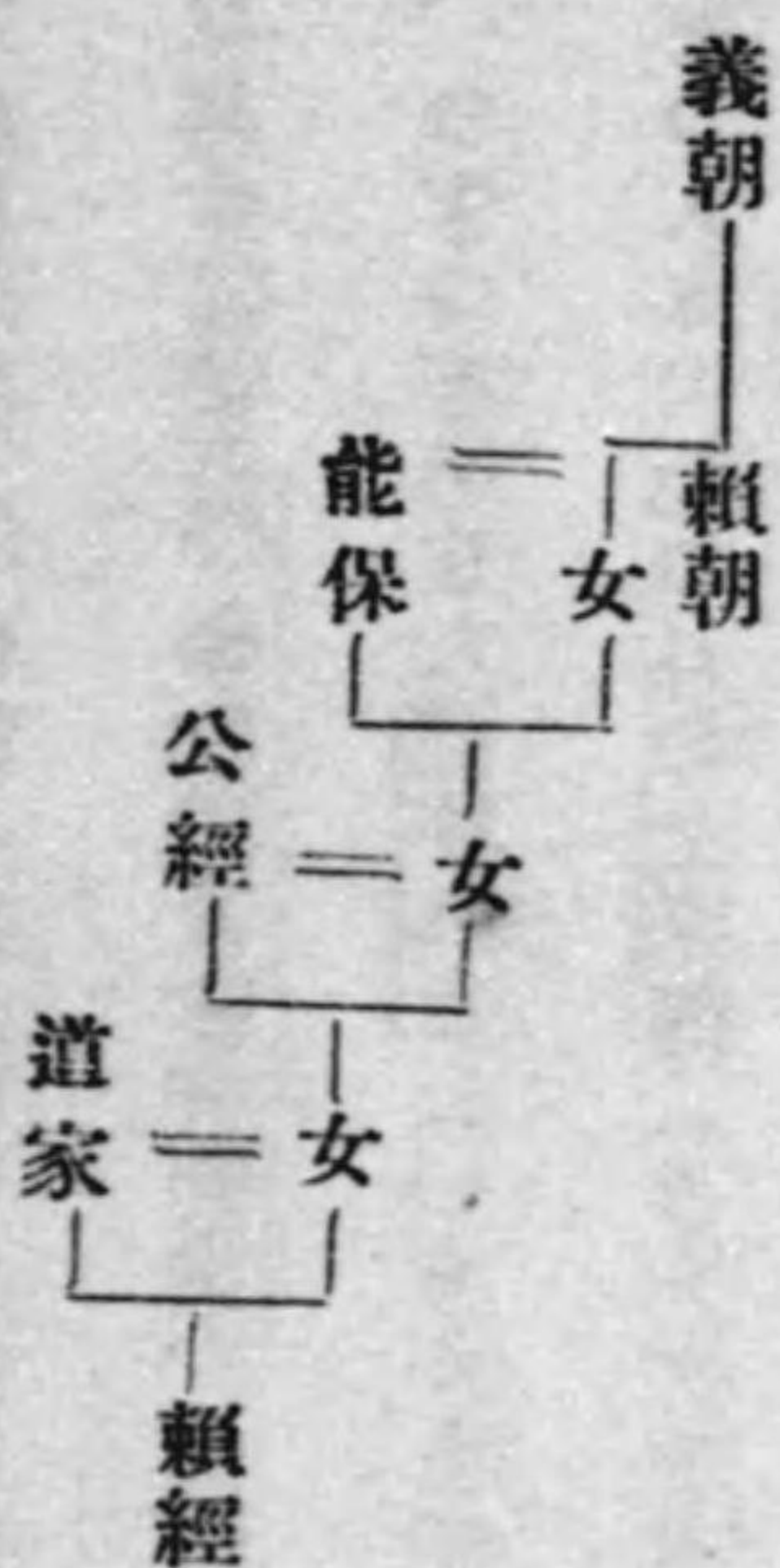
【との。】.....(殿)①高貴の人の住む安壯なる家屋。やかた。②轉じて高貴なる人の稱。「一様」③古昔攝政又は關白の尊稱。④昔時妻より其の夫をさして云ひし稱。⑤轉じて婦人より男子をさしていふ稱。

【このばら】.....(殿脩)①高貴の人々。②數多の男子。

【ばら】.....(脩)接尾語、さもたち。「若殿」。「倭人」。



※「公經の大將一人のみなむ、御うまこのことさるることにて、北の方一篠中納言能保といふ人の女なり、その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きことさあぶながり給ふ。」と云ふ本文の意味は文中のそれ／＼の人の姻戚上の關係が明瞭に頭のないと解しかれる文であり、又此の關係が明らかでさへあればさう難解とも思はれぬ。又一面より云へば反對に此の文の意味を正確に解し得る人ならば文中此等の人の姻戚關係は明瞭に推察出来ることにもなる。よく頭註等にも掲げてある様に次の様な關係にあるから前述の本文解釋と照合して見る必要がある。



上の系圖による如く頼經は公經卿の御うまごに當るわけであり、公經卿の北の方は一條中納言能保といふ人の女「ムスメ」であり、一條中納言能保の北の方はその母であり、同時に故大將のはらからであるわけである。

歴史上、實朝の死後、北條氏の計畫で頼朝と聊かの血縁ある頼經を向へて鎌倉の主となした。」と云はれてある意味は此の系圖によつても解るわけである。

【一八】 中の院（土御門上皇）はあかて（いや／＼ながら）位を（帝位を）すべり（御讓位）給ひしより、（から）

ので。【参考書にも「より」を(1)時間關係に「から」と譯した(2)原因結果關係に「ので」と譯した(3)随分兩用に譯されてゐる。】言に出で、このものし給はねど（いや／＼ながら御位をお退きになつた位でありますから、言葉に出してこそ申されませぬけれども）世の（世の中が）いと（たいへん）心やましき（不愉快）まゝに（ので）（十事態を御面倒がられて、気分も進まれないで）かやうの御願にもこと（格別に）まぢらひ（御關係）給はざめり。（給はずあるめり。御關係にならぬ御様子である。）新院（須徳院）は同じ御心（後鳥羽上皇と同じ様な北條追討の御心）にて、よろづ（萬端）軍のことなどもおきて（命令、指圖）仰せられたり。

【一九】 いつの年よりも五月雨晴れ間なくて、富士川、天龍（十川十）など、えもいはず（言ひ得ざる程度に、大へん。）漲りさはきて、いかなる龍馬（立派なる馬）も打渡し難ければ、攻めのぼる武士どももあやしく（非常に）なやめり。かゝれども、邊に都に近づくよし聞ゆれば、君の武士もいてたつ。その勢六萬餘騎とかや。（十云ふ。）宇治、勢多へ分ち遣はす。世の中（十を十）響き（響かせ）のしる（騒ぎ立てる）さま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界におち（逃げ）くだり、すべ



て(誰れもく)安げなく騒ぎみちたり。いかゞあらんと(實際どうなることか)君も御心亂れておぼし感ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの(實際愈々の)隙(キハ、場合)になりぬれば、いと心おぼはたゞしく(心の平靜を缺いで)色を失ひたるさまども、頼もしげなし。(頼み甲斐ありさうにない。)水無月(ミナツキ。陰曆六月の異稱)十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高潮(大潮)などのさしくるやう(十の勢十)にて妻時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なく(大へん)あきれて(驚いて)たゞ(一も二もなく、わけもなく)物にぞあたり迷ふ。(凡べての事々に狼狽し面喰ふことですよ。【尙ほ和田英松氏増鏡詳解には「狼狽して前後を亂し、物につきあたる程のさわざなりと也。あわてまごへる様をいへり」を説明してある。】)

【二〇】東(關東)よりいひおこするまゝに、(命令してよ、す通りに)かの二人の大將軍謀ひおきてつづ、(萬事取計らつて指圖して處理決定を致しまして)保元の例にや(保元の亂には崇徳上皇を隱岐に遷し奉つた。)院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院(七條院、承明門院、修明門院)宮々(雅成親王、頼仁親王)所々におぼし感ふことさらなり。(所々の御關係の方々の所で御思案になつてゐらせられることは尤である。申す迄もない。)本院は隱岐國におはしますすければ、まづ鳥羽殿へ綱代車(牛車の一、竹又

は槍にて綱代を作りて作れり。大臣大將四位五位が乗る。)の怪しげ(粗末らしい)なるにて、七月六日入らせ給ふ。けふを限りの御ありき(都の中の御幸も今日限り最後である)(十思ふと十)あさましう(大へん、非常に、驚くほどに)哀なり。(哀れに見奉ることである。【ものにもがなや、】(源氏物語に「ものにもがなや、世の中を、ありしながらの我が身と思はん。」云ふ歌があります。此の歌の意味の通り、則ち「世の中をもこの様すがたにさりかへす方法は無いものだらうか。そしてありながらの昔の通りの我が身と思ひ度いものだ。】と思さるゝ【思す】「オボス」は「思ふの敬語故此處は後鳥羽上皇がかく思はれるもの」の意。)もかひなし。その日やがて(すぐ)御ぐし(御頭髪)(十を)おろす。(お剃りになる。佛門に入られるのである。)御年よそぢ(御四十)に一二つや餘らせ給ふらん、まだいと(大へん)惜しがるべき(まださ程の御齡でもあらせられない事まで御剃髪遊ばし給ふには御いさほしく思ふはれるべき)御ほど(御齡の程度)なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院(後鳥羽法皇の御母君にあらせらるゝ御方)へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御舟に(十御乗せ十)奉りて、遙かなる波路(海路)を凌ぎ(御乗り越えになりて)おはします御心地此の世の同じ御身とも思されず、(して)いみじう(誠に)いかなりける代々の報(前世の應報)にかと恨めし。(十く思はれます。)



まことや七月（フミツキ。又はフツキとも云ふ。文月と書く。）九日帝（「ミカド」仲恭天皇）をも（十帝位より十）おろし奉りき。

【一一一】この四月（「ウツキ」承久三年四月二十日の事なり。）か<sup>とよ</sup>（であつたかと思ふがなあ。であつたかなあ）御讓位とて（先帝順徳天皇が御四歳にならせ給ふところの仲恭天皇に御位をお譲りになつたこと云つて）めでたかりしに、夢のやうなり。（夢の様で實際事は思へない。）七十餘日にて（四月廿日御即位にて七月九日御退位。）お<sup>り</sup>（御退位）給へる例も、これや始なるらん。唐土「モロコシ」にぞ<sup>（實に）</sup>四十五日とかや（みやら。さ申しますかなあ）位におはす例ありける。（ありましたよ）とぞ<sup>（かく眞に）</sup>唐「カラ」の文「フミ」（漢籍）（十<sup>+</sup>）讀みし人のいひし心地する。（しますよ。）【秦王子嬰は位に在る。こ<sup>こ</sup>四十六日、沛公に攻められて降服した。】それもかやうの亂（此の度の様な戦亂）やありけむ。さて上達部（「カシダチメ」公卿「クギヤウ」の異様である。「カンタチメ」も訓む。尙は公卿の異稱には上達部の外「月卿」「卿相」等あり。）殿上人（「テンシヤウビト」古くから清音で讀むことになつてゐるから「デン」も訓まぬ様注意せねばならぬ。清涼殿の殿上の間に昇る事を勅許されてある人、四位五位の人と、又藏人は特に六位も許される。）それより下、はた（も亦）残りなくこのことに（後鳥羽院の北條御討伐の御企圖）

に<sup>（關係した）</sup>たぐひ（人々）は重く軽く罪に當るさま、いみじけ<sup>（大した様子）</sup>なり。

【一一二】中の院（土御門上皇）は初より知しめさぬ（關係してゐらせられぬ）事なれば、東にも咎め申さねど、父の院（御鳥羽院）遙かに（十<sup>+</sup>際岐に十）遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらんこと、いと恐れあり（御恐縮である）と思されて、御心もて（御自らの御發意にて）その年間十月（「カンナツキ」十日、土佐國幡多「ハタ」といふ所にわたらせ給ひぬ。去年のきざらぎ（陰曆二月の異名）ばかり（頃）にや、若宮（後嵯峨天皇）い<sup>て</sup>き給へり。持明門院（土御門天皇の御母君）の御せうと（御兄）に（十<sup>+</sup>當らせられる方に十<sup>+</sup>）通宗の宰相中將とて、若く失せ給ひし人（十<sup>+</sup>があらせられましたがその人十<sup>+</sup>）のむすめの御腹（十<sup>+</sup>に御出来になりましたとお方十<sup>+</sup>）なり。やがて（まもなく。土御門天皇が幡多に御移りになることが決すると間もなく）（十<sup>+</sup>此の若宮様は十<sup>+</sup>）かの（通宗）宰相の弟に通方といふ人（十<sup>+</sup>がおはしました）がその方十<sup>+</sup>の家に留め奉りて（十<sup>+</sup>然して土御門院は十<sup>+</sup>）近くさぶらひける（御つきしてゐましたる）北面の（院の御所を警衛してゐるさころの）下臈（下郎にて身分賤しきもの）一人、（十<sup>+</sup>又それより他に十<sup>+</sup>）召次（「メシツギ」院中雜事に當る下役）などはかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿（手にて腰の邊にてかく様になつてゐる輿）にて下らせ給ふ。道すがら、雪かきくらし、（雪があたり暗く



なるまで降り) 風吹きあれ吹雪して、來し方行く先も見えず、いと堪難きに(随分此上なく辛くつて) 御袖もいたく凍りて「雪で凍るのであるが此んな場合は特に御涙せきあへずして袖袂にかゝるが故にそれが乾かすして凍るさいふ様に意を兩方掛けてゐる。含ませてゐるのである。」**わりなき**(大へんなこと、つらいこと、實は道理に合はぬこと)の意) **こと多かるに**(多いので)

憂世にはかゝれとてこそ生れけめ

ことはり知らぬわが涙かな。

【一首の意】

||憂世即ち此の世にはかゝれ(かくあれ) 即ち此の如くに前世の應報が憂い辛い目を見るべくあれと云つて生れ出て來たのである、全く。然るが故に此の理を知つてさへあれば此の理にあきらめて涙なんか出さうもないに、止めどもなく袂の袖も凍る程に涙が出るとは理り知らない、わけのわからない涙であるわい。

「せめて近きほど邊に。」と東より奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

【二三】

さてもこのたび世の有様(+)さいふものは+)げに(ほんさうに)いと(たいそう)うたて(あまりにも)口惜しき(さんれんなる)わざ(こと)なり。あるは(あるひは||例をあげれば||その中一つを云へば)

「父の王(父)を失ふ(殺す) 例だに一萬八千人までありけり」とこそ佛(釋迦)も説き給ひたるめれ。

(た様である。) まして世下りて後、唐土(モロコシ)にも日本の本にも國を争ひて職をなすこと(國の奪ひ合ひの戦争をなすこと) 數へつくすべからず。それも皆「ふし二ふしの」(一應二應の、一通りの) **よせ**

(口實)はありけん。若しは(ごうかすると) **すぢ異なる大臣**(系統の異つてゐる大臣同士)(十の争ひか

+) **さらても**(又はさうでなくても) **おぼやけともなるべき**(王位皇位にも即かれるべき) **きさみの**(分

限、身分の方が) **少しのたがひめに**(食ひちがひ、手ちがひから) **世にへだりて**(世に容れられないで

思ふ様にならないで) **その恨みの末**(結果) **などより事**(争が) **起るなりけり**。(のでありましたわい)

今のやうに**無下の民**(極めて賤しき民||北條氏)と争ひて君の滅び給へる例、此の國にはいと(あんまり)

**數多聞えざめり**。(聞えずあるめり。||聞えない様である。) **されば承平の將門** 【承平は朱雀天皇の御代の

年號、將門は檢非違使を望んで得られなかつた爲、常陸に赴いて伯父の國香等を殺した。遂に下總の猿

島に據りて偽宮を造るに至つた。然し天慶三年貞盛及び秀卿に破られた。】**天慶の純友**、【天慶は朱雀天皇

の御代の年號、彼は伊豫の據であつたが任滿ちても歸らず海賊となり、將門が猿島に叛すに及び東西呼應

して兵を京都に放つた。後遂に伊豫に於て誅せられた。】**康和の義親** 【唐和は堀河天皇の御代の年號。義



親は義家の第二子。唐和四年對馬の守さなつたが、鎮西を掠奪した爲に隱岐に流されたのであるが配所に赴かず却つて出雲に到りて官物を掠めたが遂に朝廷の追討の軍によりて鳥羽天皇の御代誅に伏した。いづれも皆狂かりけれども宣旨（陛下のミコトノリ。宣旨によりてさしむけられたる官軍にはの意）勝たざりき。保元に（保元の亂に於て）崇徳院の（崇徳院が）世の亂り給ひしに（世に兵亂をお起しになつた時さへ）故院の（後白河院が）御位にて（後在位中にて）うち勝ち給ひしかば（お勝ちになつたから）「天照大神も、御雲瀧川（伊勢内宮の前を流れる川。ミモスリガハ。）の同じ流れ（天照大神の同じ神裔）と申しながら、なほ時の帝（當時の天皇）を守り給はすることは強きなめり。」（強いと見える。）とぞ古き人々（老人達も）も聞えし。（申した事であつた。）又信頼の衛門督（信頼と云ふ衛門督）が、おほけなく（畏れおほくも）二條院を背し（オビヤカシ、脅迫すること。）毒りしも遂に空しき屍（遺骸）をぞ道のほとりに捨てられけり。かゝれば（だから）古りにし事を思ふにも（思ふにつけても）なほ（矢張）さりとも（然かありとも）如何に北條強しと云へ）いかてか（どうして）三皇（三人の上皇様方や）今上（今上陛下や）數多在します玉城（宮城、此處では官軍、朝廷側のこと）の徒に亡ぶやうやはあらん（亡ぶやうやあらん。亡ぶ様なことがあらうか。ありはしない。）とたのもしくこそ覺えしに、かくいとあや

なき（物の黑白の區別なき事。不條理のこと）業（「ワザ」結果）のの出てきめるは、此の世（現世）一つのこと（原因、因縁）に（↓↑よるので↑↓）もあらざめれど（あるまいが）迷の愚かなるまへ（迷執深き愚昧の眼）には、なほいと怪しかりし。（矢張大變奇怪な事に思はれるのであつた。）

【二四】六つにて（十後鳥羽上皇は十）位に即かせ給ひて十三年（十帝位に十）おはしましき。（十御位より十）おり給ひて後も土佐院（土御門院）（十御在位十）十二年（十の間十）（それから十）佐漣院（順徳院）（十御治世十）十一年（十の間は十）なほ天下には同じこと（矢張天下に對しては、天下の政治に對しては同じく院中に於て御總攬になつてゐた）なりしかば、すべて卅六年がほど、此の國のあるじ（主上）として、萬機の政（萬づの、種々重要な政務）を御心一つにをさめ（後鳥羽院御親らの御考へのまゝに決せられ）百の官（モ、のツカサ、百官ども）を従へ給へりし（御率ふになりまして政務に參與させられましたる）そのほど（その間の御様子と云つたら）吹く風の草木を靡かす（十その威勢↓）よりもまされる御有様にて、速き（↓土地に居る者↓）を憐び、近きを（近き地に居る者を）撫て給ふ御惠、（↓は非常に繁くて↓）雨の脚より繁ければ、（繁く多くありますから）津の國のこやの（此れは單に次に來る「ヒマナキ」の序詞であるから簡單に考へておくが都合がよからう。）ひまなき（少しの御



暇もなき御多端なる) 政を聞し召す (御見そなはせられる) にも、(十世の中が+) 難波の葦の (此れも簡単に、次に来る「亂れ」の序詞であると思つておく位が都合がよからう。) 亂れざらんことを思しき。(十かくの如く世は無事泰平でありましたから+) 鏡姑射の山 (ハコヤの山。支那では仙人の棲む山とせられてゐる。我が國では上皇の御所を仙洞とも鏡姑射の山とも云ふ。) の峰の松も、やうやう (次第次第に) 枝を連ねて (繁り榮えて) 之は後鳥羽院御父子御兄弟の御榮えになることを云つたのである。) 千代に八千代を重ね (千年の樹齡に又八千年も加へる様に) 之も上皇様方の御運命の榮えますことを云つたのである。) 霧の洞 (仙洞御所) 即ち上皇の御住ひ) の御すまひ (御生活) (+け+) 幾春 (幾年) を経ても、空ゆく月日の限り知らず (無限永久であるが如くに) のどけく (御安らかで) おはしましぬべかりける世を (いらつしやるべき筈の世であらせられたのにも係らず) ありありて (そのまゝ、續いて果ての結果は、行きがかりの結果で) よしなき一ふしに (つまらない一事件のために) 今はかく花の都をさへ立別れ己がちりぢりに (御銘々散り散りにならせられて) さすらへ (御漂泊遊ばし) 磯 (海岸) の古屋 (茅を以て葺のやうにあみたもので屋根や周圍等としたる粗末なる海士の家) に (と共に) 軒を並べて (+御住ひになり+) 自ら (自然向ふから) こと問ふ (話しかける) ものとは浦に釣するあま小舟 (蚤小舟、いさりぶ

れ) (+か又は+) 埃焼く煙の塵く方も、(鹽焼く煙の他には何物もなくつて極く淋しい所である。) (+そしてその煙のなびく方を+) 我故郷の (御自分の故郷への) しるべ (案内物) かとはかり (さういふ風に) 詠め (ナガメ) 通させ給ふ。(+此の如き遠地の+) 御すまひどもは (御生活等と云ふものは) それまでと (何時々々まで) 月日を限りたらんだに (時期を假に限定してあるとしても) あす知らぬ世のうしろめたさに (明日が知れない人生の事まで種々の事が心にかゝつてその爲に) いと心細かるべし。まいで (まして) いつまはとどか (いつを限りとして) 廻りあふべき限りだに (京都の人等に廻り會ふ事の出来るさういふ朝限の定めはなくして) 雲の濃煙の濃の幾重とも知らぬ境に (雲や霧が涙の様になつて幾重となく重つて遠く隔てゝある人遠き配所の境に) 世をつくし給ふ (一生涯をお終りにならねばならぬ) 御さまども (御様子、御境遇と云ふものは) 口惜しと云ふもおろかなり。(残念なんぞと云ふのではとても十分でない、飽足らぬ程である。)

【二五】 この(後鳥羽上皇様の) おはします所は、人離れ里遠き (人里遠くはなれたさういふさ同じ。一体里と云ふは(1)人のすむ所。(2)田舎等の義である。此處は「人の住む所」から遠くはなれたさういふ意味である。) 島の中なり。海面 (「ウミツラ」) 海岸。海の水面でない事に注意せねばならぬ。) よりは少し引入りて (入り



込んで) **山陰に片そへて** (山陰に一方を寄せかけて) **大きやかなる** (可成大きな。可成りに大ぶりなる。只「大きなる」は少し違ふとせられてある。) **巖のそばだてるを** (聳えてゐるのを) **たよりにて** (便宜として、利用して、) **松の柱に** (+それから又+) **葺ける廊など** (葺で葺いたる廊等。)**【廊とは細殿、宮殿等の周囲に通路として造つた細長い屋。渡り廊と云つてもよい】** **けしきばかり** (ほんの形ばかり) (+であつて+) **ことそきたり**。(「事殺ぐ」の義で簡素にする、略式にする等の義。誠に簡單、略式であります。)**誠に【柴の庵のたゞしはし】とかりそめの** (古今集の西行法師の歌に「いづくにも住まればすまであらん、柴の庵のしほしなる世に。」とありますがその歌の如くに眞にたゞしばらく假に間に合せに云つた様な風の) **御やどり** (御すみか) **なれど、さる方に** (相當に、或点では、簡素なら簡素なりに) **なまめかしく** (優雅に、風雅に) **ゆゑづきて** (由緒ありげに、趣を添えて) **しなせ給へり**。(しなす作る。)**【せ】尊敬の助詞** **水無瀬殿** (あの水無瀬の離宮の御遊なご) **思し出づるも** (思ひ出し遊ばすにつけても) **夢のやうになん**。(萬事が夢の様である。今の境遇に思ひ比べて萬事が現實の事とも思はれない様である。過去の夢ではなかつたかこの様に思はれるのである。) **はるはると** (遙かに) **見やらるる** (見渡せられる) **海の眺望** (海のながめに御接しになりますと云ふこと) **二千里の外も残りなき心地する** (白樂天が

「二千里外故人心」即ち遠く／＼隔て、ある都の人々の事が残らず思ひ出される様な心地がする) (+と云ふのも+) **今更めきたり**。(今更云ふまでもない事である。) **汐風のいとこちたく** (事痛くの義。キツク) **吹き来るを聞き召して** (+十次の様な歌をお詠みになりました。+)

我れこそは新島守よおきの海の

荒き浪風心して吹け

**一首の意** ……自分は新に来て島の番人、島守となつたのだぞ。されば波風よ。どうか注意して吹いて呉れ、荒き浪風よ。裏面の意は「世の波風がつらく當るからせめて此處の波風だけても静かにありたい。」と寓せられたのである。「おき」は隱岐と沖とを掛けたのである。  
おなじ世にまたすみの江の月や見ん  
けふこそよそに沖のしまもり。

**一首の意** ……おなじ世、即ち此の一生の中に、又京都に歸り以前の境遇にすむ事が出来てあの攝津の國の月の名所の住江の月を見る事が出来るであらうか。今日はこんな風に他所に身をおきて沖の方で名所の月も他所目において見る隱岐の島守となつてゐるが。「住む」は



「住む」と「澄む」を掛けおきは「置き」と「沖」と「隠岐」とを掛けた。

附 録

後鳥羽上皇 後鳥羽上皇は天曆以降久しくすたれた和歌所を復興され、寄人、開蓋、連署等の役員を置かれ(建仁二年)撰歌及び歌會等の事を掌る處とし給ふ。秀味數多おはす中に、吾人の最も御心事を推察し奉りて痛悼措かざるは、

「我こそは新島守よ、沖の海のあらし波風心して吹け。」

「垂乳根の消えやらでまつ露の身を風より先に如何に問はまし。」

の二首なり。前者は初めて御着島の頃の御感懐、後者は母君御危篤の報に接し給ひての御述懐、御雄圖を抱きて悶々の御胸を朝な夕な千波萬波にいたませられし御有様は御痛はしの極なり。(三浦氏、綜合日本文學全史)

歴史參考書より

天皇多能敏慧にましまし、故實に精通、屢々群臣と節會除目の儀を講じ琵琶を藤原定輔に學び、その精緻を極め、蹴鞠を能くし給ふ。又御力ありて劍術相摸等も好み給ふ。最も和歌に長じ給ひ、御讓位の後、和歌所を禁中並びに水無瀬の離宮におき、屢々歌合せの會を行ひ、且つ、源通基、藤原有家、藤原定家等に勅して歌集を撰せしめ、宸裁によりて採擇せられしもの少からず。元久二年成り新古今和歌集と云ふ。天皇源平争亂の間に於て大統を受け給ひ、後承久の亂に遭ひ給ふ。朝權の武門に遷る實に此の時にあり。建久三年七月十二日源頼朝征夷

大將軍を拜し此れより後將軍の名を以て政權を執り、延いて七百餘年に及べり。

【二六】年(新しき年)もかへりぬ。(立ちかへつて承久四年になつた。)所々浦々(「所々」方々の里。「浦々」海岸。所々浦々に御出でになる三上皇や皇子女方。)あはれなる事をのみ(物悲しい事。あはれなる御感懐をのみ)おぼしなげく。(考へては歎かれます。)佐渡院(順徳天皇)あけくれ御行(「オンオコナヒ」佛道を修行なさる。こ)をのみし給ひつ。(なばかりせられて)一方では、猶ざりとも(「然かありとも」さありとも)の略。「さうであつても」今はかうして遠方に居るがそれでも)十(十いつかは又都に還る。こ)も出来ようか)十(十それを頼みに)おぼざる。隠岐には(即ち後醍醐天皇におかせられては。※直接申上げないで間接に所を以て申上げたのである。)浦(海岸)よりまぢの(づつと遠方の)はるばると(遠く)眺みわたれる(一面に霞んである)空をながめ入りて、(さつと一途に眺められて)過ぎにし(過去の)方(方の事)かきつくし(「かき」は接頭語。「つくし」と云ふに同じ。全部残らず)おもほしいづるに、(「思ひ出されますと云ふと」位に譯したらよからう。)ゆくへなき(「行くべき方向、進み行くべき先が無い」と云ふので「途方に暮れる)御涙のみぞ(「涙が出てほろろ」とどまら



ぬ。(ごまりません、ごですよ。)

うらやまし長き日影の春にあひて

汐くむあまもそてやほすらむ。

【一首の意】 汐くむあま 【潮水を汲む事を仕事とするところのあま。 「潮を汲む」とは食鹽を製するためや又は潮湯等をするために潮水を汲むのである。 「あま」 「海士」 「蟹」とも書き凡べて海岸にて賤しき業に従つてゐる者の稱。】 は年中潮水ばかり汲んでゐるのであるから袖は始終濡れて居るであらうけれども此の頃は長き日影の春にあひて【日の長い春にあひて】彼等も袖をほすことであらうけれども自分は思ふことのみ多くて涙乾かれば袖の干ることではない。うらやましい事である。)

夏になりて、萱葺の軒場に五月雨「サミダレ」のしづくいと所せきも(場所が狭い程繁く落ちるのも。「所せき様子」の意と見てよい。 ) 【所せきに】と云ふ様な意に解して 「葉が繁く落ちたが」と反對の意に譯せるもあり。】御覽じなれぬ御心地に(見慣れ給はぬ御心地がして。 「に」は「がして」位の意。 ) さい(趣)かはりて珍しくおぼさる。(「おぼさる」の語だけで「思ふ」の敬語でそれに更に「る。」と云ふ

尊敬の助動詞が添ふてゐる。)

あやめふくかやが軒端に風すぎて、

しどろにおつるむらさめの露。

【一首の意】 今日(今日は端午の節句であやめふく(あやめを軒に挿してゐるその↓)かやが軒端に(葺で造つた家の軒先に)風すぎてしどろに(亂れて)むらさめの露(一しきり降り過ぎる雨の雫。 【むらさめ】は一体は叢雨、村雨と書き「一しきり降り過ぎる雨、即ち夕立、霖雨なのであるが此處では随分はげしく一しきり降る五月雨の事を云つたのである。 ) が落ちますわい。

【二七】 故(「コト」亡くなつた) 時頼朝臣【「アソミ」又は「アソン」】 姓「カバネ」の名。八姓の中第二等に位す。】は康元元年(後深草天皇の御代) 頭おろして(剃髪して。出家入道して。) 後、忽びて(内々で) 諸國修行しありきけり。(修行「シユギヤウ」又は「スギヤウ」佛法を行ひ修むること。此處では行脚「アソギヤ」と同じ。 ) 【行脚】の僧が旅行して行く／＼食を乞ひ露宿などして佛道を修行すること。(2)徒歩して遊歴すること】それも國々の有様(政治の行はれて居る様子) (十ヤ十)人の愁(「ウレ」)憂苦(「ウレ」)



ど委しくあなぐり(探り索めること)見聞かむ(實檢しよう)の謀にてぞありける。あやし(賤しき)やどり(宿)に立寄りては、その家ぬしがありさまとひ聞き、ことわりある愁(正當な理由ある訴訟)などのうづもれ(悪役人等の非法によりて邪覺せられて上に達せられないでそのまゝになる)たるを聞きひらきては(出しては)「我はあやしき(卑賤の)身(身分)なれど、むかしよろしき主を持ち奉りし、昔は可成りに立派な、相當な、主人を持ちましたが(十その主人公は十)『持ち奉りし、』」此れは連体形で切れて居るので随分變な用法である。此れも矢張一種の連体止めであつてその下に体言の「主人」が略されて居るのであつて矢張主格をなすものを見てよい。※又此處の「よろしき」は積極的な意味に譯せぬ方が當つてゐる。』いまだ世にやおはすると(まだ世に生きて居られるか知ら。多分まだ生存して居られるかと思ひますから)消息奉らむ。(手紙を差し上げませう。もてまうて(持つて行つて)聞え給へ。困つてゐる事情を申し上げなさい。)などいへば「なてふ事なき(何でもない)修行者の、何ばかりかは。(何程の事が出来やうか。出来はしまいだらう。)-とは思ひながら、いひあはせて(互に打合せて)その文を持ちてあづま(關東。此處は鎌倉を指す。)へ行きて、しかじか(此れ〜)と(十前の卑しき行脚僧即ち時頼が+)教へしままにいひて見れば、(十それは+)入道殿の御消息(御手紙)なりけり。(十そこで

+) (十その役人は+)「あなかまかま。」(あやかましい〜。靜かに靜かに)【此れは役人が訴訟人に對して誓める詞と見てよい。即ち訴訟事が滞りになつてゐたのであるから訴訟人の申分で事が面倒になるのを心配して靜かに〜と訴訟人を制して置いて手紙の内容通りに計らふのである。】【又一説には訴訟人に時頼の消息であると云ふ事が分つてはよくないので役人共が互に大言せぬ様に誓ひ合ふのだとも云ふ。】とて、永く愁なきやうにはからひつ。佛神などのあらはれ給へるかとして、皆頼をつきて(額を地につけて非常に丁寧な態度で禮をして)、悦びけり。かやうの事すべて數知らずありしほどに、國々も(國々の守護地頭なども)、(十非理の政治を行はない様に+)心づかひをのみしけり。最明寺入道とぞ云ひける。【入道】の佛道に入る事。又その人。(古昔は佛道に入つた三位以上の人の稱。四位以下の場合には新發意と云ふ。】

【二八】おりみの御門 (「ミカド」御退位の天皇即ち花園上皇)は御兄の本院(後伏見上皇)【上皇】とは天子の御讓位の後の稱であるから此の場合には御双方花園上皇、後伏見上皇と申し上げるが至當であるけれども説明としては天皇の御名を以て花園天皇、御伏見天皇と説明申し上げてもよろしい。】と、ひとつ持明院に(御一緒に持明院の御殿に)【持明院||持明院御殿||京都に在りて、藤原基家の家宅なりき。高倉天皇の皇



子守貞親王、此の邸に居給ひて持明宮と申されたり。以下文尾註参照】住ませ給ふ。もとより(元來)御子のよしにておはしませば(此の花園天皇は伏見天皇の御二皇子でいらつしやるのであるが、後伏見天皇の御子様分なつていらつしやるのであるから)まいて(まして||猶更)ひとつの院(院の御所。上皇の御所)の内にていささかも隔てなく(親しく)聞えさせ給ふ。(せられる。遊ばされた。)いと(誠に、如何にも)思ふ様なる(望ましい。御結構なる。)御有様なり。さるべき(當然さうである筈の)御中(御間柄)といへども昔も今も御腹などかはりぬるはいかにぞや。(昔でも今でも同じ事であるが、御腹等が違つてゐる。即ち實の御子でない時等には一体どうであつたらうか) (十大抵はよからぬ争事が起つたではないか+) (十全く此の御二方の御間の如きは珍らしい事である。+) そはそはしき事 (角だつた事。圓滿に行かぬ事) もうちまじり。(交り起きて) くせ (曲つた事、正しからぬ事偏頗な事) あるならひにこそあるを (の) この院の御あはひ (御間柄) まめやかに (眞實に) (十うるはしくて+) おもほしかはしたる (同じ御思ひに思ひ合ひ給へる) (十御事は+) いとありがたう (珍らしく) めてたし。(結構な事である。)

.....

【①持明院……】「本文中續き」……又後深草天皇、位を龜山天皇に譲りて、此の仙洞さし給ひき、故に其の皇裔を伏見、後伏見、後光嚴帝以下を、すべて持明院派と云ふ。されば持明院といひて、伏見帝を指し申すこともあり。又、光嚴帝を申すこともあり。さて、龜山天皇の皇裔をば大覺寺派と云ふのである。(國語漢文、中辭林、)

【②きこえさす】……「きこゆ」と云ふ語が元來敬語なのである。

他動詞の場合 (1) 申し上げるの敬語。

(2) 差し上げる、贈る等の敬語。

(3) 遊ばされる。せらるの敬語。

等の意がある。「きこえさす」は更に之を敬語化したのである。本文は(3)の場合の意と見てよい。

【二九】 いとあやしげなる (賤しくみすばらしい。きたない) あまの釣舟 (漁船) のさまに見せて、夜ふかき空 (夜深く然かも明けはなれる迄にはまだく間のある空) の暗きまきれに (暗くつてよく分らぬのに乗じて、暗い時にまきはしごまかして) おしだす。折しも、霧いみじうふりて、ゆくさきも見えず。いかさま ならむと (どんな事にならうか暗いのにこんな小船で沖に漕ぎ出して) あやふけれど (覺束なく案じら



れるけれども心まじづめて念じ(神佛の冥助を祈念する。)  
 「念す」と云ふ言葉は「こらへる。執へる。」と云ふ意味の語でもあるから此處でも「心を静めてちつとこらへて居られる」とこに譯したのもある。和田英松氏、増鏡詳解には後者を探つてある。給ふに(處が、……してゐらつしやるさ→)思ふかたの風さへ(まで)吹きすすみて、その日の申の時(午後四時)に、出雲の國につかせ給ひぬ。こころぞ、人々心地しづめける。(氣を落ち付けたのである。)

【三〇】

此の篇は特に要語句のみを摘出し、後に通釋を掲げるから問題篇の本文を参照して研究せられる事を望む。

【六波羅「ロクハラ」】……山城國京都市下京區の内六波羅密寺、方廣寺の邊にて、鴨川の東、南は七條より北五條、松原通に至る邊で平家が豪壯なる邸宅を構へて四時を春さ樂しく騒りたる趾である。平家の滅亡するに及びて悉く燒棄せられたのである。次いで北條氏は承久の亂後南北兩探題府を此の地に置き弘元年北條氏は此の府によりて後醍醐天皇に叛き奉りき。

【百敷。「モモシキ」】……大宮。禁中。御所。(廣き意より云ふのである。)(百石城「モモイシキ」の約。皇城の堅きを石に譬へたる語と云ふ。「言海」※「もしきの」||大宮の枕詞。

【曹子。「ザウシ」】……(1)官省、禁中等の官人「ヤクニン」女官等の用部屋。局「ツボネ」とも云ふ。

「参考」更に(2)古大學寮にて學生を教授したる所。(3)部屋住の公達の稱。「部屋住」とは未だ一家の主人ならずして部屋に住み居る者にて「部屋住」の事を「曹子住」とも云ふ。◎本文では勿論(1)の意。

【厨子「ツシ」】……元來は厨「クリヤ」||食物の煮焚きを調へる場所。台所。||にて食物を納め載せ置く棚なりし物を載せるのに便利であるのでその形をうつして、風流に作り、貴人は之を傍に置きて書畫、文書、調度等を載せるに用ひたもの。又その形に似た佛像を安置するものをも「厨子」と云ふ。佛龕。

【御調度「オンテウド」】……日用手廻りの道具。

【宮人。「ミヤビト」】……宮仕へする人。宮中の人。官人。凡べて禁中に仕へ奉る人の總稱。

【几帳。「キチャウ」】……台に柱ありて、之に帷「トマリ」を懸けたるものであつて座の側に置きて内外を遮りたる具。三尺の几帳四尺の几帳ありと云ふ。古昔は多く貴婦人の座側に立てた。今の「ついたて」の類である。



【后の宮、「キサイのミヤ。」……「キサイ」は「キサキ」の音使。「キサイのミヤ」も「キサキ」も同じ。

「キサキ」『天子の御妻「ミメ」。くわうぐう。君幸「キミサキ」の略と云ふ。

【いさあさましく……非常にあさましい即ちあきれはてた情ない様子に十變つてしまひ。

【ふみしだきひきおさす】……ふみしだく〓ふみ荒す。蹂躪す。

【えも云はぬ武士。】……モノノフ。〓何とも云ひ様のない恐ろしさうな武士。

【續松。「ツイマツ。」……松明「タイマツ」に同じ。火を點じて燈となすもの。

【渡殿。「ワタドノ。」……細殿、即ち廊下に同じ。貴人の邸宅に於けるが如く例へば寢殿造り等に於け

るが如くに寢殿より對の屋、釣殿、泉殿等に通ふ廊舎。細殿。廻廊。

【けうさく】……①疎ましき意の轉じて恐ろし。此處では無論②の意。

【修行「シユギヤウ。スギヤウ。」の門出「カドテ。」……佛門に入りて修行に出で立つこと。

【参考のため全文を簡単に通釋するに……(問篇題の本文参照)

さて皇居には廿四日夜、六波羅より、常陸守時知馳せ参つて、百敷の中をあさり(探し、捜索し)騒ぐ。

その程(時)人の曹司なごに、自ら(オノツカラ)落ち残りたる女房(ニヨウボウ)の心ちいはむ方な

し。在し(オハシ)ます殿(清涼殿)を見れば、近き御づし、御調度なごも、何くれ、(それから何や

彼)(十又十)覗なごもさながら(そのまま)うち散りて、只今まで在しましけるあごと見えながら、宮

人なごだに一人もなし。女房の曹司曹司より、ひすましめく(ひすましの様な賤しき)【ひすまし】

樋すまし。樋洗ひ。〓便器等の掃除をする者】女童(メノワラワ)少女)など、我先にさ走りいで、

調度なごも運び騒ぎ、くづれいづる氣色(亂れ出でる様子)ごも、いさあさましくめもあぞなり。(一

体之は目もきら〓する意である。此處では却つて轉じて目もあてられぬ程見苦しきに云へり。)錦の

几帳の内につかれまし〓つる后の宮も、何の儀式もなく、忍びてあわて出でさせ給ひぬれば、あた

り〓かきけらひ、(中宮御座所の近くのものは何くれとなくかき拂ひ持ち運び行きたればの意)時の

間に、いさあさましく、御簾「ミス」几帳など、ふみしだきひきおさして、火の影もせず。こゝもかし

こもくらがりて、うちあれたる心ちす。

今朝まで、九重の深き宮の中に、出入り仕へつる男女「ヲトコヲナミ」ひさりとまらず、之もいはぬ武

士ごもうち散り(到る所に散ばつて)あら〓しげなるけはひに、續松たかく捧げて、細殿、渡殿、何

くれ、まかげさしてあさりたる氣色、けうさくあさまし。世はうきものにこそと、(十思はれて十)時



の間に、げに心(道心)あらむ人はやがて修行の門出になりぬべくぞ覺ゆる。

【三一】 相模守(「サガミのカミ」「カミ」守とは國の長官である。) 高時(鎌倉十四代の執權北條高時のこと)といふは、病によりて、いまだわかけれどとせ(或年) 入道して(出家して) 今の世の大事(現在の天下の政治) どもいろはねど(「いろふ。取扱ふ。處置する」)(十北條氏の嫡流ではあるし+) 鎌倉の主にてはあめり。(鎌倉の主として、衆人にあがめられ勢力がある様だ。)あめりあるめりの「る」が省かれたるもの。「ある様だ。」と譯す。心はへ(性質) なともいかにぞや。(どうしたものであつたか) うつつなくて(正氣がなくて狂人じみてゐて) 朝夕好む事とても、犬くひ(犬のくひ合ひをさせて遊ぶこと。闘犬の遊戯) 田樂(「デンガク」も農人の耕作の勞を慰むる爲に、笛鼓など用ひて、なかしき藝を演ぜしに始まり、後には法師の業となりて、腰鼓を打ち、編木「ササラ」をすりて舞ひ踊り、遂には、座を設けて、新曲を作るに至れり。鎌倉室町の頃盛に行はれしが、猿樂の能起りてより次第に衰ふ。「國語漢文中辭林」などをぞ愛しける。此れは最勝園寺貞時と云ひしが子なれば、承久の義時(人皇八十四代順徳天皇の御代即ち承久の時の義時)よりは八代(八代目)にあたり。

【三二】 あづま(關東の、鎌倉の) 夷(エビス)北條勢をさげすみ「輕侮」して云つたのである。) どもやうやう(+

後醍醐天皇の行在所、笠置の方へ+) 攻め上るよしきこゆ。もとより京(京都六波羅南北兩探題)にある武士どももわれさきにときほひ參る。木の丸殿(コノマロテン、キノマロドノ。キノマルドノ。荒木にて造りたる宮殿。黒木の御所。)此處は笠置の行宮を云ふ。】 にはさこそいへ(さうは云ふもの。諸國の武士參り集つて居るさは云ふもの) むねむねしきもの(これさしつかりしたもの) なし。いかになりゆくべきかと(十御思召になつて+) (十後醍醐天皇は+) いと心細く思しみだる。わが御心もての(御自身の御決心の)もに出來「シュツタイ」したる) 御事なればかこつ(恨み悲しむ) かた(事、わけ合ひ) なけれど、故郷(京都)の空も(十何もなく思ひ出されて+) (十嗚呼中宮、宮々如何ならん+) あはれに(感慨深く哀に) 思し出でらる。(自發の「らる」である。) 秋も深くなりゆくまゝに(つれて) 山の木の葉のうちしぐれ(山の木の葉に時雨「シグレ」がハラ／＼とうちそそぎ) 谷の嵐のおとづるも(おきづれて來る様になるが之に就ても) 敵のきほふ(我先きにぞ攻め寄せる) かと肝を消す(十↓かやうな↓+) 御すまひ(十であらせられて+) (十全く+) いつしか御身をかへたるこごちしたまふもあぢきなし。(なさけない。)

【三三】 かの承久のためしにや、(「あの承久の亂の例にならへるにやあらん」の意。) 承久の亂に於ては三上皇を



各々遠島にお流し致し奉つた。即ち後鳥羽上皇を隠岐に、土御門上皇を、阿波に、順徳上皇を佐渡にお移し申上げたのである。】遂に（十後醍醐天皇をば十）隠岐國へうつし奉るべし（輕き意志。「御流し申上げよう。」の意。）とて、彌生（「ヤヨヒ」）三月。元弘二年三月（はじめの七日（十七日）中の七日。廿七日）末の七日。又は下の七日。七日（初めの七日。上の七日。）に都を出てさせ給ふ。今は（十愈々お住馴れになつた都を去られるのだ――）と開しめす（お聞きになるころの）御心まどひ（御胸中の御狼狽。御心の亂れられること）ども、いへばさらなり。（今更申上げるまでもない。わかりきつたことである。）所々（所々にお出でになる方々。「カタカタ」の意。即ち女院。中宮。親王方等。）のなげき、近うつかまつりし（お側近くお仕へ申した）人々の心地（悲しい心地）ども、おき所なく（遣る方なく、遣り場所もない程。どうにもしようなく）悲し。御門（主上。後醍醐帝）も限りなく御心慳むべし。（お心苦しく思召されたことであらう。）いと（まあ。ほんまに）かうしも（かくも非常に――）（――悲しんでゐる所を此う云ふ風には十）人に見えじ（見せじ）と、かつは（一方では。これは前に悲しまれた事が書いてあつたから悲しまれる一方では又と云つたのである。）おぼししづむれど、あやにくに（意地わるく。生憎に。）通み出づる御涙を、もてかくしつゝ（強ひてお隠しお隠しなされて）おはします。ふりにし事（過去

の事。承久の役に後鳥羽上皇が隠岐に御流されになつて遂に都にお還りになる事もなく其處で崩御なされたのである。）を思し（「オボシ」）思ふの敬語）出づるにも（につけても）立ちかへり（都にお還りになつて。「立ち」は接頭語。）「かへり」は「都にお還りになる」と云ふ意でなくつて「元の安心なる状態御境遇にお戻りになつて」の意であるといつたのもある。】また世を安く思さむこと（世を安らかに。御生活あらせられる事は）「世を安らかにお治めになること」と譯したのもある。】いとかたければ、よろづ（何事も）今をどぢめ（今が最後）にこそと（であるわい）思しめぐらすに、（と云ふ）人やりならず（誰のせいでもなく、自分から求められて以て）。又は「自分御自身から招かれた事とは云ひながら」と譯してもよい。）口惜しき（残念なる）契り（前世からの約束事。因縁。宿縁。）加はりける（ふりかかり加はつた）前の世のみぞ（ばかりがまあ）盡きせず（飽く事まで。ごこまでも。）恨めしき。  
つひにかく沈みはつべき報あらば  
うへなき身とはなに生れけむ。

一首の意 〓つひにかく沈みはつ（落魄して給ふ）べき（答の。……して終はればならぬ）  
報（運命）であるならばうへなき身（一天萬乗の國尊の身）なんどには何（何故）生れた事



であらうか。(一)→+普通の人間に生れた方がよかつたであらうよ。……誠に畏き極みである。」

【三四】(十後醍醐天皇は十)野中の清水(播磨明石郡の國道にある名勝。清水で有名)。「見の浦、(明石の西に連る海邊)高砂の松(播磨國加古郡河古の高砂神社の境内に在る松)など名ある所々御覽じわたさるもかからぬみゆきならば(此んな鳥流し等云ふ不祥な御行幸でなかつたら)まかしうも(定めし面白く。「も」は感歎の動詞。)ありぬべけれど(ある筈であらうのに)。「此んな時の「ベシ。」は推量ではあるが一体推量云ふ心理作用は相當當然なる根拠があつて行はれる心的作用であるのだから單に推量だけよりか「當爲」+「推量」即ち「べき筈で+あらう。」等と譯した方が却つて當つてゐる様である。」よろづ(すべて)かきくらす(氣の暗れぐせぬ)御みだり心地(憚ましき心地)に御目とまらぬもわれながらいたうくんにけるかな(屈したものだなあ。情氣こんだなあ。)とおぼさる。いと高き山のみねに花おもしろくさまつづきて白雲をわけ行く心地するもえん(覽。あてやか、優雅)なるに(ので……に付けても)都の事敷々おほし出てらる。

花はなほうき世もわかずさきにけり

【三五】

美作の國におはしまし著きぬ。(御到着遊ばされた。)と解してよい。【おはします】(一)動詞、助動詞

に附けて敬意を表はす。(三)おはす。「の一層敬語である。「おはす。」「(一)行くの敬語。(二)來るの敬語。(三)有るの敬語。(四)居るの敬語。本文では行くの敬語として用ひてあると思つてよい。【御心ちなやまして、(御氣分がおすぐれにならないので)この國に二三日やすらはせ給ふほど(その間)かりそめ(ほんの一寸の假の)御やどり(宿泊所)なれば、(+御門の御座所も+)物深からて(物深く奥まつてゐなくつて)さぶらう限りの(此の「限りの」等と云ふ語をあまり嚴密に解釋しようと思ふと非常にむづかしい事になる。譬固の爲め奉仕する程の、位の意である。奉仕すると云ふ風な、様な位の意である。)武士ども、おのづから(自然)けぢかく(御側近く)見奉るを、(+ば+)あはれに(何とも云ひ様もない感じがして)めだたし(幸な事だ、結構な事だ)と思ひ聞ゆ。(思ひました。【聞ゆは動詞に續けて對者に對して敬意を表する詞である。つまり此の場合は助動詞を用ひられたわけであつて中古文の敬語法として多く用ひられたわけである。】君もおほしづくる事ありて、あはれとはなれも見らむわが民と



思ふ心は今もかはらず。

一首の意 目近く居る武士達よ。汝等も我が身の上をあはれと思ふであらう。實際その通りだ。然し自分は此のあはれな今日の身の上になつても汝等を我が民と思ふ愛しみの心は昔と變りはないのであるぞよ。

【あはれにめでたし……】……此處の解釋は種々行はれてゐる様である。

①大變氣の毒に思ふことは思ふものの又何と云ふ御立派な御姿だらう……………。

②大變御立派な御龍顔である事よ。

等であるがどうも本文さしつくりしない様である。矢張

◎「何とも云ひ知れぬ感じにうたれて結構な事である。幸福な事である。」等と解したがよいと思ふ。「めでたしと思ふ」のは「玉體を」でなくつて「近く見奉るこゝな」である。此れに就ては雜誌「考へ方」に於て共鳴する解を擧げてあつた事を喜ぶのである。

【三六】 御遷なかにばなりぬれば (後醍醐天皇が隱岐に御遷幸になるに就て、京都よりの御旅程も早や半に達したので)

御遷の者共上下 (御護送申し上げたさころの武士以下の者共貴賤を論ぜず共に) 都出てしよりも猶ほなやかに今めかしうさうぞきかへたり。(装束を仕換えた。服操を着換えた。) 大方は (大体) (此度の行幸は+) あやしう (十賤しく御粗末で+) さまことなる御幸なれど、遣すがらの御まうけ (御設備) 國々心づかひしたる (國々て注意して御世話したる) 氣色 (ケシキ。様子) などはかうさま (此の如き) 御ありき (御旅) とは見えず、いとやんごとなく (貴く) なん。(十ありける。+) さはいへど今まで國のあるじにて、世をもいみじう (非常に立派に) 治めさせ給へりける名殘にやあらん (名残り) 「最後の御別れ」を思ひ奉りてならんか。いとねんごろにのみ (十國々に於ては+) (十道すがら+) 仕うまつれり。古への御幸 (古への後鳥羽院の御幸) どもにはかやうはあらざりけりとぞ古きこと知れる人々いひ侍りける。

【三七】 (十隱岐の國の後醍醐天皇の行在所の御様子は何に云ふと) 海づら (海岸) よりは少し入りたる

國分寺 (隱岐國知夫郡所在。今は別府村と云ふ所にその廢趾があるといふ。此の國分寺に着かれたのは四月二日である。尙ほ増鏡に於て後醍醐天皇が都を御出立ちある時の條を記した文によると元弘二年三月「ヤヨヒ」初七日とあるから四月二日と云ふのは無論元弘二年「一九九二」である。) といふ寺をよろしき



さまに(適宜な様に) とり拂ひて(手入をして) おはしまし所(行在所)に定む。今はさは(「しかなり  
 上は」の意。さうなつた上は。行在所も既に定つた上は。) かくてあるべき御身(かうして行在所にて  
 身を終へられればならぬころの御身。)  
 【又「今ではこんな事になつたのも自然さうなるべき運命なのだ  
 とお誂らめになつて。」と譯したのもある。又今一説は「さは」を「然か」と譯し「こころ云ふ風になつ  
 た上は」と譯さないで「今はかく」の意味に譯し「今迄は御道中も何處に落ち付き給ふとも定らず夢の如  
 く思召されてゐたが今はかく御すまひも定まりて、かうして行在所に居らせらるべき御身ぞかし、御身で  
 あるわいさ御心を静められても猶夢の心地して云々。」と譯したのもある。(和田英松氏著)】  
 ぞかし(わ  
 い。よ。)と、おほししづまる(御心を静めてお考えになる)ほど(に就ても。又は輕き意味の「が。」な  
 ほ夢の心地して(現在の御境遇は夢ではないか即ち實際事ではないか云ふ様な御心地がせら  
 れて) いはむ方なし。そこら(「こころ」に同じ。澤山の意。) 参りし(御供について参つた) つはもの  
 (武士) どもも、まかつれば(退出して終ふと) かいしめり(ひつそりとして) のどやかに(活氣なく閑散  
 に) なりぬる、いとど心細し。昔こそ(昔は誠に) 受領(「ズリヤウ」) 國司の長官。國守。實際任國に赴  
 きてその國の治政に關與する國司の長官。) どもも任のほど(任期の間は) その國をしたため(處理して)

行ひしか。(政治を實際行ひました事ですよ。)(十然るに十) 此の頃(後醍醐天皇の頃) はただ名ばかり  
 にて(國守受領等と云ふものは名義ばかりで實際は任地に赴いて政治はせず即ち有名無實なり) いづく  
 にも(何れの國に於ても) 守護と云ふものの(守護といふもので) ↓+それはどんな勢力を持つてゐたも  
 のかと云ふさ↓+それは) 【守護】とは國司の外に武家より家人を遣はして、國政を司らせるもので  
 源頼朝の時初めて之を置かれた。【目代(國守に任せられたる者京都に留りて任地に赴かず、任地には代  
 りの官を遣はして國政を司らしめた。此れを目代と云ふ。) よりはおぞましき(恐ろしき)(+官+) をす  
 るたれば武家のなびきにてのみ(武家に服従するばかりであつて) おほやけさまのこと(朝廷に關係した  
 る義務。つとめ。即ち租税、課役の事) 【又或は此れは「朝廷に對する義務、奉公であつて此處では後醍  
 醐天皇の行在所に對する奉仕萬端を指したのであると解したのもある。】 はよろづおろそか(粗略) にぞ  
 しける。

参考

【國守】 國司の長官。一に受領「ズリヤウ」とも稱す。一國を統治し、任期中一度屬郡を巡行し、風俗  
 を觀察し冤枉(「エンワウ」) 無實の罪(を)を理め、政治の得失を勘「カンガ」へ、徳行を以て教導するを



任さす。

【受領】||ズリヤウ。↓中古皇政時代國衛に在りて吏務を執れる首席の吏員をいふ。即ち國衛に在りて吏務を司る吏員は是れ所謂國司であつてその國司は守、介、掾、目の四等の官全部を云ふのである。故に受領と云へばその長官即ち守、即ち國守を云ふ。但し時に受領と云つても國司全部を云ふ事もある。是は丁度國司が國守のみと意となる時と守、介、掾、目全部を云ふ時があると同じである。受領とは國司交替に方り前任者より國務を受領するの義なり。或は國守の赴任せざる時の權の守、又親王任國の介、又太宰府の權帥若しくは大貳等を稱する事あり。中世以後國司の制弛ぶと共に在京官にして國司を兼ね、或は國司に任ぜらるゝも任地に赴かざりしより、兼任遙授に對して此の名稱を用ふるに至れり。

【國司】||コクシ。中古以來朝廷よりの國司を治める地方官。其の政務を執る役所を國廳又國衛と稱し、その所在地をば國府と稱せり。國司は「クニノツカサ」とも訓む。國衛に在りて政務を執れる四等官を守、介、掾、目を總稱して國司と云ふなり。

【守護】||シニゴ。國司の外に武家より家人を遣はして國政をいろはしむるものにて源賴朝の時、始めて之を置きたり。

【目代】||モクダイ。堀河天皇以後、國守に任ぜられしもの、多くは京師にありて、目代を遣はして、國の事務を行はしめたり。また留守職とも云ふ。

【三八】 誓にも(京都の方も) 猶世の中静まりかねたるさまに聞ゆれば (静穩にならない様な噂さが隱岐の方に聞へたので)「平穩になつて終ふ」とは北條勢の爲に壓倒せられて官軍が影を潜めて終ふことを指したのである。よろづにおぼし慰めて、關守(警固の武士)のうちぬる(寝る)ひまをのみうかがひ給ふに(處が)しかるべき時(さうなる時節。日月地に落ち給はず天運循環してその時節)のいたれるにや、御垣守(禁中御門の守衛)にさぶらう(伺候してあるところ)のつはものども(武士ども)も、御けしきをほの心えて(御様子を略々悟つて)「後醍醐帝が此の隱岐から脱出しそうと御考へになつてゐる御様子を判然とはしないがうすく知つて」働き仕ふまつらむ(歸服して奉公しよう)と思ふ心つきにければ、さるべき限り(さう云ふ連中の者だけが。同志の者のみが)語らひ合せて、同じ月(元弘三年二月)の廿四日の曙に、いみじく(うまく)たばかり(計略して)かくろへ(かくして)めて奉る。(お連れ出し申した。)



# 神皇正統記

(室町時代)

北 畠 親 房

## 符 録

神皇正統記は南朝の忠臣北畠親房の著である。卿は村上天皇の皇子具平親王の皇裔であつて、後伏見帝の御代より後二條、花園、御醍醐、後村上の五朝に歴事し後醍醐天皇の御代には遂に大納言に任ぜられ正二位に敘せらるるに至つた。後、卿は皇子世良親王の傳に選ばれたが親王やがて薨せられるに及び悲歎遣る能はず遂に剃髮して一旦世を退かれた。其後無道の高時も天誅に亡ぼされて建武の中興が成り世運舊に復するに至り再び廟堂に參じて朝政に與つた。然るに尊氏謀叛の事あるや長子顯家卿は陸奥守に任ぜられ鎮守府將軍を兼ね義良親王を奉じて義兵を擧げたのであつたが正成義貞戰死して天皇吉野に入り給ふに及び遂に顯家は討死した。乃ちその年、次子顯信は更に陸奥介に任ぜられ鎮守府將軍を兼ねて義良親王を奉じ東奥に赴くに至つた。時に卿はこれを輔けて路を海上に執りしが、上總沖にて風波に遭ひ卿は常陸に漂ひ着した。卿は此の地に義を説き賊徒の誅伏に盡められたが孤忠敵せず再び吉野に尋れ入りて後醍醐帝に奉仕した。疊に顯信と義良親王とは伊勢に漂ひ到つたのであつたが、親王は行宮に還り給ひ後醍醐帝の崩御の後を受けて即位された。後村上帝が是の君である。卿は後専ら權要の位にあり

て朝權恢復に力められたが遂に空しく賀名生ん墓去せられた。卿は此の如き生涯を持つた人である。賦性文に秀で大義を辨へ名分に明らかに忠誠の他、餘念のなかつた卿が、一生此の如き天下争亂の渦中に投ぜられ、志す所は事毎に成らずかくて神皇の正しかるべき國の行末を案じ、如何にもして己が信ずる國體皇統の所論を縷述し去らんとしたのは當然の事云ふべきである。即ち此の書の内容は神代より後村上天皇に至るまでの上下約二千年(神皇正統記は一九九九年に上られてゐる)の歴史を敘し以て、神代より正しき理によりて受授し給へる皇統の事を記されたるものである。

## 神皇正統記序の一節

唯我國のみ天地開けし始より、今の世の今日に至るまで、日嗣を受け給ふ事邪ならず、一種姓の中におきても自傍より傳へ給ひしすら、猶正に歸る道ありてぞたもちましくける。これしかしながら神明の御誓あらたにして、餘國に異なるべきいはれなり。抑々神道の事は、たやすく顯さず云ふ事あれど、根元を知らざれば、みだりがはしき端さも成ぬべし。その弊を救はんために、卿か勸し侍り。神代より正理にて受け傳へる謂を宣へん事を志して、常にきこゆる事載せず。然れば神皇正統記とや名づけ侍るべき。(解釋篇參照)

皇國の學徒は歸する所國體永遠の美を彌益々宣揚發揮するに努めなくてはな



らぬ。神皇正統記を讀むに當り左の山田博士の一文最も適切なる参考なる文であるから次に掲げることとする。

〔山田孝雄博士。大日本國體概論、緒言〕

國體の宣明は國學の第一要義なり。國民教育の根本は國體を永遠に保持して失墜ならしむるにあり。今や國威入荒に洽く、宇内萬國皆我國體の特異の美を欽羨し、わが國運發展の勢の偉大なるに驚き、舉つて、之が研究を試みむと欲するもの如し。これ實に有史以來の最大快事にして、この聖世に生れ、皇恩の餘輝に霑へる我等草莽布衣の徒も亦中心實に欣欣たるものあり。然れども、其の今日あるに至れる所以を察せず、又將來如何に處すべきかを慮らずして、たゞ、現在の安逸に狃れ、鼓腹擊壤して、先憂後樂の眞義を知らざるの徒は、これ眞に國士を以てゆるすべからざるなり。

見よ。今日の昭代は實に天下の憂に先つて憂へ、天下の樂に後れて樂むを以て平生の志とせる幾多の志士仁人の苦心慘憺によりて擁護せられて初めて實現せられたるなり。今にして、安逸に狃れ苟且偷安を事とせば、後來臍を噬むの大患を生ずるが如き事なしといふべからず。それ一國の盛は其源衰時に生じ、一國の衰はその根盛時に萌すこと炳乎として、古今東西の史乘に明なり。今や有史以來始めて見るの盛時なり。人々若その根柢を忘れ、この昌平に狃れ、百年の長計を忘るゝが如きあらば、嗚呼それ何の面目ありて後世に對するを得んや。

古、逆臣足利尊氏あり、名を皇室に藉りて、私を逞くし、天下四分五裂の慘狀を呈するに至りぬ。この時に當りて、源親房慨然として之に抗し、長袖摺紳の身を以て軍旅に従ひ、遠く常陸にありて、神皇正統の大義を宣明して之を天下に示したりといへども、時既に遅し、衆官相率ゐて、尊氏に黨し、皇室の危累卵の如きに至りたり。それ若親房をして五十年百年の前に出でしめば建武の中興は決して、その根柢、まかく薄弱ならざりけむものを。當時天下の人心、たを皇室の尊ぶべきを知りて、大義の何たるをさとらず。かくの如き時にあたりて、一時に之を挽回せんとするは、隻手に洪水を支ふるに似たりといふべし。

それ思想の力や大なり。その影響や廣し。思想が、天下社會に弘く行はるゝに至るや、決して一朝一夕の故にあらず。之を培ふに人を要し、之を養ふに時を要す。悪思想然り。良思想然り。この故に悪思想を驅りて、良思想を植うることは一朝一夕の勢にあらざるを思ふべきと共に思想家として、識者として立つものは、一言一動その影響の意外の邊に意外の力にてあらはるゝあるを忘るべからざるなり。

余をして建武中興の業の成るべき生因を史上に描かしめば、承久前後に一大思想家出で皇室尊奉の大義を分明に天下に呼號せしめ、而して、之が繼承者は相ついで出で、遂に建武の中興に至らしめば、即ちかの事はしかく蹉跎を來すことなかりしならむと思はるゝなり。されどなほいふべき事あり、承久の亂は即廟堂に大權回取の目的ありしが故なり。爾後廟堂にはたえず、その論者出でたりしなり。然るによりて、かの中興は建武に至りて成りしなり。されど、



そは一旦にて又瓦解したるなり。その故は、世に識者をなかりしにあらず。又忠臣なかりしにあらず。たゞ國民の中堅たり、最大勢力たりし武人の階級にこの信念なかりしによるなり。後の志士この所に著眼するを要す。

源親房の神皇正統記は日本最大の文章なり。これ、當時にありては何等の反響を生ぜざりしが如しといへども、思想の力は偉大なり。後來水戸に大日本史の編著あるに至りしその根源の精神は即神皇正統記の精神を發揮せるにあり。而、その正統記を編著したりし常陸の地にこの學の起りしもの蓋偶然ならざるものあるべし。

水戸の大日本史は、近世の國家的運動の最大にして又最長く繼續したる事業なり。この書の偉大なる影響は幾多の志士をして、奮起せしめ、以て今日の昭代を實現せしむるに至りぬ。その大精神大抱負これ亦日本有史以來の偉觀なりとす。而その實にかくの如くなるに至りしものは實社會の中心たる志士のこれが爲に活動せしによりたるものなることを忘るべからず。單に上流のみの活動ならば、或は、建武の覆轍を踐みしやも知るべからず。當時の實力は大名にあらずして、その下にある士族にうつりたりしなり。その最大勢力の士族が回天の事業に身命を賭して努力したること、これ即この大事業の成立せし近因なりとす。後の國家に志あるの士は、この大眼目を忘るべからず。

今や國家的意識ならざるにあらず。尊王的思想盛ならざるにあらず。されど愚を以て見れば、人々多くは奢侈に慣れ、榮華に誇り、官職利祿に汲々として、眞に國士を以て許すべ

きもの頗稀なるに似たり。蓋多士濟々たる聖世必その人に充ち充ちたらむ。されど、愚の眼界の狭き、未だ國士を以て相許すべきもの偉人に接することなきを遺憾とす。若、果して、愚が見るものの如くならば、百年の後あ、誠に懼るべし。

それ、天下の事一朝一夕の故にあらず。霜を踏みて堅氷至るの習ひ、わが臥榻のうち他人の鼾睡を容るゝことあらば、あ、何の顔ありてか祖先の威靈に答ふべき。はた又後世に對して何の辭を以てか對ふべき。

古は緯を恤へざりし婦人ありき。堂々たる男子にして、天下後世の事をしも、馬耳東風に附するが如きものあらば、事甚笑ふべきの進さいふべきのみ。愚もさより寡聞陋識天下の憂に先つて憂ふるの抱負なし。されど、竊に期す。鼻祖家城主水正、主家北畠氏の亡ぶるにあたり、孤忠憤闘遂に川俣山にて自盡してより、その脈々の生氣今なほ余が腦中より迂りて、筆もつ手にも物いふ口にも流るゝことを。生きて祖先の遺志を繼ぐことを得ずんば、何の面目ありてか祖先在天の靈の昭鑒を受くることを得んや。ここに神皇正統の大義を宣明して、以て世の同志に示さむと欲するなり。

尙ほ大町桂月先生著神皇正統記評釋の序文の一節は先生獨特の精達流麗の文を以て記されてあらが前述の如く親房卿無比の忠誠が凝つて以て正統記となつた由來を明瞭に記されてあり、且つは作文好適の参考ともなる故此處に謹



掲することとする。

神皇正統記の因由

(大町桂月氏、神皇正統記評釋の序一節。)

惜しい哉、建武中興の終を全うせざりしことや。後醍醐天皇英邁の資、不屈不撓の精神を以て承久以來の遺志を継ぎ幕府を倒して王政を復古し給ひしは、千古の盛業也。然るに足利尊氏北朝を擁立して私を管み、天下の權を竊めり。嗚呼いつの世までも小人は利に喰り、君子は義に喰る。利を追ふもの足利氏に蝟集し、勤王の諸將前後に歿して、南風競はず。雲井の櫻は咲けども吉野や雲井にあらず。石ばしる音御夢を驚かし、山鳥空しく還幸を啼く。劍を按じて崩し給ひ、御陵南面の例を破りて北闕を望む。後世史を讀む者、悲憤切齒に堪へず。まして當時輔佐の重臣にして精忠無双なる北畠親房の心の中こそと思はるるなり。親房の熱心凝つて神皇正統記となれり。

【一】

震旦(支那の古稱)は殊に書契を事とする國、書契とは書籍や文字の意と見てよい。一体書契とは文字を記したる約束の證信のこと。轉じて古の文字にも云ふ。(格別に古より書籍も作られ文字で何彼もなく記録する事をする國であるがの意。)なれど、世界建立(支那國土生成の源)をいへる事健ならず。備書には、伏羲氏(王皇の一。庖犧とも云ひ、蛇身人首にして書契を造りて結繩に代へたる等功多し。)とい

【二】

ふ王よりあなたをばいはず。但、異書の説に、渾沌未分の形、(渾沌とは物の分明ならざる形。天地が渾沌として未だ分明でなかつた形態)(十に就て述べ十)(十又十)天地人の始をいへるは神代の起に相似たり。或は又盤古といふ王あり。(盤古王のことは支那述異記と云ふものの中に詳しく述べてある。昔盤古氏之死也、頭爲四岳目爲日月脂膏爲江海毛髮爲草木……等又……盤古之君龍首蛇身、嘘爲風雨、吹爲雷電閉目爲晝閉目爲夜……等あり。)目は日月と成り、髮は草木と成れりといへる事もあり。それより下つた、天皇、(木徳の王、兄弟十二人)地皇、(火徳の王、姓十一人)人皇、(兄弟九人)五龍(兄弟五人龍に乗りて上下す)等の諸の氏打續きて多くの王あり。其間數萬歳を経たりと云ふ。

我が朝(國の天皇)の始(十即ち神武天皇十)は天神(アマツカミ)天照大神の種(御血統)を受けて國土(國家)を建立し、天祖(アマツミオヤ)天地開闢の時初めて出でましたる神であつて、日本書紀に謂ふ所の「國當立尊ニクニトコタチノミコト」である。古事記には「天御中主神ニマメノミナカマシノカミ」さてある。よりこの方(以來)繼體(皇位繼承)たかはず(邪ならず)唯々一種(血統は御一つ)ましまして、天地の開けし初より、今の世に至るまで、天津日嗣(皇位)を受けたまふこと、よこしまならず、一種姓(只一つの御血統)の中におきても、自ら(何かの關係によりて不圖自然)傍より(傍



系の皇子よりもてその方が(十皇位を十)傳へ給ひしすら、猶正しきに歸る(直系に歸る)道(常例、規則、きまり)ありてぞ(十皇位を正しく十)保ちましましける。これしかしながら神明(天祖天照大神)の御誓(御誓ひの御神勅)(十の靈驗が十)あらた(顯著)にして餘國にも類なきいはれ(理由、所以)なり。

参考

……神皇正統記の本文次の如し。

我が朝の初は天神の種を受けて世界を建立する姿は天竺の説に似たる方もあるにや。されども是は天祖より以來、繼體違はずして、唯一種にまします事、天竺にもその類なし。かの國の初は民主王も、衆のために選びたてられしより相續せり。又世下りては、その種姓も多く亡ぼされて、勢力あれば下劣の種も國主となり、剩へ五天竺を統領する族もありき。震旦又殊更みだりがはしき國なり。昔世すなほに道正しかりし時も、賢を選びて授くる事ありしにより、一種を定むる事なし。亂世になるまゝに、力を以て國を争ふ。かゝれば、民間より出でて位に居たるもあり、戎狄より起りて國を奪へるもあり。或は累世の臣としてその君を凌ぎ、終に讓を得たるもあり。伏羲氏の後、天子の氏姓を替へたる事既に三十六、亂の甚だしき、いふに足らざるものなや。唯我が國のみ、天地開けし初より、今の世の今日に至るまで、日嗣を受け給ふ事邪ならず、一種姓の中におきても、自ら傍より傳へ給ひしすら、猶正に歸る道あり。

りてぞ、保ちましましける。是しかしながら、神明の御誓あらたにして、餘國に異るべきいはれなり。震旦||支那の古稱。伏羲氏||支那古代の帝王、三皇の一。天竺||印度の古稱。

【三】抑も神道の事はたやすく顯さず(神道の事は畏れ多い事であるから容易に述べ立ててはならぬ)と云ふ事

あれど(……と昔から云はれてゐるけれども)根元(根本の事)を知らざれば、みだりがはしき端(正邪を亂り誤つて來る様になる端緒)ともなりぬべし。その弊を救はむために聊か勸し(シルシ)刻む事。こゝは書き記すこと。侍り。神代より正理(正しき一定の理)にて(十皇位を十)受け傳ふる(受授し給へる)いはれ(理由。こゝのわけ)【此のいはれを事と見てもよい。大町桂月氏の評釋には事と解釋してある。いはれを證據と云ふ様な意味に取れば證據として擧ぐべき事實の意に解せられるのも當然であらう。ごちらでもよいと思ふ。】を宣べむ事を志して、常にきこゆる事(普通世上知れて居る事)は載せず、然れば(斯様に正しき理にて皇位を受授せられるところのわけあり、則ちその理由、乃至は其の理由を根據として君位の正問を論じたるが故に)神皇正統記とや名づけ侍るべき(名づけるべきでありませう。)

【(1)正理とは如何。】……それは即ち天祖の神勅に宣はせ給へる如く葦原の千五百秋の瑞穗の國は天祖の御子



孫の王にてましますべきの地である事一つなり。然して皇位のまします所神器なかるべからず。神器のまします所皇位のまします所なりと云ふ、此れ更に一つの大原理なり。蓋し神勅に示されたる如く寶鏡は常に與に床を同じくし殿を共にさるべきもの、固より皇位に在します君の、他の寶劍、寶璽と共にその御しるしをなし給ふべきものである。何となれば三種の神器に就きての神勅【此の三種の神器に就きての神勅に就きては神皇正統解中には、天照大神は皇孫に勅せられて曰はく、この鏡の如くに分明なる明德を修して天下に君臨し給へ。又此の八坂瓊の曲玉則ち多くさん長く續いてひろがつてある曲つた形の玉の長く廣い様に行き渡らぬ限なき様非常に立派なる靈妙の御心をもて天下を治め給へ。又此の神劍を提げてまつるはさるもの歸服せざるものを平げ給へと宣へりとの意を載せて述べてある。】は我が大君の國を保ち給ふべきの道を明示し給へるもので剩へその意を神器の上に表示されたのである。再び云ふ、神器は此の如くにして神國をらしめし給ふためらみ、こゝに「天皇」の道を表示せられたもので皇位のまします所に神器なかるべからず、神器のまします所皇位のまします所である。此れ神即ち神代より皇位繼承の違ふことなき正理なのである。

参考

神皇正統記中一節

此の國の神靈として、皇統一種ただしくまします事、誠にこれ等の勅にみえたり。三種の神器世に傳ふ事、日月星の天に在るに同じ、鏡は日の體なり、玉は月の精なり、劍は星の氣なり、深き習ひあるべきにや抑かの寶鏡はさきに記し侍る石凝姥命の作り給へりし八咫の御鏡、玉は八坂瓊の曲玉、玉屋命作り給へる也。劍は素盞烏尊の得給ひて大神に奉られし聚雲の劍なり、この三種につきたる神勅は、まさしく國を手持ちますべき道なるべし。鏡は一物をたくはへず私の心なくして、萬物を照すに是非善惡の姿あらはれずと云ふ事なし。その姿に従ひて感應するを徳とす。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を徳とす。智慧の本源なり。この三徳を翕受けずしては天下の治まらんこと誠に難かるべし。神勅明にして、詞約かにむれ廣し。剩へ神器にあらはし給へり。いと忝なき事にや。中にも鏡を本とし、宗廟の正體とあふがれ給ふ。鏡は明を形とせり。心性明かなれば、慈悲決斷はその中にあり。又まさしく御影をうつし給ひしかば、深き御心を留め給ひけんかし。天にある物日月より明なるはなし。仍りて文字を制するにも、日月を明とすといへり。わが神大日の靈にましますば、明德を以て照臨し給ふ事、陰陽におきてはかりがたし。冥顯につき頼みあり。君も臣も神明の光胤を受け、或はまさしく勅を受けし神達の苗裔なり、たれかこれを仰ぎ奉らざるべき。この理をさとり、その道に違はずは、内外典の學問も爰に極まるべきにこそ。されどこの道の



弘まるべき事は、内外典流布の力なりと云つべし。魚をうる事は網の一目によるなれど、衆目の力なければ、これを得る事難きが如し。應神天皇の御代より儒書を弘められ、聖德太子の御時より釋教を盛にし給ひし、これみな権化の神聖にまじませば、天照大神の御心を受けて、わが國の道を弘め深くし給ふなるべし。

【四】凡そ男夫は穡圃（カシヨク）農業。【稼】穀物を植ふること。【穡】穀物を取り入れること。【つとめて、己も利し、人に與へても飢ゑざらしめ、女子は紡績（糸をこしらへること）を事として、自らも衣、人をも暖かならしむ。賤しきに似たれども、人倫（人の道）の大本なり。天の時（天のめぐりによりて出来る氣候の寒暑、風雨の多少等）に隨ひ、地の利（土地の高低や肥瘠等）によれり。（よつて仕事をしてゐる。）この外商沽（商賣）の（をして）利を通ずるものあり、（品物を有無相通する様に便利を圖るものあり）（十又十）工巧のわざ（種々工藝）を好むもあり、仕官に（官途に就くことに）志すもあり。これを（十士農工商の十）四民といふ。

参考

神皇正統記一節——（前文に直ちに續く文である。）上略。……是を四民といふ。仕官するに就きて、文武の二道あり。坐して以て道を論ずるは、文士の道なり。この道に明かならば、相とすに堪へたり。征きて以て功を立つるは、武人のわざなり。このわざに響あらば、將とす

るに足れり。されば、文武の二は暫くも捨て給ふべからず。「世亂れたる時は、武を右にし、文を左にす。國治まれる時は、文を右にし、武を左にす。」ともいへり。かくの如く様なる道を用ゐて、民の愁をやすめ、各争なからしめん事を本とすべし。民の賦斂を厚くして、自の心を恣にすることは、亂世、亂國の基なり。我が國は皇種のかはる事はなけれども、政亂れぬれば、曆數も久しからず、繼體も違ふためし、所々に記し侍りぬ。況や人の臣とて、その職を守るべきにおきてをや。

抑、民を導くにつきて、諸道諸藝皆要樞なり。古には詩、書、禮、樂を以て國を治むる四術とす。本朝は四術の學を立てらるゝ事確かならざれども、紀傳、明經、明法の三道に、詩、書、禮を攝すべきにこそ。算道を加へて四道といふ。代々に用ゐられ、その職を置かるゝ事なれば、委しく記すにあたはず。醫、陰陽の兩道、又これ國の至要なり。金石絲竹の樂は四樂の一にて、専ら政をする本なり。今は藝能の如くに思へる、無念の事なり。風を移し、俗をかふるには、樂よりよきはなしといへり。一言より五聲十二律に轉じて、治亂を辨へ。興衰を知るべき道こそ見えなれ。又、詩賦、歌詠の風も、今の人の好む所、詩學の本には異り。然れども、一心より起りて、よろづの言の葉となる。末の世なれども、人を感じしむる道なり。是をよくせば、僻をやめ、邪を防ぐ教なるべし。

か、れば、いづれか心の源を明らめ、正に歸る術なからん。輪扁が輪を削りて、齊の桓公を教へ、弓工が弓を作りて、唐の太宗を悟らしむる類もあり。乃至、圍碁、彈碁の戲までも、



愚なる心を治め、軽々しきわざを止めんがためなり。但しその源にもさづかずとも、一藝は學ぶべき事にや。孔子も「飽食終日、心を用ゐる所なからんよりは、博奕をだにせよ。」と侍るめり。まして一道を受け、一藝にも携はらん人、本を明らめ理を悟る志あらば、是より理世の要ともなり、出離の計ともなりなん。一氣一心にもさづけ、五大五行により、相尅相生を知り、自も悟り、他にも悟らしめん事、萬の道その理一つなるべし。 「卷四」

風を移し云々シフルヘテ移シ風易シキハ俗、莫シキハ善シキハ於樂ヨリ。(曲禮) 五聲シキハ宮、商、角、徵、羽の五音。

十二律シキハ黃鐘、大簇、姑洗、蕤賓、夷則無射の六律及び大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應

鐘の六呂。飽食終日云々子曰ク、飽食終日、無ク所用ケル心チ、難イカナ矣哉ル。不レ有二博奕者トイフ乎。

スハ之猶賢ニ乎ヤムニ。(論語)

【五】(第七十一代の天皇即ち↓+)後三條天皇、東宮(皇太子)にて久しくおはしましたければ、しづかに和漢の文(學問)調密(顯教。密教。顯教は天台宗。密教は眞言宗。)【顯教と云ふは天台宗の教理は明瞭であるより言ひ、密教とは眞言宗の教理は深奥な故にかく云ふ。】の教(教義)までも聞かず知らせ給ふ。

詩歌の御製も、あまた人の口に侍る(言ひ傳へられてゐる)めり。(様である。)後冷泉(第七十代の天皇)のすゑさま(頃)世の中おれて(盜難、火災、兵亂等あつて)民間のうれへありき。四月(治承四年四月)より位に居たまひしかば(十早速御聖徳の程もあらはれた故でせう+)秋のまきめ(收穫時)にも及ばぬ

に(及ばない内に)世の中のなほりにける(泰平に歸した程の)有徳の君にてましましたけるとぞ申し傳へ侍る。

【六】義朝(+は+)重代の(祖先より代々の累代と云ふに同じ。祖先より代々の武臣なりとの意。)兵(武臣)たりし上、保元の(+亂の+)勳功すてられがたく侍りしに(實に立派な勳功があつたのであるのに)父(爲義)の首をきらせたりし事、大なる科(トガ罪)なり。古今にも(+そんな例を+)きかず。和漢にも例なし。【神皇正統記の、これより少し前の所の本文、保元の亂のなりゆきを叙せる所に「……………武士共多く誅にふしぬ。その中に源の爲義と聞えしは義朝の父なり。いかなる御志か有りけん。上皇の御方にて義朝と各別になりぬ。餘の子共は父に屬しけるにこそ。軍破れて爲義も出家したりしを義朝預りて誅せしこそためしなき事には侍れ。」とあり。その註に今泉定介氏曰く「義朝父爲義を斬るに忍びず、屢々その死をゆるされんことを請ひ奉りしかども許されず、清盛は其の叔父忠正を斬りて、義朝に父を斬らんことを迫る。義朝やむを得ずして、家臣鎌田正清をして父を弑せしめぬ。此の時、爲朝はのがれて筑紫に奔らんこそしが、病にかかりて浴中に捕へられ、朝廷之を斬らんこそす、しかれども非常の壯士なるを以て死一等を減じ、臂筋を斷りて、伊豆の大島に流す。居ること五旬にして臂力舊に復せしかば……………」とあり。】



(十義朝は自分の十) 勳功に申し替ふるとも(罪を償ひ度しき願ふとも)(十又十) 自ら退くとも(自身が  
辭職しても) などが父を申したすくる道なかるべき。名行(君に忠に親に孝と云ふが如く名に則したる行  
あるを云ふ) かけはてにければ、いかてか終にその身を全くすべき。滅びぬる事は天の理なり。

【七】 白河(第七十二代の天皇) 鳥羽(第七十四代の天皇) の御代の頃より 政道(政治の道) の古きすがた(古  
き昔の様子。則ち天皇が天下を統治せられる権利の立派に行はれてゐた古の様子) やうく 爽(十即ち  
院政の御代となり十)(十第七十七代の天皇即ち) 御白河の御時 兵革(戦争。【兵】は刀。革【は甲冑。  
後白河天皇の御代には保元平治の亂有り。】おこりて 姦臣(姦惡の臣。平清盛等を指す。) 世をみだり、天  
下の民ほとほと(殆んど、全く) 塗炭におちにき。【塗炭の苦に落ちにき。】の意。「塗炭の苦」は「泥  
土にまみれ炭火の中に陥る様な苦しみ」と云ふので非常なる苦しみ。 頼朝(一臂を擲ひて(一力を出して。  
俗に云ふ「一肌ぬいで、) 其の亂を平げたり。王室は 奮(奮) にかへる(古き昔の姿、即ち天下統治の大權に  
就ては名だけでなくつて實際も盛んなる勢力を持つてゐられた昔の様子に復する) までは なかりしかど  
(即ち新たに頼朝は鎌倉に幕府を開いて武家政治と云ふものを起した。) 九重(宮中) の塵(戦亂) もまぎ  
まり、萬民の刷(憂ひ) もやすまりぬ。上下 堵を安くし(安心して暮し) 【安堵】と云ふ熟字がある。

「堵」は「垣」なり。即ち「垣」の中で安心してゐる」と云ふ意味よりして凡べて「安心して日を過す  
こと」に云ふのである。】 東より西よりその徳(徳政) に服(降服) せしかば(十源氏の正統たる十) 實  
朝なくなりても(十其際源氏の正統なくなりたりて源氏に對して) 背く者ありとは聞えず。(十  
幕府はかやうに天下の政治には貢献する所の大きい一面が有つたのである。であるから、今北條氏が專横  
の政を行つてゐるから朝廷が之を討滅されんとするは道理ある事とも思はれるのであるが然しながら) ↓  
十朝廷に於かせられては) ↓十) 此(幕府の今迄の徳ある政治) に勝るほどの徳政なくして、いかてか  
たやすく(十幕府が十) 覆さるべき。(十又十) たとひ 失はれぬべくとも(幕府の政權が失墜されて終ふで  
あらうとして) (十即ち朝廷に政權が還るとして) (十前にも述べた如く又世亂れて十) 民安かるま  
じくは上天(天の神様) もよも(十討幕の企てには十) くみし給はじ。

【八】 大方(大体に於て) 妻時、心正しく、政(マツリゴト) すなほ(正直) にして、人をばぐくみ(養育する。  
此處では愛撫の意にこりて可。) 物(人)。(又、「凡べて物事に關して身分不相應の奢りをしてしなむと解釋  
せるもあり) におこらず(高慢ならず) 公家(朝廷) の御事を重くし(重大事と考へて鄭重にし) 本所の  
わづらひ(壯園の支配者の弊害。壯園の支配者が横暴無理をして人民を苦しめるその弊害。) をとどめし



かば、風の前に塵なくして（風の吹くに當りては塵が一つとしてその跡を止めざるが如く争亂はおさまつて終つて）天の下すなはち静まりき。かくて年代をかきねしこと。ひとへに泰時が力とぞ申し傳ふめる。

（此處の「めり。」は極めて軽い推量である。嚴格に譯すれば「申し傳へてゐる様である。」と譯さればならぬが「語り傳へてゐる。」位に譯しておいてもよいであらう。）※その都度注意する事であるが、文法上より嚴譯する時譯した文がごうもしくり心持ちが表はれない爲に即ち文がごうも心持ちの上から見て不自然であるために文法上の嚴譯を離れて譯す場合は一應自分の態度を闡明しておく必要がある。何と云ふれば文法より離れて譯してゐるけれども譯者は文法を無視したのでも、將又文法上より探るべき解釋を辨へなかつたのでは決してなくつて一つの見識、見解、態度、を以て、此く譯したのであると云ふ事はつきりするからである。】陪臣（俗に「又げらひ」として久しく權（天下の政權）を執ることは和漢兩朝（兩國と云ふ程の意）に先例なし。その主たりし頼朝すら二世をば過ぎず。義時いかなる果報（幸運）にか、圖らざる家業（執權の職）をばじめて兵馬の權（天下の政權。「兵馬の權」と云ふのは「全國の軍隊を統率するの權」を云ふ。）を執りし、ためし難なることによ。

【九】凡そ保元（第七十七代後白河天皇の御代の年號。保元の亂は保元元年に崇徳上皇が重祚せられんとして起

された亂）平治（第七十八代二條天皇の御代の年號。平治の亂は平治元年には源義朝と藤原信賴と相結びて起せる亂）よりこの方のみだりがはしき（世の亂れ）に（十於て十）頼朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましければ、（なかつたならば）日本國の人民、いかなりなまし。（如何になつて終つたであらうか。随分ひどい破目に陥つたであらう。）このいはれをよく知らぬ人は、故もなく皇位の衰へ、武威（武家の勢力）の勝ちにけると思へるはあやまりなり。

【一〇】固より人臣としては、君をたふとび、民を憐び、天にせぐくまり地にぬき足し（天に踞り地に踏し）と書き「踞天踏地」キョクテンセキチ」と云ふ語有り。其の意は「天は高いのにも低い様に思つて脊を屈して歩き、又地は厚くて廣いのであるから所謂濶歩してよいにもからはらす拔足して歩くと云ふので、凡べて恐れ慎しんで行動する様子。）日月の照すを仰ぎても（見ても）（十自分は自分の十）心のきたなくして（十あの日月の照されてゐる恵分の十）光にあたらさらむことを怖ぢ、（心配して心の邪なることなき様にし）雨露の（が）（十草木に恵分を十）施すを見ても、身の正しからずして、恵にもれむことを顧みるべし。（その雨露の恵にも比すべき君の恵に浴する事の無い事を注意せよ。身を正しくせればならぬ。）朝夕に長田、狭田（「ナガタ」「大田」の意。「サダ」「小田」。共に天照大神の田の意であるが此處では



單に田を尊んで云つたのである。)の稻の種を食ふも皇恩なり。晝夜生井、樂井(「イクキ。サクキ。」共に井戸をほめて云ふ語。)の水の流を呑むも神徳なり。これを思ひも入れず、あるにまかせて慾を慾にし、私を先として公(廷朝又は社會)を忘るる心あるならば、世に久しき(世に久しく富み榮える)理あらじ。いはむや國柄(國家の政權)を執る仁(人)(+即ち攝政、關白、大臣等の身+)にあたり兵權(兵馬の權)を預る人(↓+即ち將軍等の身+↓)として、正路をふまさらむにおきては、いかてかその運を全ふすべき(必ず中途に於て破滅の運に陥る。こゝであらう。)

【一一一】「言語は君子(學徳共にすぐれたる人)の樞機(最も肝要なもの。樞||戸のクルル。機||石弓の引金。)なり。」と云へり。あからさまにも(假にも)君をないがしろにし(輕蔑した様な言語を用ひ)(+又+)人におこる(+が如き言辭を弄する↓+)ことあるべからぬことにこそ。さきにも記し侍りし如く、堅き氷は霜を履むよりいたる(堅い厚い氷も始めから直ぐ出来るものでなく、霜を履む程度の寒さから次第に始まるものである)ならひ(世の常)なれば、亂臣、賊子(世の中を亂したり、君父を弑殺するが如き大悪人)といふものは、そのはじめの心、言葉を慎まざるより出てくるなり。(+)それと同じわけがらで+)世の中の衰ふかと申すは日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人の心のおし

くなり行きて、末世(道徳人情類廢せる世)とはいへるにや。(云ふのであらう。)

【一一二】凡そ王土(天皇の統治される國)にはらまれて、(生れて)忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。かならずこれを身の高名(手柄)と思ふべきにあらず。然れども(此の「然れども」が如何なる文の續き合ひをするかをよく考へて見る。こゝ大切なり。「身の高名手柄と考ふべきではない。随つて朝廷も何等別段之を賞せられればならぬ程のものでもない然しながら。後の人を勵まし、其の跡(子孫)をあはれびて(可愛さうに思はれて)賞せらるるは、君の御政なり。下として(臣下として)きほひ争ひ(種々と思賞に預る上のこぜりあひ、競争)申すべきにはあらぬにや。(ないのではなからうか。無いであらう。)ましてさせる(大したる。然るべき。))功なくして、過分の望みをいたすこと、みづからあやぶむる(我と我が身を免險にする)はし(端緒)なれど前車の轍を見ることは(前人の過失、失配を見て之を再び繰返さない様に注意する事は)【史記「前車ノ覆ハ、後車ノ戒。」】誠にありがたきならひなりけむかし。(誠にさうする事は困難なる事柄であつたでせう。人情の常としては誠にさうする事はむづかしい事であつたでせうよ。)

【一一三】又の年戊寅(延元三年にあたる。)の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王(義良親王。)を先立て申し、重ねてうち上る。(顯家は延元元年尊氏謀叛の時陸奥より大兵を率ゐ來りて官軍を合せて大いに賊軍



を破りて尊氏西走するの後陸奥に還り居たるなり。尊氏鎮西の兵を聚めて再舉するに當りて乃ち重ねてうち上りたるなり。海道（東海道）の國々を悉く平けて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になむ著きにける。それより所々の合戦あまた度、互に勝負侍りしに同五月和泉の國石津といふ所にてこの戦に、時や至らざりけむ、（時運が到來しなかつたのであらう。）忠孝の道ここに極り侍りにき。（賊を誅する忠の道も誠忠に燃ゆる父の遺志を奉ずる孝の道も此處に盡きてしまつた。戦死をした。）【大町柱月氏は此の條を評されて、顯家戦死の一條……中略……戦死の語を用ひずして忠孝の道ここに極まり侍りにきと云へるは親房の尊き心も忍ばれて、千古の名文也と云はれてゐる。實際顯家の恨みは又同じく親房卿自身の恨みであつたらう。忠孝の道此處につく……の語は卿自らの血の出る様な歎聲感慨に外ならぬと自分も思ふ。】（十かくて身は苔の下に埋つてしまつた。戦死してしまつたが十）苔の下に埋もれぬ物とは、唯いたづらに名をのみぞ留めてし。（唯々徒らなる即ち成巧したとも思はれない名のみが残つた事であるよ。）心うき世にも侍るかな。

【(3)苔の下に埋もれぬものとは……】……一体苔の下に埋もれぬものとして名を留めた、と云へば身は

死しても千載朽ちせぬ芳名は史上に留め得たこと云ふ様な意味となるのであるが此處は無論さういふ考へ方では決してない。埋もれぬものとしてとはさか又、いたづらにさか、名をのみぞ、さか云詞から推して考へられる。いたづらにと云ふ語は自分又はその人に取りて役にも立たない時に云ふ語である。此處では本人顯家より云へば朝敵膏肓の事全きを得ず中途にて苔の下に朽ちる事は全く残念であり意滿つる事無き恨み故いたづらなる名のみと云つたのであらう。固より本人より云へば徒らなる名であり本意にあらざるべし。されど是れ一方より云へば固より天晴千載竹帛に芳しき名を垂れたるに於て疎なき事實である。更に又此の語の意味には君臣の大義の名の成らざるを恨みたる情の表はれたるは前述の如く、固より義成らざるを恨むのである。生を惜むものではない。然し此の徒らなる名のみ……の語中又一方人の親の情としての云ひ知れぬ哀音の微妙なるものこもれるを感ずるのである。

【一四】七月（延元三年七月）の末つ方陸奥の皇子（陸奥の大守義良親王。後御即位ありて後村上天皇と申し奉る。）伊勢に越えさせ給ひて神宮に事の由（此れは前述してあるところの此の度東の方へ更に朝敵鎮撫に向はさせられること、又は同じく記してある様に愈々東宮に立たせ給ふべき旨を御受けになつた事等であらう。）



【その事を記されたる神皇正統記の條には、諸の君の御資格で東國に向はれては道の程則ち途中もかたじけなかるべし。則ちうるさい事が多いであらう。であるからそれは陸奥の國に御着の上で發表されよと御きかせがあつた等と述べられてある。】を啓して御船の續ひ（出發の用意）し九月の初機を解かれしに十日あまりの事にや上總の地近くより空の氣色おどろしく（恐ろしく）海上荒くなりしかば又伊豆の崎といふ方に漂はれしにいと波風夥しくなりて數多の船行方知らずなりけるに皇子の御船は降りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣はもとより御船に候ひけり。同じ風のまぎれに（まぎれとは分らなくなつて終ふこと。此處では同じ風で進路を失つて終つての意。）東を指して常陸の國なる内の海に着きたる船ありき。【此れは著者自身の船であらう。】方々に漂ひし中にこの二つの船同じ風にて東西に吹分けらる。末の世には珍らかなる例（後世には稀なる例）にぞあるべき。

【一五】 さても（さてさて。「も」は感歎。）舊都（京都の朝廷。北朝。）には戊寅（ツチノエトラ）の年の冬改元（年號を改めて）して曆屬とぞいひける。芳野の宮（芳野の朝廷。南朝。）には、もとの延元の號なれば、國々もおもひおもひの號なり。（南朝に屬する國には南朝の年號を用ひ北朝に屬する國では北朝の年號を用ひると云ふ様なわけで國々思ひ／＼の年號を用ひて居たわけである。）もろこしにはかかるためし多けれ

ど、此の國には例なし。されど（十南北朝が分れてかく思ひ思ひの年號を用ひ初めてより既に十）四とせにもなりぬるにや（四年間にもなりましたでせうか。もう四年も續いたせせう。）（十一）体思ふに十）大日本島根（ヤマトシマネ。日本全國）はもとより皇都なり。（無論、日本國土内でさへあれば何處でも皇都になり得るわけであります。）内侍所（ナインシドコロ。八咫鏡。今は専ら「賢所」と申し上げる。一体「内侍所」さか「賢所」さか申し上げるのは神鏡を直接に申し上げるのは長いので奉安申し上げる御殿の名前をて稱呼し奉るのである。）も、神璽（八坂瓊曲玉）も芳野におはしませは（芳野にお在しになるのであるから）いづくか（いづくんぞ。どうして）（十吉野が十）都にあらざるべき。（皇都でない事があらうか。吉野は當に正しい皇都である。随ひては一國に二つの皇都の在る理なく京都は正しき皇都ではないのである。）さても（十延元四年の—十）八月十日あまり六日にや、御門（ミカド）〔後醍醐天皇〕秋霧におかされさせ給ひて（秋の時候の爲めに御あてられ遊ばされて）かくれましましぬとぞ聞えし。（ミ誠にかう云ふ事でありましたよ。）寢「又」るが中なる夢の世（寢て居る間の夢の様にはかない、頼み難い、常ならぬ世）（十の事故そのはかなさは—十）今にはじめぬならひとは知りながら、かずかず（天皇御在世中の數々の事が）目の前なる心地して、（十感慨無量で—十）老の（老人の眼を濕す）涙も（十しとぎで—十）か